

AZAMI ZAWA

薊沢 II 琵琶坂 VI

中原遺跡群
NASHI NO KI

梨の木 II 宮の上 II

枇杷坂遺跡群
BI WA SAKA

宮の上遺跡群
MIYA NO UE

長野県佐久市野沢薊沢遺跡第2次, 岩村田琵琶坂遺跡
第6次, 中込梨の木遺跡第2次, 横和宮の上遺跡第2次

発掘調査報告書

1989

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

総　　例　　言

- 1 本書は、長野県佐久埋蔵文化財調査センターの昭和63年度事業、薊沢遺跡第2次、枇杷坂遺跡群琵琶坂遺跡第6次、中原遺跡群梨の木遺跡第2次、宮の上遺跡群宮の上遺跡第2次の発掘調査報告書の合冊本である。
- 2 調査委託者 薊沢II・琵琶坂IV遺跡 長野県教育委員会高校教育課
梨の木II遺跡 佐久市土地開発公社
宮の上II遺跡 長野県佐久建設事務所
- 3 調査委託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 調査所在地 薊沢II遺跡 (NAZII) 佐久市大字野沢449-2
琵琶坂VI遺跡 (IBZVI) 佐久市大字岩村田991
梨の木II遺跡 (NNNII) 佐久市大字中込字梨の木
宮の上II遺跡 (YMMII) 佐久市大字横和字宮ノ上
- 5 編集分担は下記の通りである。また原稿執筆分担については各遺跡の例言に明記してある。
薊沢II・琵琶坂VI遺跡 高村博文・助川朋広 梨の木II遺跡 翠川泰弘
宮の上II遺跡 小林真寿・竹原学
- 6 本書及び薊沢II・琵琶坂VI・梨の木II・宮の上II遺跡出土遺物、図面等のすべての資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、野沢・岩村田・中込・横和の各地区地元の方々には発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただき、また、報告書作成にあっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所、宇賀神誠司、白田武正、河西克造、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、島田恵子、堤隆、花岡弘、福島邦男、丸山歎一郎、百瀬忠幸、森泉かよ子、由井茂也
(敬称略　五十音順)

AZAMI

薊

ZAWA

沢 II

枇杷坂遺跡群

BI

WA

SAKA

琵

琶

坂 VI

長野県佐久市野沢薊沢遺跡第2次・岩村田琵琶坂遺跡第6次
発掘調査報告書

1989

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

目 次

例 言

凡 例

第1編 斎沢II遺跡

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機..... 1

第2節 調査日誌..... 2

第III章 基本層序..... 3

第IV章 遺構と遺物

第1節 土 坑..... 9

第2節 構造遺構..... 10

第3節 区出土遺物..... 13

第V章 調査のまとめ..... 14

第2編 琵琶坂VI遺跡

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機..... 19

第2節 調査日誌..... 19

第II章 調査のまとめ..... 25

写真図版

琵琶坂VI遺跡

第12図 琵琶坂VI遺跡の位置..... 20

第13図 琵琶坂VI遺跡地形及び発掘区設定図..... 21

第14図 琵琶坂 I ~ VI遺跡全体図..... 23

挿 図 目 次

斎沢II遺跡

第1図 斎沢II遺跡の位置..... 1

第2図 斎沢II遺跡基本層序模式図..... 4

第3図 斎沢II遺跡地形及び発掘区設定図..... 5

第4図 斎沢II遺跡E・F地区遺構全図..... 7

第5図 第5号土坑実測図..... 9

第6図 第6号土坑実測図..... 9

第7図 第1号構造遺構出土石器実測図..... 10

第8図 第1号構造遺構・P10実測図..... 11

第9図 第1号構造遺構出土石器実測図..... 12

第10図 C地区出土遺物実測図..... 13

第11図 斎沢 I・II遺跡全体図..... 15

写真図版目次

図版 一 1 C地区全景 2 D地区全景

図版 二 1 E地区全景 2 F地区全景

図版 三 1 第1号構造遺構 2 第5号土坑 3 第6号土坑 4 P10

図版 四 1 第1号構造遺構 2 第1号構造遺構出土遺物 3 第1号構造遺構出土遺物 4 C地区出土遺物 5 C地区出土遺物

図版 五 1 遺跡の遠景 2 遺跡からの近景

図版 六 1 第1地区全景 2 第2地区全景

例 言

1 本書は、県立野沢北高等学校の昭和63年度仮設トイレ・倉庫・部室・自転車置場新設事業、県立北佐久農業高等学校の昭和63年度自転車置場新設事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 調査委託者 長野県教育委員会高等教育課

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地籍及び面積

蔚沢II遺跡（略号NAZII） 長野県佐久市大字野沢449-2 745m²

枇杷坂遺跡群

琵琶坂VI遺跡（略号IBZVI） 長野県佐久市大字岩村田991 110m²

5 調査期間

蔚沢II遺跡 昭和63年6月27日～6月29日、8月4日～8月10日、10月5日～10月21日、10月22日～平成元年3月20日

琵琶坂VI遺跡 昭和63年9月12日～9月13日、9月14日～平成元年3月20日

6 調査団の構成

事務局 佐久埋蔵文化財調査センター

所長 西沢正巳

庶務係長 岩山俊彦

庶務係 田中芳美（昭和63年12月退任）（嘱託職員）

菊池直美（平成元年2月就任）（臨時職員）

調査係主任 高村博文

調査係 三石宗一、木内晶義、須藤隆司、小山岳夫、小林真寿、翠川泰弘、竹原学、助川朋広、篠原浩江（嘱託職員）

調査団

蔚沢II遺跡

団長 黒岩忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者 林幸彦、羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者 高村博文

調査主任 助川朋広

調査補助員 岩山俊彦、小林幸子、宮川百合子、田中芳美

協力者 小宮山智代子、土屋美弥、森泉欽一、森泉源治郎、柳沢豊志子
琵琶坂VI遺跡
団長 藤沢平治（北佐久農業高等学校教諭）
調査指導者 林幸彦、羽毛田卓也（佐久市教育委員会）
調査担当者 高村博文
調査補助員 島山俊彦、宮川百合子、田中芳美

- 7 本書の編集は、高村、助川が行ない、執筆は高村、助川がそれぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。
- 8 本書及び前沢II・琵琶坂VI遺跡出土遺物等の全資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

前沢II遺跡において野沢北高等学校、琵琶坂VI遺跡において北佐久農業高等学校に、発掘調査中、数々のご協力およびご援助をいただきました。記して感謝の意を表します。

凡例

- 1 本書は、前沢II遺跡と枇杷坂遺跡群琵琶坂VI遺跡についての報告書である。第1編に前沢II遺跡について、第2編に琵琶坂VI遺跡について記載してある。
- 2 前沢II遺跡の遺跡の環境については『前沢・葛石』(1988 佐久埋蔵文化財調査センター)に、琵琶坂VI遺跡については『琵琶坂遺跡』(1986 佐久市教育委員会)に記載してあるので本書では再録していない。

第Ⅰ編 薊沢Ⅱ遺跡

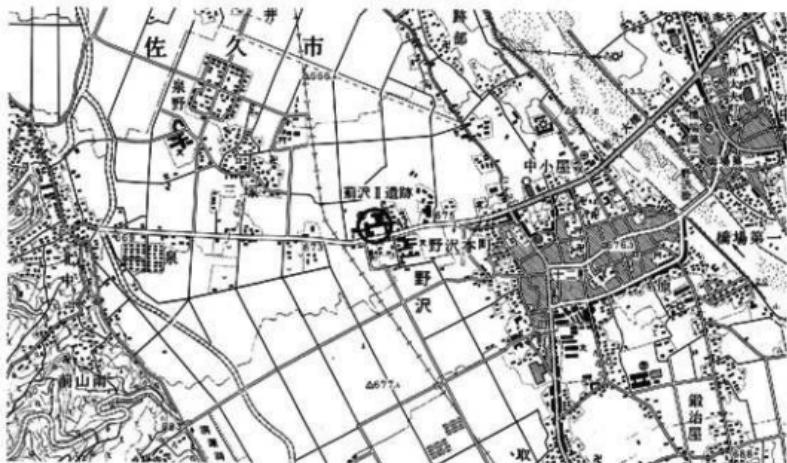
第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

薬沢遺跡は、佐久市野沢に所在し、標高672～673mを測る千曲川により形成された沖積地に位置する。

昭和62年度野沢北高等学校の特別教室棟及び音楽室棟建設に伴う調査を実施しており、奈良時代末～平安時代初頭の住居址2棟、平安時代前葉の住居址4棟、時期不明の住居址1棟の計7棟、他に土坑4基、ピット群などが検出されている。この結果から野沢北高等学校敷地内及び周辺地域には、奈良時代から平安時代の集落址が存在していたものと推測される。

今回、野沢北高等学校の仮設トイレ・倉庫・部室・自転車置場新設に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、昭和63年5月6日、長野県文化課、野沢北高等学校、佐久市教育委員会、当センターの4者により現地協議を行ない、緊急に発掘調査を実施し、記録保存することとなった。そこで佐久市教育委員会が長野県教育委員会高校教育課より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 薬沢II遺跡の位置 (1:25,000 國土地理院地形図による)

第2節 調査日誌

12月9日（金）

表土除去作業を重機にて開始する。まずA地区に重機を搬入して表土を除去し、遺構確認面の把握作業を行う。A地区南西端に数基の土坑を確認する。

12月10日（土）

バックホー、ダンプカーによる表土削平、運搬作業を行う。A地区中央部に竪穴状遺構・溝状遺構の存在を確認する。午後より器材を搬入し、テントの設営を行う。

12月12日（月）

重機によりB地区の表土除去作業を開始する。B地区南東端の地山地形は、急激な角度で南東方向へ傾斜していることが判明する。本日で重機による表土除去作業は終了する。

12月13日（火）

A地区的遺構検出作業を行い、遺構のナンバーリングを行う。

12月14日（水）

順次土坑・溝状遺構の掘り下げ作業に着手する。

12月15日（木）～12月17日（土）

竪穴状遺構・土坑・溝状遺構・柱穴址の掘り下げ作業、写真撮影及び遺構実測を行う。A地区西側より全体測量も開始する。

12月19日（月）・12月20日（火）

B地区の遺構掘り下げ作業に着手し、順次写真撮影・遺構実測を行う。B地区北端にトレチを設定し、遺構の存否を確認する。

12月21日（水）

A・B両地区の全体測量、遺構写真撮影を終了する。

12月22日（木）

調査区の全体清掃を行い、航空写真を撮影する。

12月23日（金）

レベル原点の標高を測定する。器材・テントを撤収し、現場調査を終了する。

12月24日（土）・12月26日（月）

重機により埋め戻しを行い、後に重機を撤収する。

12月27日（火）～平成元年3月20日（金）

報告書作成作業を行い全調査を完了する。

10月23日（月）～平成元年3月18日（土）

室内において報告書作成作業を行い全調査を完了する。

（高村）

第III章 基本層序

薊沢II遺跡C・D地区基本土層

第I層 表土 校舎建築の際の埋土

第I'層 10YR 6/8 明黄褐色土層 僅かに青灰色粒子を含む。

第I''層 10YR 5/2 灰黃褐色土層 粒子細かく粘性あり。明黄褐色粒子を多量に含む。

第III_a層 10YR 2/2 黒褐色土層 粒子細かく粘性あり。

薊沢II遺跡E・F地区基本土層

第I層 表土 校舎建築の際の埋土

第III_b層 10YR 4/4 褐色粘土層 粒子細かく粘性あり。僅かに円礫を含む。

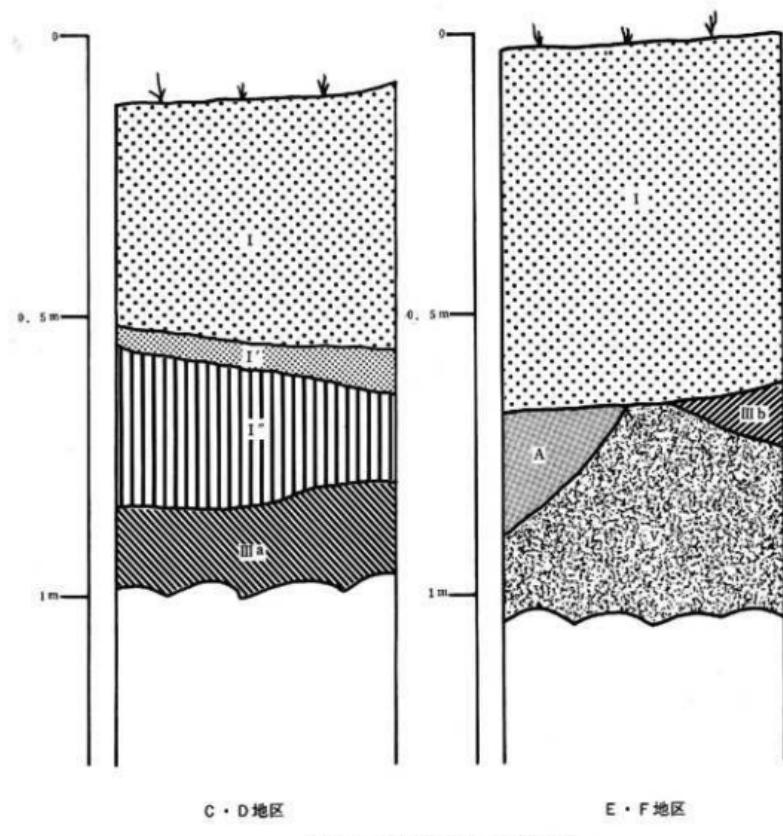
第V層 10YR 4/6 褐色砂礫層 円礫を多量に含む。しまりあり。

薊沢II遺跡は千曲川の西岸、片貝川との中間に位置している。薊沢II遺跡の周辺は、千曲川によって形成された氾濫原で、自然堤防上に立地していると考えられる。

薊沢II遺跡の発掘調査の基本土層はC・D地区の基本土層とE・F地区の基本土層というよう分けられる。

C・D地区では、校舎建築により破壊された搅乱層が堆積し、水田のために破壊されたと考えられる耕作土I'層とI''層とが確認された。I'層は、青灰色の水田耕土を含んでいることから、水田底土であり、I''層は、下部に明黄褐色粒子を含んでいることから、I'層で確認された水田より古い水田層であると考えられる。以下に千曲川の氾濫静水の沈殿層であるIII_a層が確認された。III_b層は、微粒子を含む粘性のある層である。

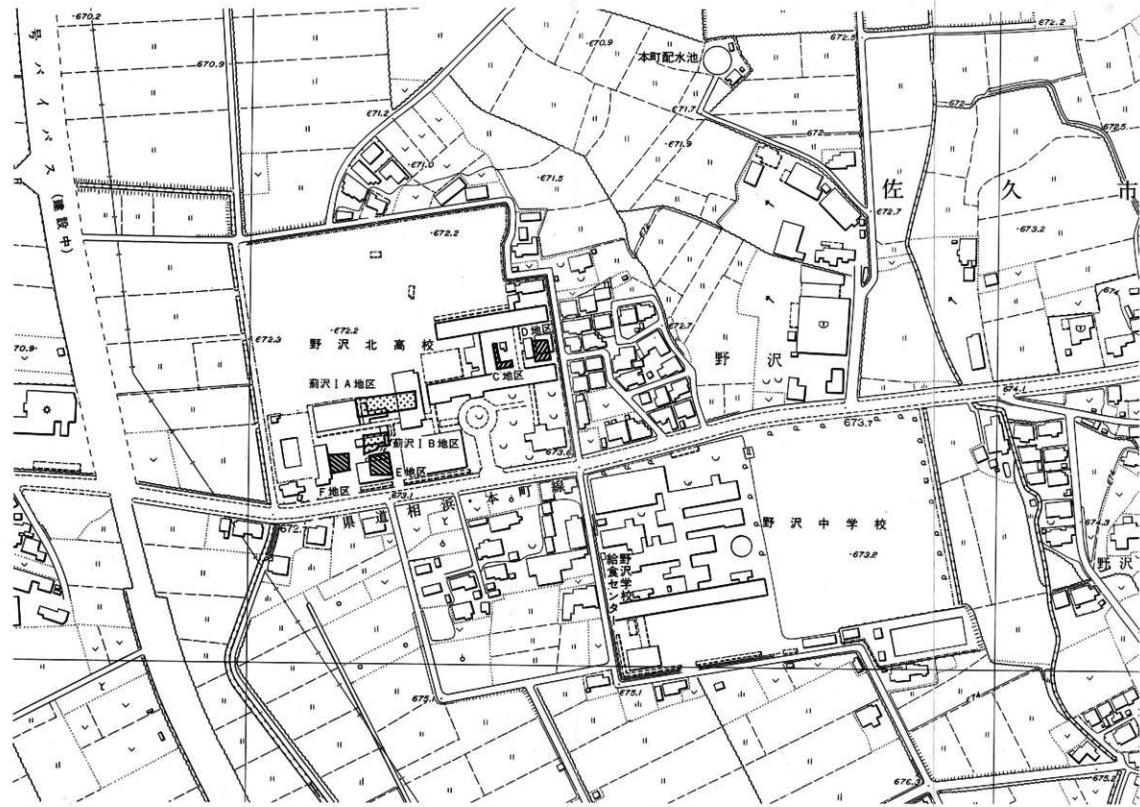
E・F地区では、校舎建築の際にによる破壊された搅乱層が厚く堆積しており、千曲川の氾濫静水の沈殿層であるIII_b層が確認された。この層は、薊沢I遺跡の基本層序のIII層相当で、微粒子を含む粘性・しまりのある層である。以下に砂粒と円礫によって構成されたV層が堆積しており、薊沢I遺跡のV層に相当する。



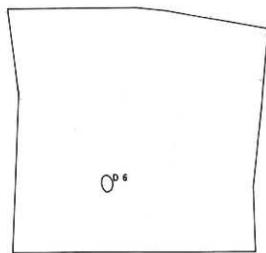
第2図 前沢II遺跡基本層序模式図

造構確認面は、E・F地区においては、V層上面より第5・6号土坑、第1号溝状造構、P10が検出された。

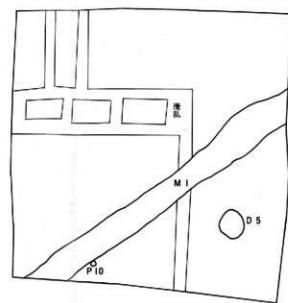
(助川)



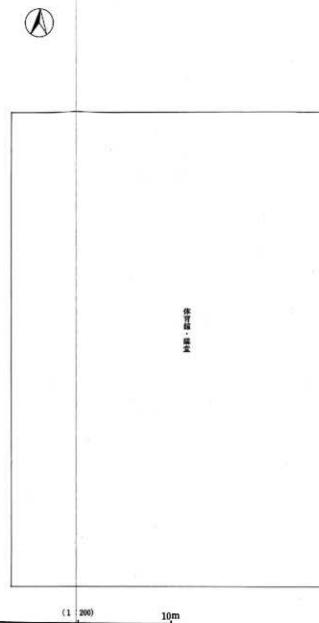
第3図 薩摩II遺跡地形及び発掘区設定図（1：2,500 佐久市基本図34より）



F地区



E地区



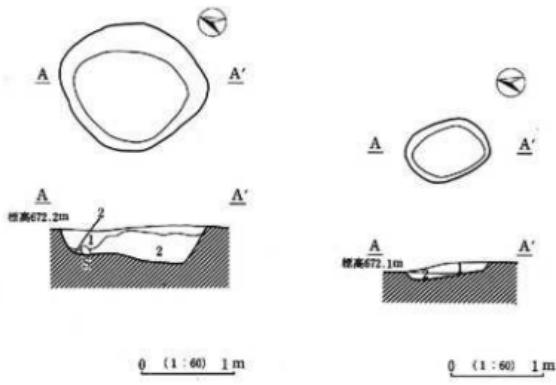
0 (1:200) 10m

第4図 斎沢II遺跡E・F地区遺構全体図

第IV章 遺構と遺物

第1節 土坑 (第5・6図、図版三)

本遺跡から検出された土坑は、E地区1基、F地区1基の計2基検出されてい。る。E地区の土坑は、第5号土坑、F地区的土坑は第6号土坑である。第5号土坑及び、第6号土坑は、基本層序の第V層上面より検出された。



第5図 第5号土坑実測図

第6図 第6号土坑実測図

第5号土坑の規模・形態は、長軸160cm、短軸137cmの橢円形を呈し、深さは40cmを測る。断面形状は逆梯形に近い形状を呈している。長軸方位N-18°-Eを示す。覆土は、黒褐色土層と暗褐色土層に分けられる。遺物は検出されず、本土坑の所産期を断定することはできない。

第6号土坑の規模・形態は、長軸85cm、短軸72cmの橢円形を呈し、深さは13cmを測る。断面形状は鍋底状に近い形状を呈している。長軸方位はN-42°-Eを示す。覆土は、暗褐色土層と黒褐色土層に分けられる。遺物は検出されず、本土坑の所産期を断定することはできない。

(助川)

第2節 溝状遺構

1) 第1号溝状遺構

遺構 (第7図・図版三)

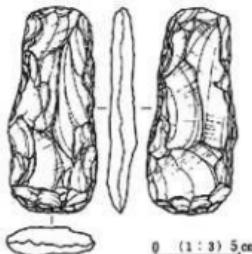
本遺構は、E地区の南側、基本層序の第V層上面より検出された。南西方向から北東方向に斜走する溝で、溝の全貌は窺い知ることはできないが、直線的な形状を呈し、比高差はあまり認められない。検出長は約17.4m、溝幅125cm~192cmを測り、確認面からの深さは、21cm~30cmを測る。断面形状は、おおむね鍋底状を呈する。覆土は、砂粒と円礫を基調とする1層・2層、ローム粒子・白色粒子を基調とする粘土層の3層・4層・5層、砂粒と円礫を基調とする6層からなる。遺物の出土状態は、中央部付近の南側に多く集中し、他は北側に点在して分布する。遺物は、1・2層の砂礫層上面のみの出土で、他の層位からは出土していない。流れ込みと考えるのが妥当で、この遺物をもって本遺構の所産期を断定することはできない。覆土中に鉄分を多く含んでいるため、流路であったことが想定できる。

また第1号溝状遺構に接するような形で、P10が検出された。規模・形態は、長軸29cm、短軸24cmの楕円形を呈し、深さ16cmを測る。長軸方位はN-30°-Eを示す。遺物は検出されず、P10の所産期及び、第1号溝状遺構との関係は断定できない。

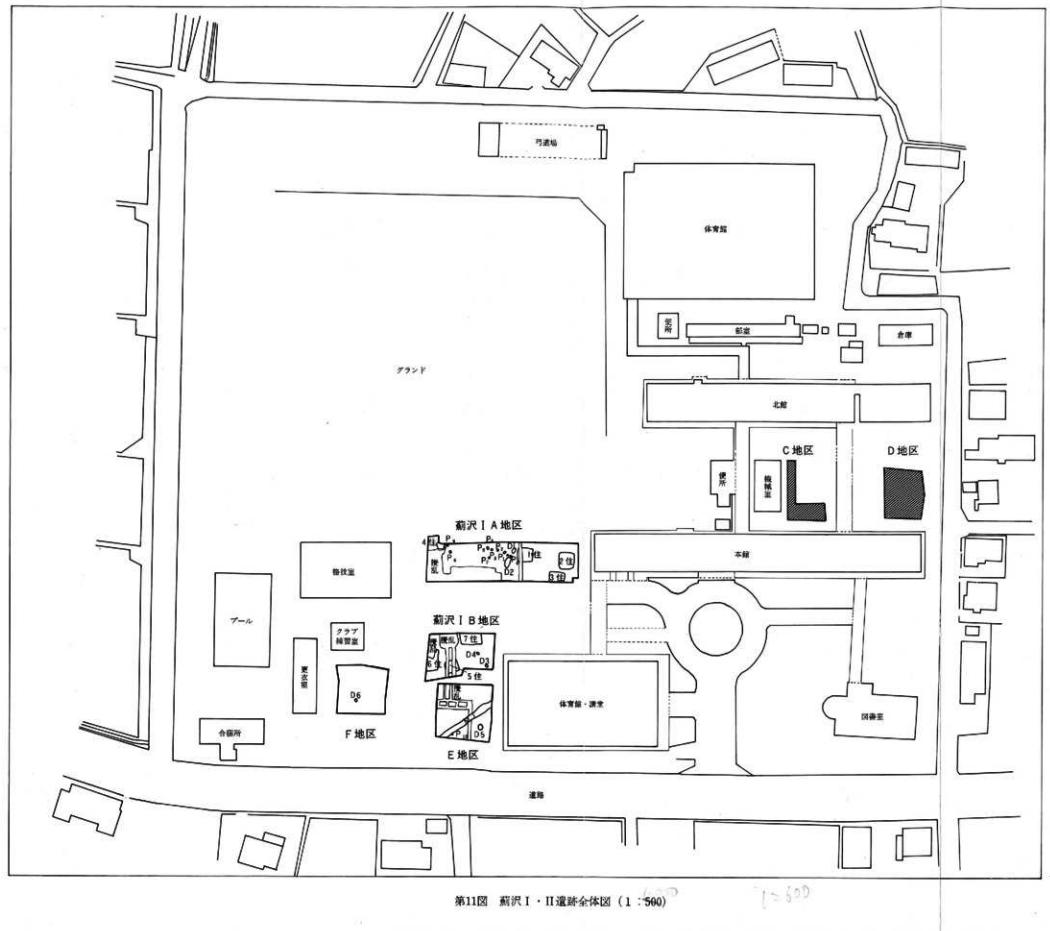
遺物 (第8・9図・図版四)

第1号溝状遺構からは土師器・須恵器・打製石斧が出土している。いずれも細片のため図化できたものは7点(実測図6点、拓影図1点)である。土師器の器種には、叩き目の残る甕や壺がある。9-1・2は須恵器の壺で、内外面共にロクロヨコナデ調整が施され、1は底部回転糸切りで口縁部が内弯外傾し、口唇部が外反する。底部内面は磨かれている。2は口縁部が内弯外傾し、口唇部が外反する。3・4は土師器の壺で、外面へラケズリがなされており、内面は黒色処理が施されている。5は須恵器の壺で、内外面共にロクロヨコナデ調整が施され、口縁部は直線気味に外傾している。年代は奈良時代末から平安時代のものといえる。8-1は石質玄武岩の短骨型打製石斧である。以上第1号溝状遺構からの出土遺物は、先述のとおり上面からの出土のみであるため、流れ込みの可能性が高い。

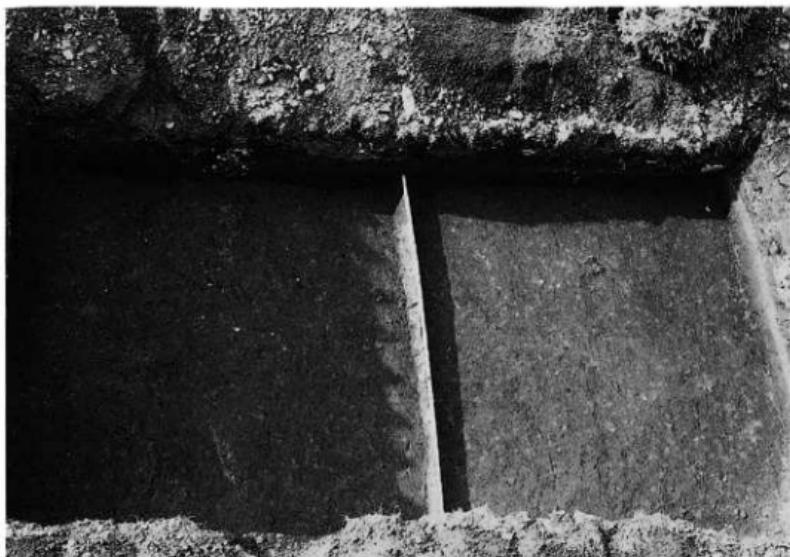
(助川)



第7図 第1号溝状遺構出土石器実測図



第11図 菊沢Ⅰ・Ⅱ遺跡全体図 (1:500)



1 C地区全景（南方より）



2 D地区全景（南方より）

図版
二 蓼沢Ⅰ遺跡



1 E地区全景（南方より）



2 F地区全景（西方より）

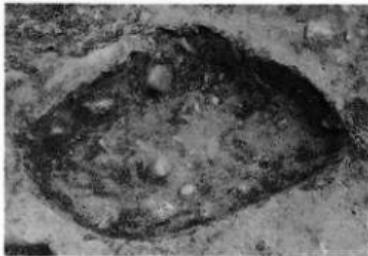
図版三 薊沢Ⅱ遺跡



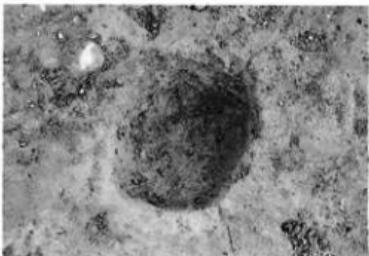
1 第1号溝状遺構（南西より）



2 第5号土坑（西方より）



3 第6号土坑（西方より）



4 P10（西方より）

圖版
四
荀沢Ⅰ遺跡



1 第1号溝状遺構出土遺物



4 C地区出土遺物



2 第1号溝状遺構出土遺物



5 C地区出土遺物



3 第1号溝状遺構出土遺物

図版五 琵琶坂VI遺跡



1 遺跡の遠景（左の高地部分が第6次調査地）〈南方より〉



2 遺跡からの近景（東方を望む）

図版六 琵琶坂VII遺跡



1 第1地区全景(西方より)



2 第2地区全景(南方より)

第2編 琵琶坂VI遺跡

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

琵琶坂VI遺跡は、佐久市岩村田枇杷坂遺跡群内の南方に位置し、標高は717~720mを測る。

昭和53年度プール建設、昭和55年度園芸学習棟建設及び体育施設、昭和58年度農業実習棟建設、昭和60年度体育館建設時に調査がなされており、5次にわたっている。

昭和53年度の立ち会い調査では遺構・遺物は確認されず、湿地状の堆積層がみられた。昭和55年度の立ち会い調査では、約2m程、深堀りしたが、全層砂礫層と有機質を多量に含む黒色土層との互層であった。昭和58年度の立ち会い調査では、地表下30~60cmで黄色・白桃色の浅間山の火山堆積層に層しており、以上のことから北佐久農業高等学校敷地の南東部においては、北東から南西にむけての旧河川、または低湿地が存在していたことが判明し、プールより以西は北東から微高地が、隣接する上直路遺跡に連続していることが推測できた。昭和60年度の第5次調査では弥生時代後期前半の住居址2棟、古墳時代後期前半の住居址3棟が検出されている。⁽¹⁾

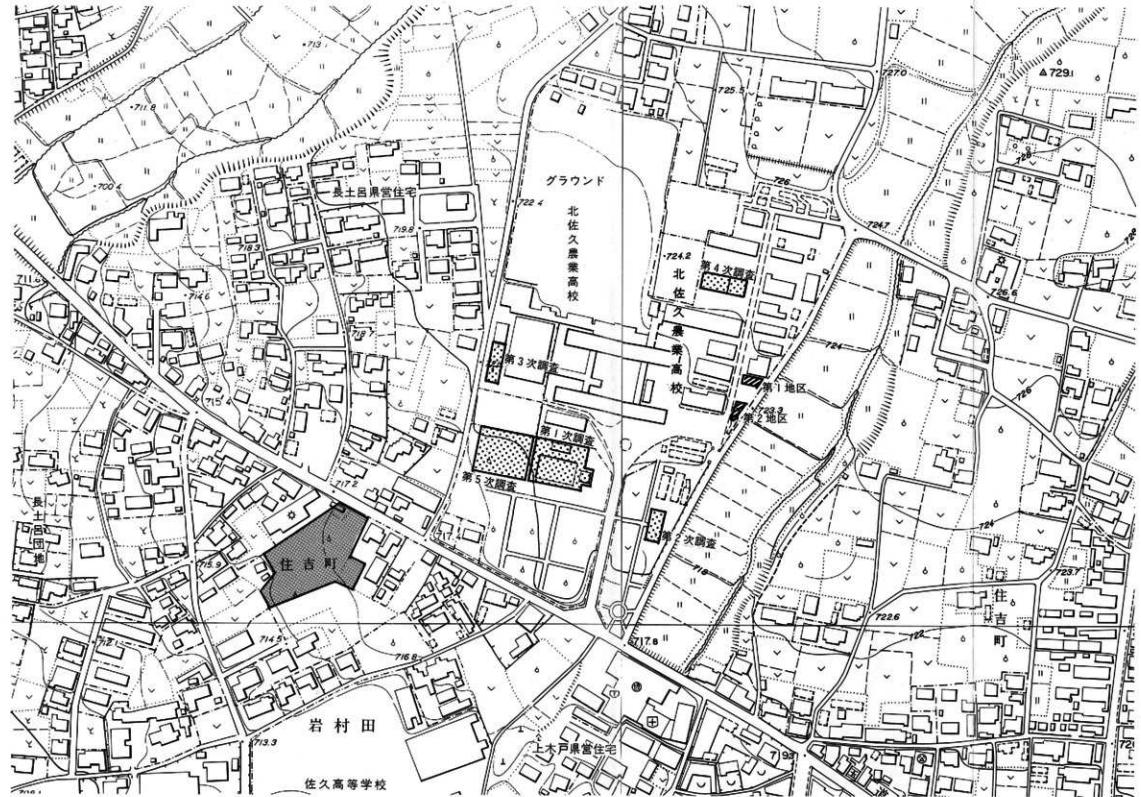
今回、北佐久農業高校により、自転車置場新設が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、昭和63年5月6日、長野県文化課・北佐久農業高等学校・佐久市教育委員会・当センターの4者により現地協議を行ない、緊急に発掘調査を実施し、記録保存することとなった。そこで佐久市教育委員会が、長野県教育委員会高校教育課より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。

註1 佐久市教育委員会 1985 『琵琶坂』

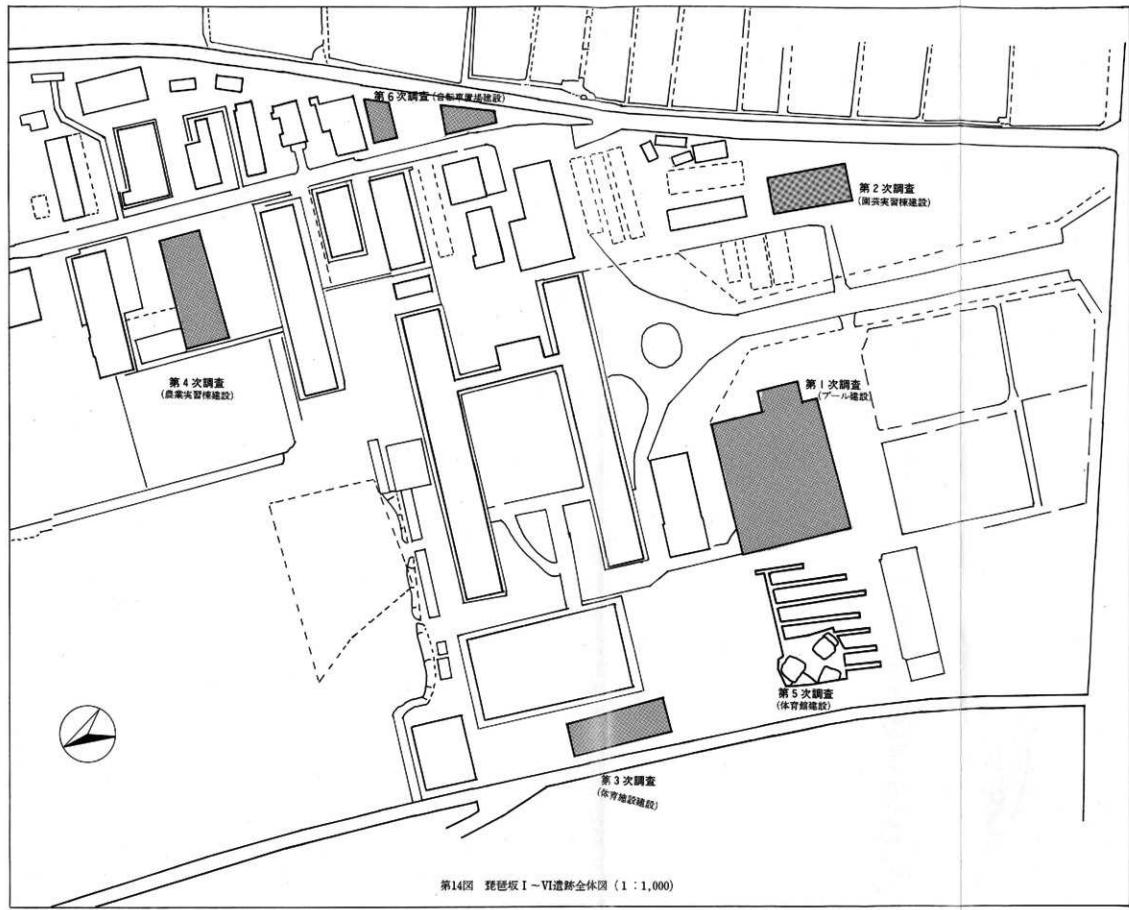
第2節 調査日誌

9月12日（月）

重機による表土削平を開始し、調査区の北側を第1地区、南側の三角形部分を第2地区とする。第1地区の南側はゴミの埋め立てにより大部分破壊されている。第2地区は、表土10mなどで黄色火山灰層が出てきて、遺構らしき落ち込みは検出されない。三角点から標高の移動を行ない、



第13図 指揮板VI遭跡地形及び発掘区設定図 (1:2,500 佐久市基本図 8・9)



第14図 邑邑坂I~VI遺跡全休図 (1:1,000)

第II章 調査のまとめ

今回の琵琶坂VI遺跡の調査では、遺構遺物の検出はなかった。

土層の状況は、第1地区では表土から40cmほどまで擾乱層であり、その下に黄褐色火山灰層が検出された。第1地区南方の第2地区では、表土が10cmと薄く、その下からは第1地区と同様、黄褐色火山灰層となり、この付近は低地にならないことがはっきりした。

第5次までの調査結果から学校の南東部は低地であることが判明したが、今回と第4次調査によって低地が東側部分に達していないことがはっきりした。しかし、グランド付近の地層の状況を観察しないと、この低地が、敷地内で収束するのか、北方方向から伸びてくるものなのかは判然としない。

以上のことから、第5次調査で検出された弥生時代後期の集落址と古墳時代後期の集落址の範囲を特定することは、正確性を欠くので言及できない。
(高村)

参考文献 佐久市教育委員会 1986 『琵琶坂』

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第17集

蘿沢II・琵琶坂VI遺跡

1989年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 ほおづき書籍株式会社

5) 第7号溝状遺構

遺構(第17図)

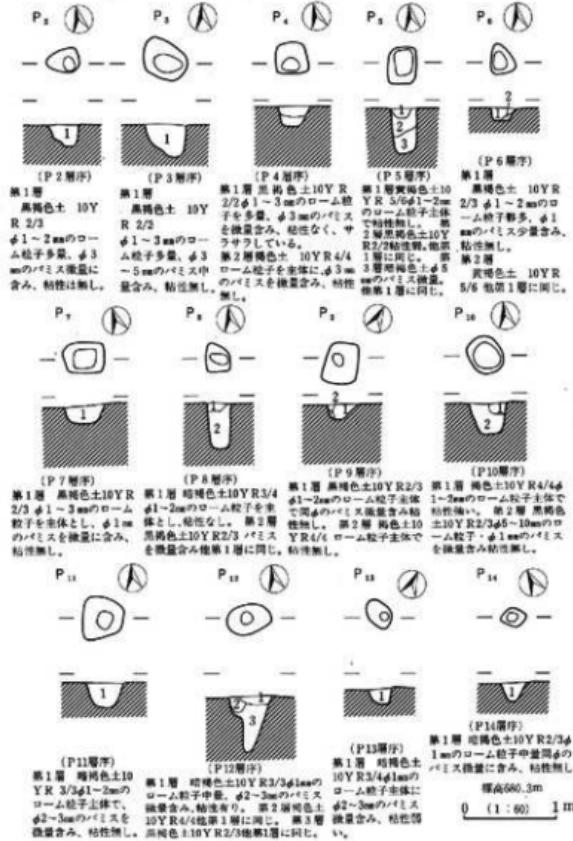
本遺構はB地区東端のおへけ-53グリッド内に位置し、全体層序第II層上で検出された。やや、蛇行しながら南北方向に走る溝であり、検出長は2064cmを測る。幅は45~73cmを測り、深さは4~11cmと非常に浅い。断面は鍋底状を呈し、底面は北から南へ傾斜している。覆土層及び底面は、填圧された様に堅く、しまりがある。出土遺物は皆無である。覆土層の様相から、非常に新しい時期の所産と判断される。

第5節 柱穴址

柱穴址は総計13基が確認され、その全てが全体層序第II層上で検出されている。

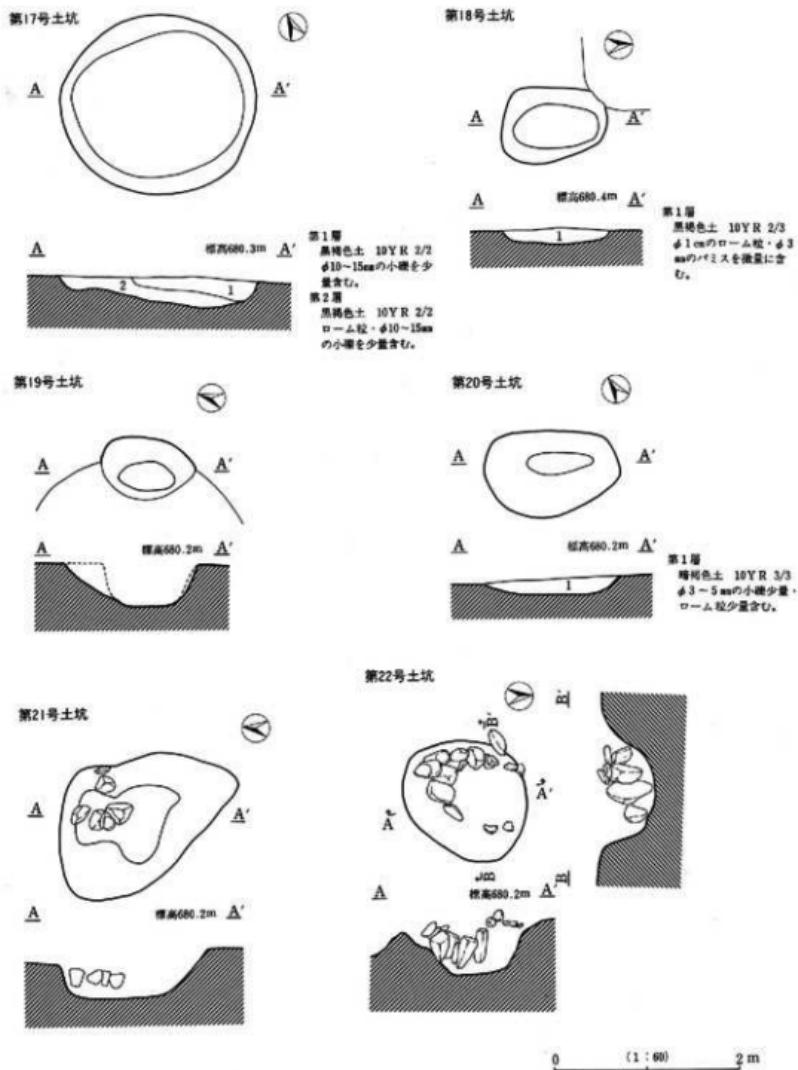
A地区で確認された柱穴址は、第3・4号溝状遺構により区画された「コ」の字状区画の内側にその全てが存在し、区画溝の外側には皆無である。こうした遺構の分布状況、及び覆土層の様相を考慮するならば、柱穴址と区画溝は併存していたものと推察される。

柱穴址は長軸長が40cm内外の小規模なものが大半を占め、平面プランは隅丸長方形・隅丸方形・橢円形を呈する。P₅・P₆は掘り込みが深く良好な



第18図 ピット実測図

梨の木 II



第9図 第17・18・19・20・21・22号土坑実測図

中原遺跡群

NASHI NO KI
梨 の 木 II

長野県佐久市中込梨の木遺跡第2次発掘調査報告書

1989

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

目 次

例 言

凡 例

第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至る動機	1
第 2 節 調査日誌	2
第 II 章 基本層序	3
第 III 章 遺構と遺物	7
第 1 節 検出遺構の概要	7
第 2 節 穴状遺構	7
1) 第 2 号竪穴状遺構	7
2) 第 3 号竪穴状遺構	9
第 3 節 土坑	9
1) 第 10 号土坑	10
2) 第 11 号土坑	10
3) 第 12 号土坑	10
4) 第 13 号土坑	10
5) 第 14 号土坑	12
6) 第 15 号土坑	12
7) 第 16 号土坑	12
8) 第 17 号土坑	12
9) 第 18 号土坑	13
10) 第 19 号土坑	13
11) 第 20 号土坑	13
12) 第 21 号土坑	13
13) 第 22 号土坑	15
14) 第 23 号土坑	15
15) 第 24 号土坑	15
16) 第 25 号土坑	17
17) 第 26 号土坑	17
18) 第 27 号土坑	17
19) 第 28 号土坑	17
20) 第 29 号土坑	18
21) 第 30 号土坑	18
22) 第 31 号土坑	20
第 4 節 溝状遺構	20
1) 第 3 号溝状遺構	20
2) 第 4 号溝状遺構	22
3) 第 5 号溝状遺構	22
4) 第 6 号溝状遺構	22
5) 第 7 号溝状遺構	24
第 5 節 柱穴址	24
第 6 節 グリッド出土遺物	25
第 IV 章 調査のまとめ	25
引用参考文献	25

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

中原遺跡群梨の木遺跡は、佐久市中込に所在する。当遺跡は千曲川の支流滑津川右岸の切り立った台地上に立地し、標高680m、滑津川河床からの比高差は約30mを測る。遺跡群内南西端には佐久地方最大の横穴式石室を有する三河田大塚古墳が南側に開口して存在し、昭和58・59年に行われた市内遺跡群詳細分布調査では縄文～中世にかけての遺物が表面採集されている。また、昭和62年度に行われた調査では弥生時代の土坑・溝状遺構、中世の竪穴状遺構・土坑等が検出されている。以上のことから、本調査区からは縄文～近世の遺構の存在が予想された。

昭和62年度に引き続き、佐久市土地開発公社によって宅地造成事業が本遺跡内において計画されたため、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となった。そこで佐久市教育委員会が佐久市土地開発公社より委託をうけ、佐久市教育委員会から委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行う運びとなった。



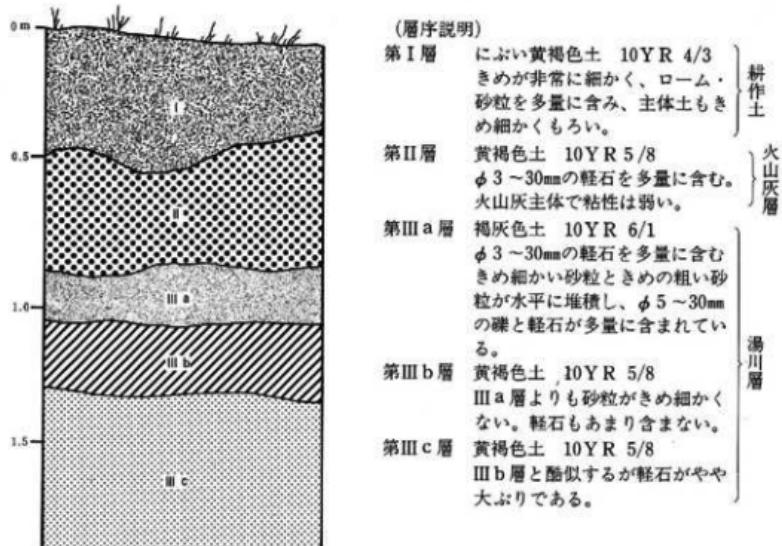
第1図 梨の木II遺跡の位置 (1:50,000 国土地理院地形図による)

第II章 基本層序

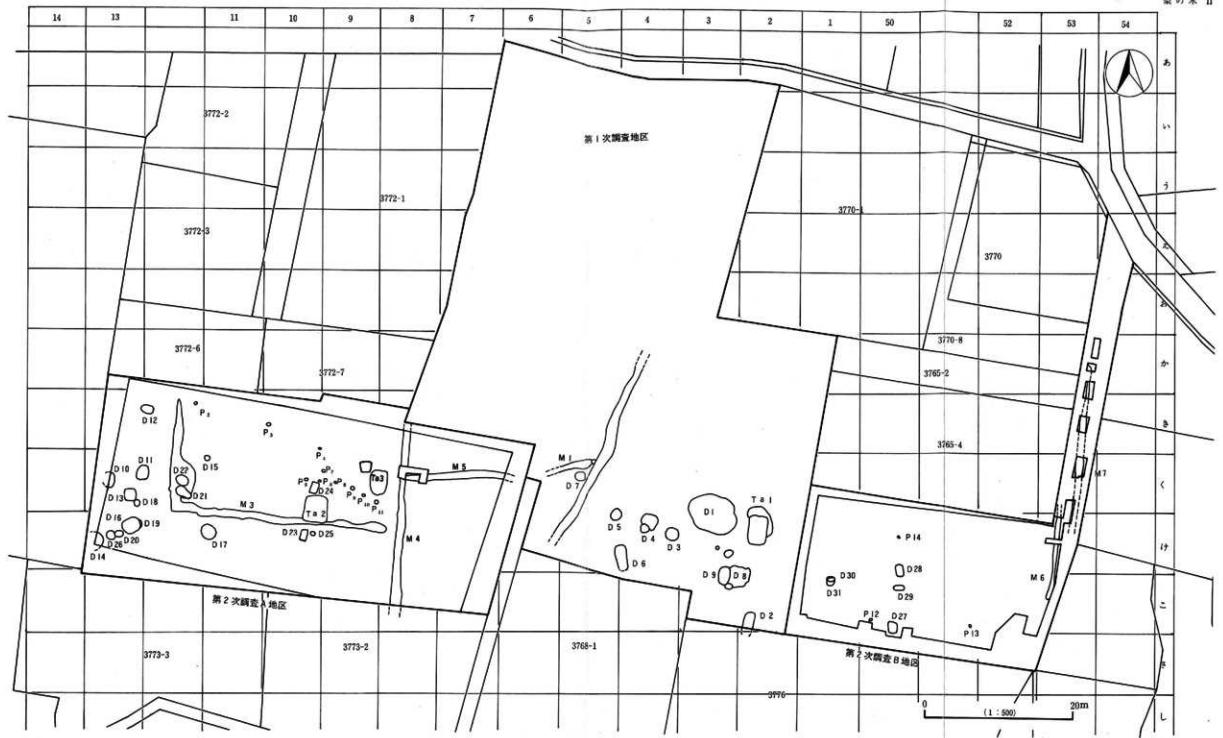
梨の木遺跡は湯川と滑津川に挟まれた断崖状を呈する台地上に立地し、標高は680m内外を測り、今回の調査地区は北から南（段丘末端）へ向って緩く傾斜する。

遺跡の基本的な土層堆積状態を示す柱状図を第2図に示した。おおむね、第I次調査と同様な土層の堆積状態が確認されたが、色調がやや異って観察された。これは、調査区がより台地の末端に接近したこと及び、陽光の季節的な変化がもたらした影響を受けたためと推察される。

第I層耕作土は50cm内外と割合厚く堆積する。第II層火山灰層は50cm内外の比較的厚い堆積を示す。以下、第III_a～III_c層は湯川層と呼ばれる水平に堆積した砂層である。遺構は第II層上面で確認でき、また、土坑の中には第III_c層の砂層まで掘り込まれたものも存在する。遺構の覆土は、大方がローム・砂粒を多量に含んだ第I層と酷似した土層が堆積しており、なかには人為的に埋め戻された土が遺構を被覆するものも観られた。遺構覆土の様相より、本遺跡に展開される遺構の大半は、中世以降に構築されたものと推察される。



第2図 基本層序模式図



第4図 梨の木I・II遺跡遺構全体図

第III章 遺構と遺物

第1節 検出遺構・遺物の概要

遺構

A地区

竪穴状遺構……2基 土坑……17基 溝状遺構……3条 柱穴址……10基

B地区

土坑……5基 溝状遺構……2条 柱穴址……3基

遺物

土器	平安時代……土師器 壺、須恵器 坯
	中世以降……土鍋、須恵質 掛鉢、陶磁器 盆
石器	打製石器未製品？ 河床礫（研磨痕を有する）
古銭	北宋錢

第2節 竪穴状遺構

1) 第2号竪穴状遺構

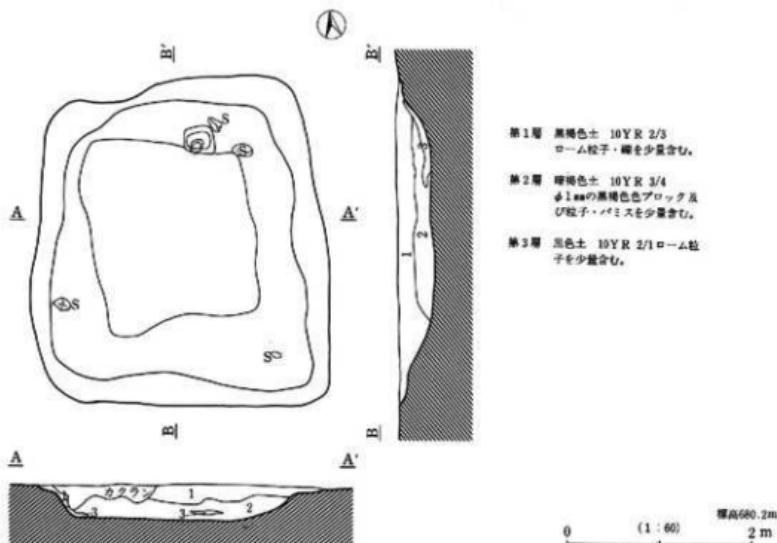
遺構（第5図、図版三）

本遺構はA地区の中央、く・けー9・10グリッド内に位置し、全体層序第II層明黄褐色ローム層上において確認された。第3号溝状遺構と重複し、新旧関係は本遺構が第3号溝状遺構を切って新しい。

平面プランは長軸長384cm、短軸長310cm、東壁長344cm、西壁長296cm、南壁長279cm、北壁長258cmの隅丸台形を呈し（長軸方位N-6°-E）、中央部には206×176cmの不整長方形の掘り込みがある。

覆土層は3層に大別され、遺構内の大方は耕作土に近似する第1層と暗褐色を呈する第2層が被覆し、側面、底面に密着する状態で第3層が堆積している。第2・3層は堆積状況より、人為的に埋め戻された土層と捉えられる。

確認面からの壁高は1段目で8cm、2段目で38cmを測る。1段目の底面は中央部に向かって緩



第5図 第2号竪穴状造構実測図

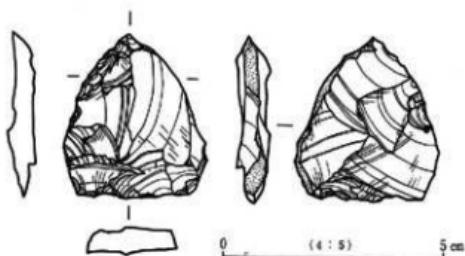
く傾斜し、2段目は平坦面を形成する。しかし、両底面は共に叩きしめられた状況は看取されず、脆弱である。

北壁下には、略方形（31cm×29cm）を呈し深さ25.5cm（2段目底面から）を測る柱穴状の堀り込みが存在する。

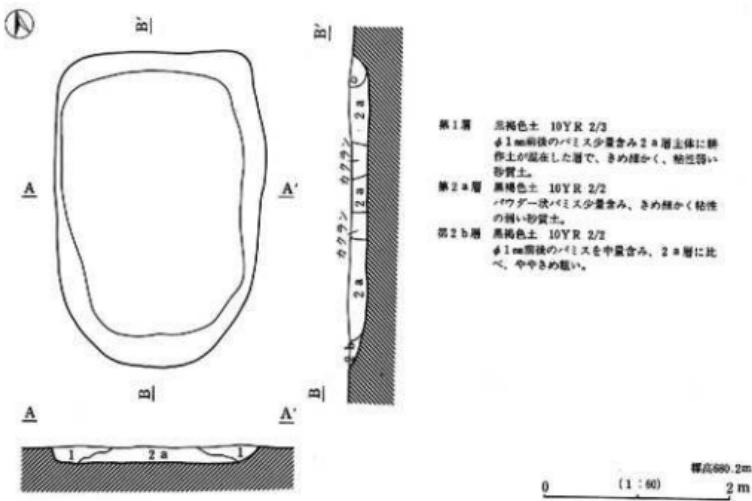
遺物は、打製石錐未製品？が検出されているが、遺構確認面からの出土であり、混入品と捉えられる。

本遺構は第3号溝状遺構を破壊して構築している故、中世以降の所産として捉えられる。
遺物（第6図・図版八）

良質な黒曜石を用いた打製石錐の未製品？である。複雑な方向より、段階状の剥離が施されている。基部及び左側縁には、細かい調製剥離も加えられている。



第6図 第2号竪穴状造構内出土石器実測図



第7図 第3号竪穴状遺構実測図

2) 第3号竪穴状遺構

遺構（第7図・図版四）

本遺構はA地区の中央やや東寄りのくー8・9グリッド内に位置し、全体層序第II層上において検出された。他遺構との重複関係はない。

平面プランは長軸長338cm、短軸長217cmを測る北辺のみが弧状を描く隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-37°-Eをさす。

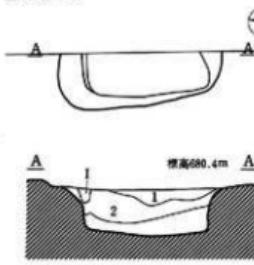
覆土層は性質の異なる2層の黒褐色土層からなり、第2a層が遺構の大半を被覆し、局所的に第1層・2b層が堆積している。

確認面からの壁高は最深部で19cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦で貼床が施され、叩きしめられて非常に堅い。

出土遺物が皆無であり、所産期を窺知できる様な構造的特徴を有する遺構ではないため、本遺構の帰属時期及び性格は判断できない。

第3節 土 坑

第10号土坑



第1層 黒褐色土 10Y R
2/3

ϕ 2~3 mm のバミ
ス、 ϕ 1~2 mm のロ
ーム粒、 ϕ 5 mm~1
cm の小塊を少量含む。A

第2層 棕褐色土 10Y R
3/4

ϕ 1~2 mm のローム
粒多量に含み、 ϕ 1
cm のバミスを少量含
む。

第3層 棕褐色土 10Y R
3/4

ϕ 1~2 mm のローム
粒多量に含み、 ϕ 3~5 mm
のバミスを少量含む。
粘性無し。

第12号土坑



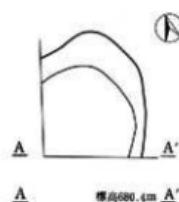
第1層 棕褐色土 10Y R
3/4

ϕ 1~2 mm のローム
粒多量に含み、 ϕ 1
cm のバミスを少量含
む。

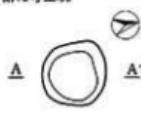
第2層 棕褐色土 10Y R
3/4

ϕ 1~2 mm のローム
粒多量に含み、 ϕ 3~5 mm
のバミスを少量含む。
粘性無し。

第14号土坑



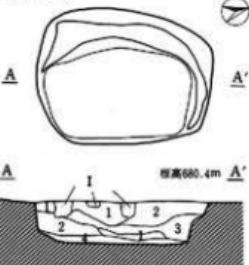
第15号土坑



第1層 棕褐色土 10YR 3/2
 ϕ 1 mm のバミス、 ϕ 3~5 mm の小塊
を微量含む。

- 第1層 棕褐色土 10YR 3/2 ϕ 5 mm のバミスを微量含む。粘性無し。
- 第2層 棕褐色土 10YR 3/2 ϕ 3~5 mm のバミスを微量含む。粘性無し。
- 第3層 黄褐色土 10YR 5/6 ϕ 10mm の砂砾多量に含む。粘性無し。
- 第4層 棕褐色土 10YR 3/2 ϕ 10mm の小塊を微量に含む。粘性無し。

第11号土坑



第1層 黒褐色土 10Y
R 2/3 ϕ 1~5 mm のバ
ミス・ローム・小塊
を少量含む。

第2層 棕褐色土 10Y R
2/3 ϕ 1~5 mm のロ
ーム粒・バミスを少
量含む。粘性無し。

第3層 棕褐色土 10Y R
3/4 横断面 2 層と同じ。

第4層 にいへ黄褐色
土 10Y R 4/3 ϕ 1
~2 mm のローム粒多
量に含む。粘性無し。

第1層 黑褐色土 10Y
R 2/2 ϕ 1~1 cm の
ローム粒・バミス・
小塊を少量含む。

第2層 棕褐色土 10Y
R 3/4 ϕ 1~1 cm の
ローム粒・バミス・
小塊を少量含む。

第3層 にいへ黄褐色
土 10Y R 4/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 5
cm の小塊を少量含む。
粘性無し。

第4層 10Y R 4/4 ϕ 1 cm の
ローム粒・バミス微
量含む。

第5層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

第6層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

第7層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

第8層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

第9層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

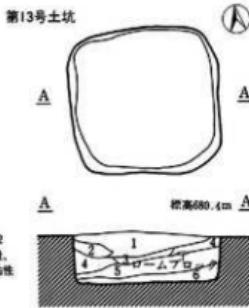
第10層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

第11層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

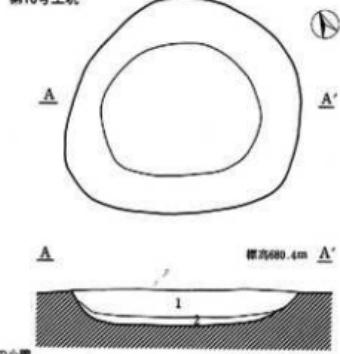
第12層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

第13層 にいへ黄褐色
土 10Y R 5/4 ϕ 1 cm の
ローム粒多量。 ϕ 3
~5 cm の小塊を少
量含む。

第13号土坑



第16号土坑



第1層 棕褐色土 10Y R 3/3 ϕ 1 mm のローム粒を多量に含
み、 ϕ 3~5 mm のバミス・小塊を微量含む。

第2層 棕褐色土 10Y R 3/4 ϕ 1~3 mm のローム粒を多量、
 ϕ 1 cm のバミス・小塊を微量含む。粘性無し。

0 2 m

第8図 第10・11・12・13・14・15・16号土坑実測図

5) 第14号土坑

遺構（第8図・図版五）

本遺構はA地区南西隅のけー13グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。調査区城外に遺構が伸びるため全容の把握は成し得なかったが、確認された部分より、やや歪みをもつ楕円形プランが想定される。覆土は4層からなり、第1・2層が遺構の大半を覆い、第3・4層が側面付近に偏在した。確認面からの深さは100cmを測り、壁は垂直に掘り込まれている。壁面下方及び底面は平滑であるものの、第III層の砂層を掘り込んでいるため脆弱であり、崩壊し易い。出土遺物は皆無であるが、遺構の状態より、中世～近世期にかけての墓壙を想定したい。

6) 第15号土坑

遺構（第8図・図版五）

本遺構はA地区的中央西寄り、くー11・12グリッド内に位置し、基本層序第II層上で確認された。平面プランは69×66cmの不整円形を呈し、長軸方位はN-5°-Eを示す。覆土は黒褐色土一層からなり、掘り込みは浅く、確認面からの深さは10.5cmを計測するに過ぎない。底面は平坦であるものの、叩きしめられた状況は看取されなかった。遺物の出土は皆無であり、所産期及び性格は不明である。

7) 第16号土坑

遺構（第8図・図版五）

本遺構はA地区的南西端けー13グリッド内に位置し、基本層序第II層上で検出された。第19号土坑と重複関係にあり、本遺構が第19号土坑を壊して構築している。平面プランは246×231cmの不整円形を呈し、長軸方位はN-63.5°-Wをさす。確認面からの深さは42.5cmを測り、断面形は鏡底状を呈する。底面は平滑であるが、叩きしめられた状況は看取されず、脆弱である。遺物の出土はなく、所産期及び性格は不明である。

8) 第17号土坑

遺構（第9図）

本遺構はA地区的西部けー11・12グリッド内に位置し、全体層序第II層上において確認された。平面プランは202×190cmの円形を呈し、長軸長はN-63.5°-Eをさす。最深部では深さ29.5cmを測る。底面は緩やかな起伏を有し、全体的には東側から西側へ傾斜する。本土坑は、風倒木痕の上位に構築されている。出土遺物は皆無であり、所産期及び性格は判断できない。

9) 第18号土坑

遺構（第9図・図版五）

本遺構はA地区南西部のくー13グリッド内に位置し、全体層序第II層上において確認された。前述した第13号土坑と重複し、本遺構が第13号土坑より古期に構築されている。平面プランは長軸長113cm、短軸長80cmを測る不整隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-3.5°-Eをさす。深さは14.5cmを測り、鍋底状の断面を呈する。底面はやや起伏をもち、脆弱である。出土遺物はなく、所産期及び性格は判断できない。

10) 第19号土坑

遺構（第9図・図版五）

本遺構はA地区南西隅のけー13グリッド内に位置し、全体層序第II層上において確認された。前述した第16号土坑と重複関係にあり、本遺構がより古期に構築されている。第16号土坑に東側の壁を破壊されるため全容を窺知できないが、現存する西壁及び下場ラインの形状から、橢円形プランが想定される。確認面からの深さは46cmを測り、底面は平坦である。出土遺物は無く、所産期及び性格は不明である。

11) 第20号土坑

遺構（第9図・図版五）

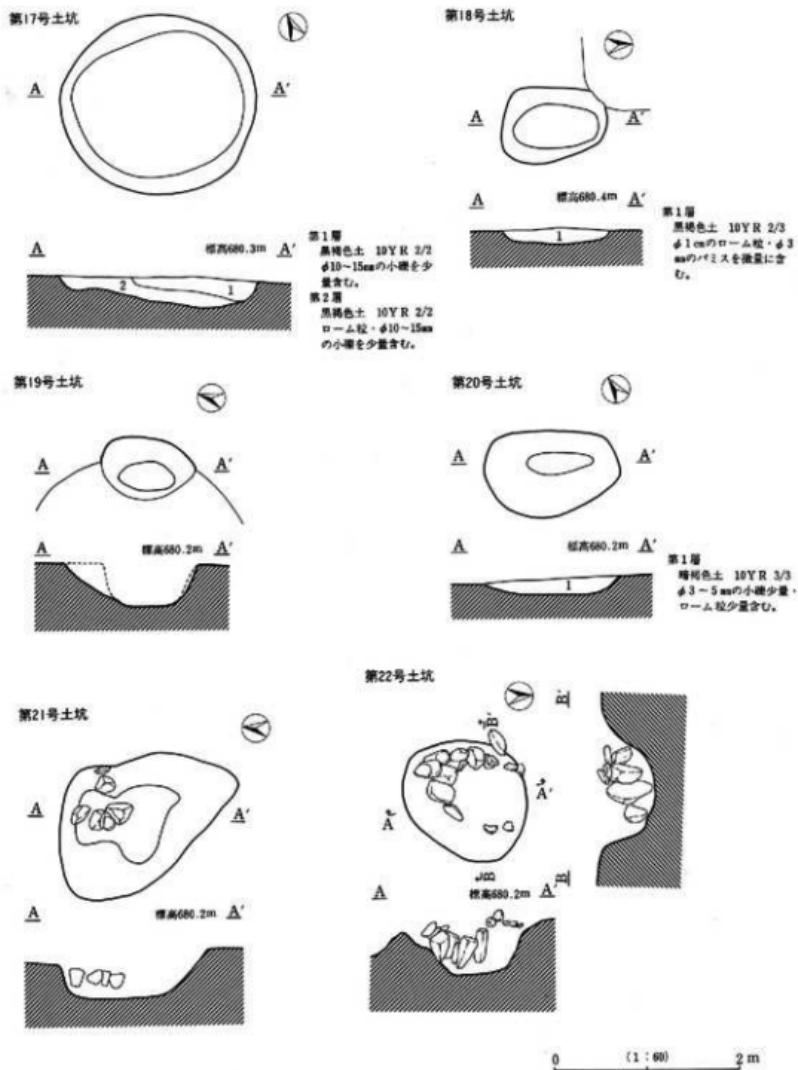
本遺構はA地区南西隅のけー13グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。第26号土坑と重複し、本遺構が第26号土坑を破壊して構築している。平面プランは長軸長143cm、短軸長93cmを測る不整橜円形を呈し、長軸方位はN-56°-Wを示す。深さは20cmを計測し、底面は小規模な平坦面を形成する。遺物は検出されず、性格・所産期共に不明である。

12) 第21号土坑

遺構（第9図・図版五）

本遺構はA地区西部のくー12グリッド内に位置し、第3号溝状遺構底面上において確認された。第3号溝状遺構と重複し、覆土層の堆積状態及び、本土坑の周辺において溝状遺構の形状に変化が観られることから、本土坑は溝状遺構と併存していたものと推察される。平面プランは212×127cmの不整形を呈する。深さは最深部で64cmを測り、側面と底面には小規模な起伏が看取される。疊は北部の側面付近に集中して分布し、千曲川の河床から採集されたものと推察される。出土遺物は無いが、第3号溝状遺構との関係から、中世の土坑と捉えられる。性格は不明である。

梨の木 II



第9図 第17・18・19・20・21・22号土坑実測図

13) 第22号土坑

遺構（第9図・図版六）

本遺構はA地区西部のくー12グリッド内に位置し、前述した第21号土坑と対をなす様に配置されている。第3号溝状遺構底面上において確認され、第21号土坑と同様な理由により、溝状遺構とは併存していたものと推察される。平面プランは長軸長144cm、短軸長118cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-32°-Eを示す。土坑内には、前述したプランの規模をやや縮小したかたちで石組みが確認された。石組みは、周辺の川原から採集された偏平・あるいは細長い砾を用いて構築されており、堅固に組まれている。溝状遺構底面からの深さは、最深部で54cmを計測し、断面形は鍋底状を呈する。底面は丸味を帯び、叩きしめられた様な状況は看取されなかった。検出面上より、古銭が1点出土している。出土遺物・第3号溝状遺構との関係より、中世の遺構と捉えられる。

遺物（第10図・図版八）

1・2は石組みとして用いられていた砾であり、表裏面に磨耗痕を有し、炭化物状の付着物が看取される。1の裏面は、加熱によると思われる剥落部が観られる。3は北宋銭で、真書体の皇宋通宝（1039年）である。

14) 第23号土坑

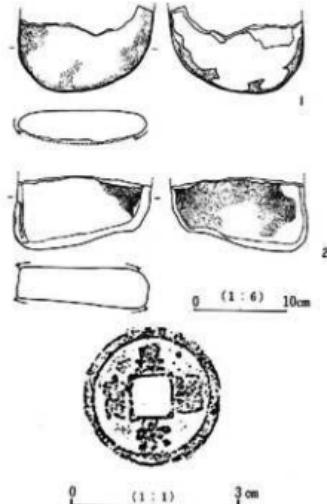
遺構（第11図・図版六）

本遺構はA地区中央けー10グリッド内に位置し、第II層上で確認された。平面プランは長軸長151cm、短軸長118cmの長方形を呈し、長軸方位はN-15°-Wを示す。深さは54cmを測り、底面は平坦である。覆土は人為埋土であり、近世陶磁器細片が2点出土している。出土遺物・覆土層の様相から、近世以降の所産と捉えられる。

15) 第24号土坑

遺構（第11図・図版六）

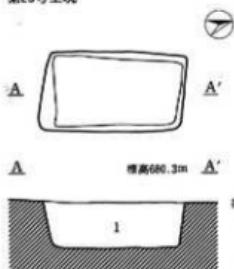
本遺構はA地区中央けー10グリッド内に位置し、第II層上で検出された。平面プランは長軸長146cm、短軸長102cmの長方形を呈し、長軸方位はN-17°-Eを示す。深さは33cmを測る。底面は平坦であるが、中央部のみ鍋底状に凹む。覆土は人為埋土である。遺構の形態・構築方位・覆土層の様相が第23土坑と酷似することから、同時期の所産で



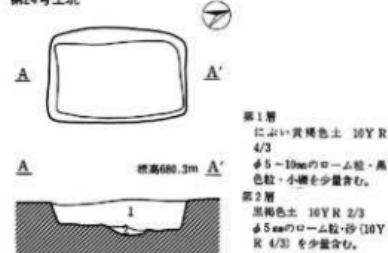
第10図 第22号土坑内出土石器実測図
・古銭拓影図

森の木 II

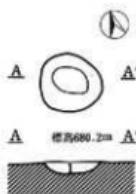
第23号土坑



第24号土坑



第25号土坑



第26号土坑



第27号土坑



第28号土坑



0 (1 : 60) 2 m

第11図 第23・24・25・26・27・28号土坑実測図

あり、類似する性格を有していたことも推察される。出土遺物は皆無である。

16) 第25号土坑

遺構 (第11図)

本遺構はA地区中央やや南寄りのけ-10グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。平面プランは66×62cmの円形を呈し、断面形は鍋底状を呈す。確認面からの深さは15.5cmと浅く、底面は丸味を帯び、脆弱である。出土遺物は皆無であり、所産期及び性格は判断できない。

17) 第26号土坑

遺構 (第11図・図版六)

本遺構はA地区南西端のけ-13グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。第20号土坑と重複関係にあり、本遺構の北東コーナーを第20号土坑が破壊して構築している。平面プランは長軸長140cm、短軸長121cmを測る不整隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-9°-Eをさす。確認面からの深さは47cmを測り、断面形は略梯形状を呈する。底面は南から北へ緩く傾斜する。覆土層は2層に大別され、第1_a・1_b層が遺構内の大半を被覆し、第2層はブロック状を呈して土坑側面に偏在する。堆積状態・含有物の在り方より、人為的に埋め戻された土として捉えられる。遺物の出土は無く、所産期及び性格は判断できない。

18) 第27号土坑

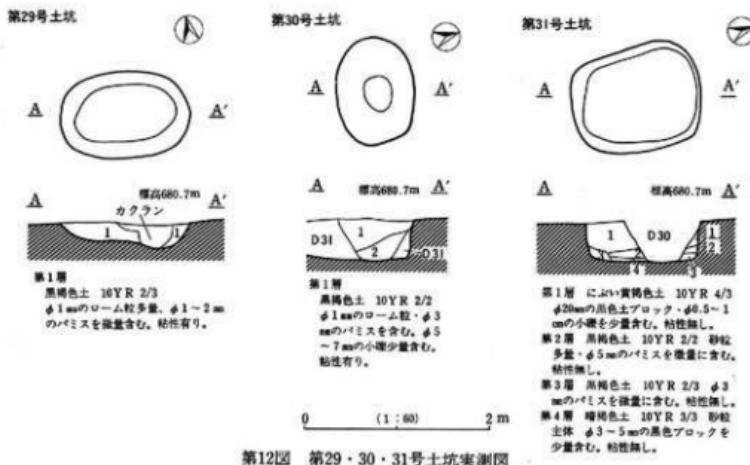
遺構 (第11図・図版七)

本遺構はB地区東部の南端こ-50グリッド内に位置し、基本層序第II層上で検出された。平面プランは長軸長160cm、短軸長130cmの隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-13.5°-Eをさす。確認面からの深さは22cmを測り、断面形は鍋底状を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は3層の黒褐色土からなり、プライマリーな堆積状態である。遺物の出土は無く、所産期及び性格は判断できない。

19) 第28号土坑

遺構 (第11図・図版七)

本遺構はB地区の中央やや西寄りのけ-50グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。平面プランは長軸長172cm、短軸長112cmを測る隅丸長方形を呈し、長軸方位はNをさす。確認面からの深さは46cmを計測し、断面形は逆梯形状を呈する。覆土は2層の黒褐色土が堆積し、土坑中央部より南壁部までは攪乱されている。底面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無であり、



第12図 第29・30・31号土坑実測図

所産期及び性格は不明である。

20) 第29号土坑

遺構 (第12図・図版七)

本遺構はB地区中央、やや西寄りのこ-50グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。平面プランは長軸長139cm、短軸長82cmの梢円形を呈し、長軸方位はN-81.5°-Wをさす。確認面からの深さは28cmを計測する。覆土は黒褐色土1層からなり、土坑中央部は桑の根により擾乱されている。底面には緩い起伏が認められ、土坑東部において最も深くなる。出土遺物は土師器・土質土器細片の2点が認められるものの、検出面及び擾乱された土層内からの出土であり、本遺構の所産期及び性格を傍証する資料にはなり得ない。

遺物 (第13図・図版八)

土師器壊の底部破片である。底裏面には回転糸切り痕が看取され、内外面はナデが施されている。微砂粒を少量含有し、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色 (10YR 7/4) を呈する。

21) 第30号土坑

遺構 (第12図・図版七)



第13図 第29号土坑内出土土器実測図

第1表 梨の木II遺跡土坑一覧表

遺跡名	検出位置	平面形状	現状		長軸方位	深さ(cm)	備考
			長軸長(cm)	短軸長(cm)			
D10	く-13	(楕丸長方形)	173	—	N-15°-E	51	
D11	く-12・13	椭丸台形	188	144	N-22°-E	テラス19.5 50	
D12	き-12・13	椭丸長方形	145	106	N-71°-W	21	
D13	く-13	椭丸方形	160	155	N-90°-E	67.5	
D14	け-13	(椭円形)	—	—	—	100	
D15	く-11・12	不整円形	69	66	N-5°-E	10.5	
D16	け-13	不整円形	246	231	N-63.5°-W	42.5	
D17	け-11・12	円形	202	190	N-64°-W	29.5	
D18	く-13	不整椭丸長方形	113	80	N-3.5°-E	14.5	
D19	け-13	(椭円形)	—	—	—	46	
D20	け-13	不整椭円形	143	93	N-56°-W	20	
D21	く-12	不整形	212	127	N-41°-W	64	
D22	く-12	椭円形	144	118	N-32°-E	54	古鉄1点 河床汚泥5点
D23	け-10	長方形	151	86	N-15°-W	54	陶器片2点
D24	く-10	長方形	146	102	N-17°-W	33	
D25	け-10	円形	66	62	N-75°-W	15.5	
D26	け-13	不整椭丸長方形	140	121	N-90°-E	47	
D27	こ-50	椭丸長方形	160	130	N-13.5°-E	22	
D28	け・こ-50	椭丸長方形	172	112	N	46	
D29	こ-50	椭円形	139	82	N-81.5°-W	28	土解剖片1点 土質質地片1点
D30	こ-1	椭円形	112	84	N-88°-W	45.5	
D31	こ-1	椭丸長方形	140	111	N-6°-E	47.5	

本遺構は調査区西部のやや南寄り、こ-1グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。第31号土坑と重複し、本土坑が第31号土坑の覆土を掘り込んで構築している。平面プランは長軸長112cm、短軸長84cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-88°-Eをさす。断面形は逆梯形状を呈し、壁面は第31号土坑の覆土（砂質土）であるため、脆弱である。確認面からの深さは45.5cmを測り、底面は平坦である。出土遺物は無く、所産期及び性格は判断できない。

22) 第31号土坑

遺構 (第12図・図版七)

本遺構はB地区西部のやや南寄り、こー1グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。前述した第30号土坑と重複し、本土坑がより古期に構築されている。平面プランは長軸長140cm、短軸長111cmの規模を有する隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-6°-Eをさす。壁は垂直に掘り込まれ、確認面からの深さは47.5cmを計測する。覆土層は4層に大別され、堆積状況・含有物の在り方から人為的に埋められた土層と捉えられる。出土遺物は皆無で、所産期・性格は不明である。

第4節 溝状遺構

1) 第3号溝状遺構

遺構 (第15図)

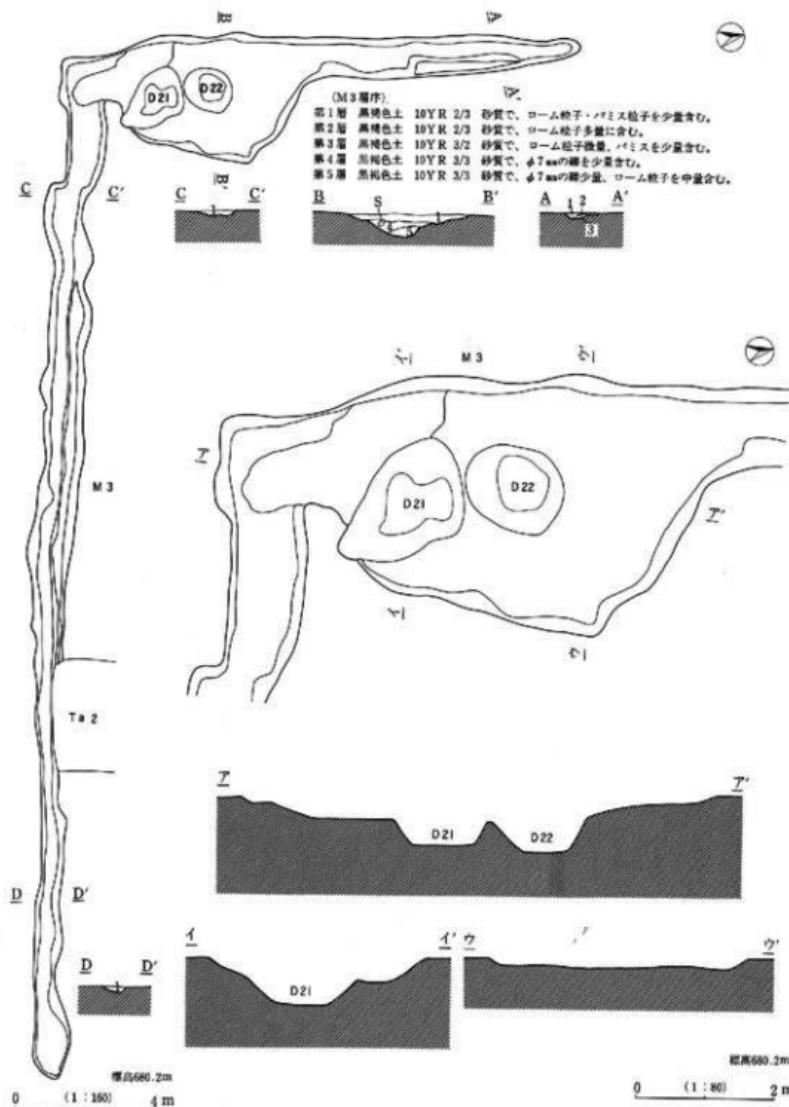
本遺構はA地区西部域において縦走（南北方向）し、けー12グリッド内で垂直に折れ曲がり、調査区中央部を横走（東西方向）する。検出位置は、き-12、く-11・12、け-8～12グリッド内である。第2号竪穴状遺構、第21・22号土坑と重複関係を有する。本溝は第2号竪穴状遺構に切られ、第21・22号土坑とは併存する。全体の形状が「L」字状を呈する溝で、北端からコーナーまでの長さは1480cm、東端からコーナーまでの長さは2904cmを計測する。溝幅は100cm内外を基調とするが、第21・22号土坑周辺の最大部では372cm、最小値を示す第2号竪穴状遺構の付近では48cmを計測する。北端及び中央部では2段構築となり、テラス面を形成する。深さは5～28cmを測り、断面形は鍋底状を呈する。覆土は5層からなる。出土遺物は僅少であり、その内訳は土師器・須恵器・須恵質土器である。何れも細片であるため遺構との共伴性は薄いが、少なくとも遺構の上限年代が、須恵質土器の所産期を遡り得ないことを示唆する。一方、近世遺物の出土が観られない点も考慮すると、本溝の所産期を漠然と中世に位置付けることができる。また、本溝の形態及び、他遺構の分布状況から、区画性を帯びた溝であることが窺える。

遺物 (第14図・図版八)

須恵質の摺鉢である。外面の調製は粗く凹凸に富むが、内面は丁寧である。8条の条線が刻まれ、焼成は堅緻である。砂粒を多含し、色調は褐灰色 (10YR 6/1) を呈する。



第14図 第3号溝状遺構内出土
土器拓影図



第15図 第3号溝状遺構実測図

2) 第4号溝状遺構

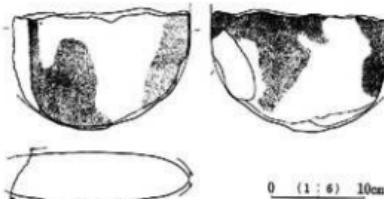
遺構（第17図）

本遺構はA地区東部、き～こー8グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。第5号溝状遺構と重複関係を有し、覆土の堆積状態及び遺構の構築状態から同時期の所産として捉えられる。概略、南北方向に直線的に走る溝であり、検出長は2464cmを計測する。溝幅は74～140cm、深さは20～26cmを測り、底面は南から北へ若干低下している。覆土は第1層—黒褐色土・第2層—暗褐色土・第3層—褐色土の3層からなる。出土遺物は皆無であり、所産期を限定し得ないが、第3号溝状遺構の縦走部と平行し、本遺構を東限として一旦遺構の分布が親られなくなることより、本遺構は第3号溝状遺構と対になり区画的な役割を果たしていたものと推察される。

3) 第5号溝状遺構

遺構（第17図・図版七）

本遺構はA地区東部のくー7・8グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。前述した第4号溝状遺構と重複し、同一時期の所産と理解できる。やや弧を描きながら東西に走る溝であり、検出長は1348cmを測る。溝幅は、最小値を示す第4号溝状遺構との連結部において56cm、最大部で104cmと狭広が認められているが、おむね100cmの幅を保って横走している。深さは41～66cmを測り、断面形は逆梯形状を呈する。出土遺物は僅少であり、連結部東側の第2層中より、磨耗痕を有し炭化物状の付着物が看取される円碟が1点（第16図）出土している。第4号溝状遺構・覆土層の様相により、中世における区画溝として捉えておきたい。

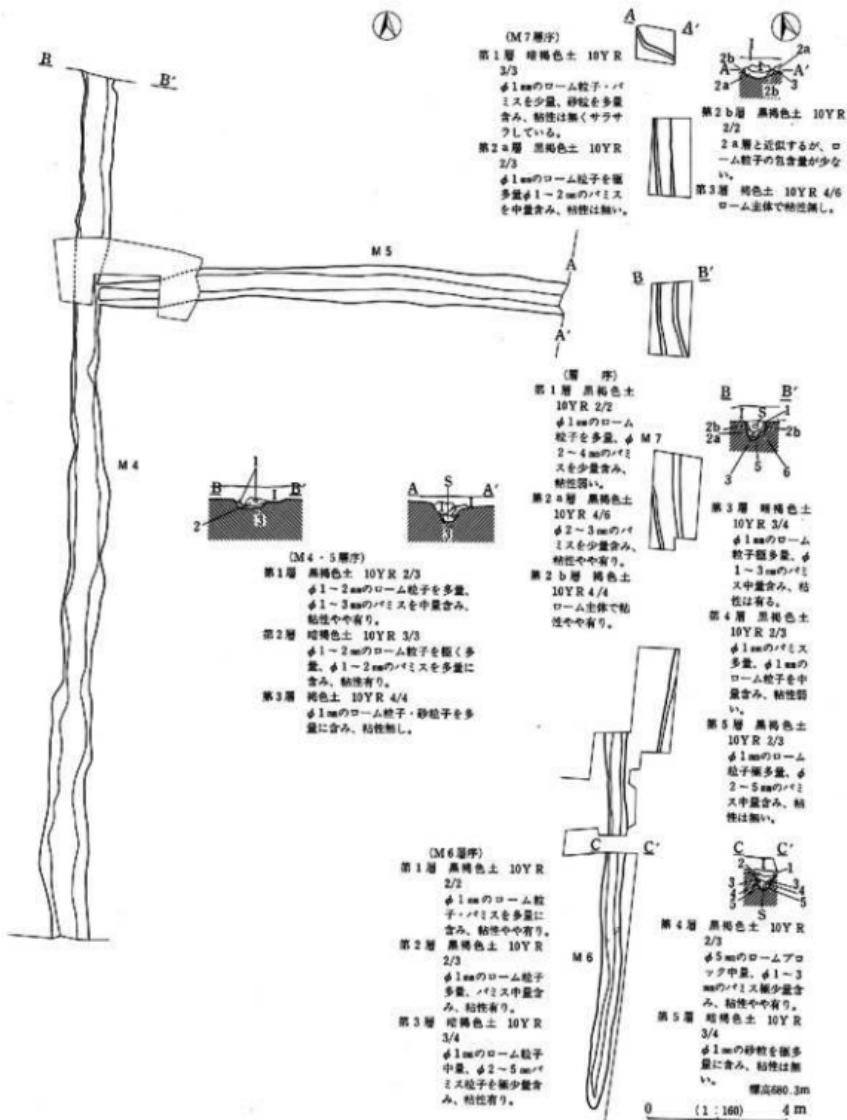


第16図 第5号溝状遺構内出土石器実測図

4) 第6号溝状遺構

遺構（第17図・図版七）

本遺構はB地区東端け・こー53グリッド内に位置し、基本層序第II層上で確認された。おおむね、南北方向に直線的に走る溝であり、検出長は1072cmを計測する。幅は48～55cmとはほぼ一定の規模を保ち、深さは29～48cmを計測する。断面形は逆梯形状を呈する。底面はほぼ平坦であり、北から南へ緩く傾斜している。出土遺物は皆無であり、所産期を断定することはできないが、覆土層の様相から中世以降の所産であることが窺える。

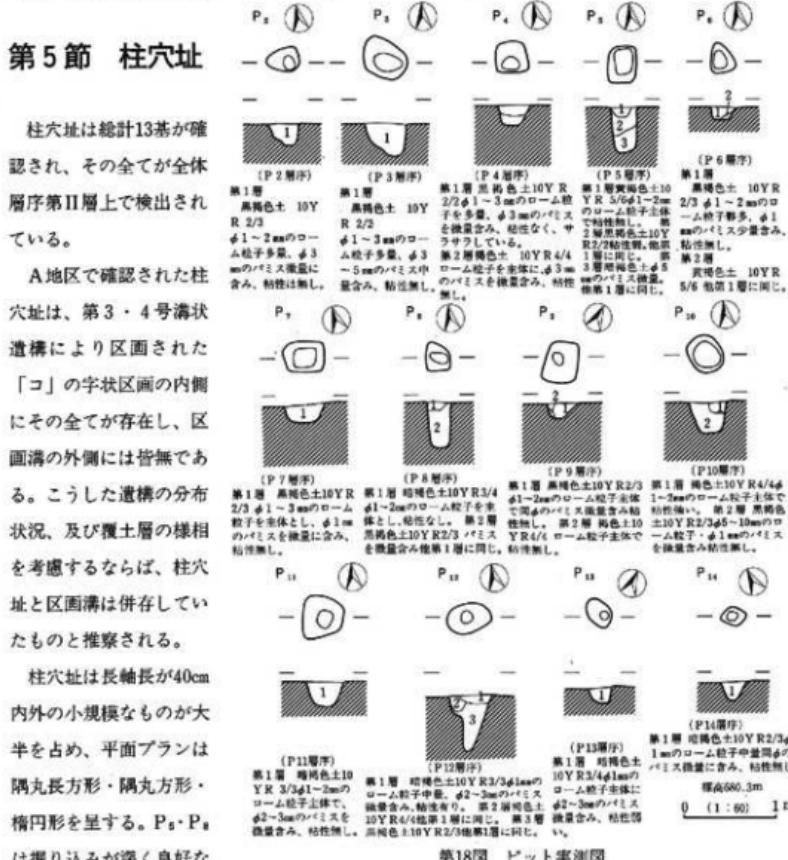


第17図 第4・5・6・7号構状構造測定図

5) 第7号溝状遺構

遺構(第17図)

本遺構はB地区東端のおへけ-53グリッド内に位置し、全体層序第II層上で検出された。やや、蛇行しながら南北方向に走る溝であり、検出長は2064cmを測る。幅は45~73cmを測り、深さは4~11cmと非常に浅い。断面は鍋底状を呈し、底面は北から南へ傾斜している。覆土層及び底面は、填圧された様に堅く、しまりがある。出土遺物は皆無である。覆土層の様相から、非常に新しい時期の所産と判断される。



第18図 ピット実測図

柱穴址である。

掘立柱建物址を想定し得る配置を示すものは存在しないが、P₇～P₁₁はほぼ一直線上に配置されており、柵列状を呈している。

第6節 グリッド出土遺物

第19図は、A地区北西部の耕作土層中より検出された遺物である。土鍋の口縁部破片と思われる。壠部に隙を形成し、内外面共にナデが施されている。胎土にはやや粗い粒の砂粒を多量、白色粒子を少量混入している。茶褐色を呈し、焼成は良好である。



第19図 グリッド内出土
土器拓影図

第IV章 調査のまとめ

本遺跡第2次調査において検出された遺構は、竪穴状遺構2基・土坑22基・溝状遺構5基・柱穴址13基である。また、出土遺物には、土師器・須恵器・須恵質鋗鉢・古錢等があるが、遺構との共伴性を窺える遺物は皆無であると言っても過言ではなく、遺構所産期の上限あるいは下限の年代を漠然と示唆する程度である。一方、遺構においても、所産期を断定し得るほどの構造的特徴を具備しているものは殆んど存在しない。そこで、A地区の遺構分布状況について、おはろげながら、性格を推定し得る第3号溝状遺構を中心に述べてみたい。

A地区における遺構の分布状況は、第3号溝状遺構で区画された内側と外側において、差異が認められる。溝状遺構の内側には、竪穴状遺構及び柱穴址が存在し、土坑の分布は極めて薄い。一方、外側は内側と逆転した在り方を示し、竪穴状遺構及び柱穴址は皆無であり、南西端に土坑が密集する。重複遺構もあるため、この分布状況を同一時間内における傾向として捉えることはできないが、覆土層の様相から、さほど時間差を有するものではないことが窺える。以上のことから、本遺跡における遺構群の在り方は、中世～近世における居住空間と墓域を分割した構造的な遺跡の様相を示すものとして捉えられようかと思われる。しかし、乱暴な推測故、遺跡の全貌が把握できるまで、結論を待たねばならないのである。

引用参考文献

小山岳夫 1987 「祭の木」 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

高桑俊雄・竹原 学 1988 「松本島立三の宮遺跡」 松本市教育委員会



梨の木遺跡航空写真（協同測量社撮影）

図版
二 梨の木Ⅱ遺跡



1 梨の木遺跡遠景（北西より眺む）

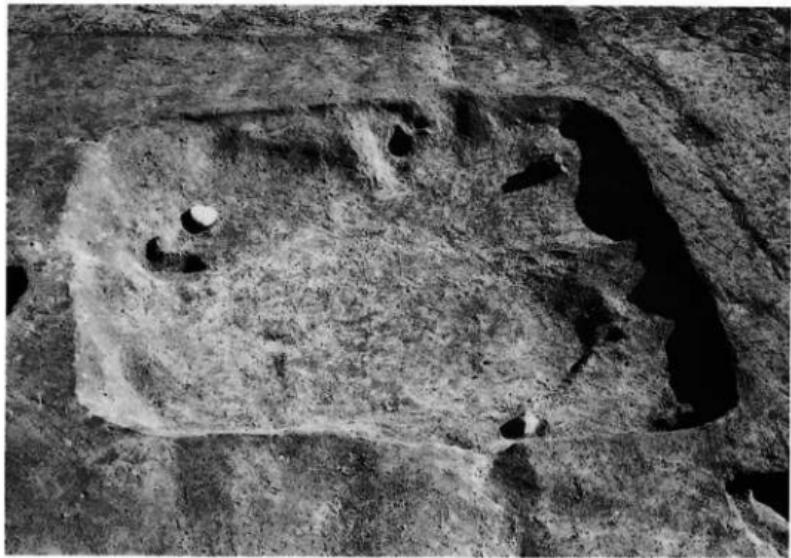


2 A地区全景（東方より）

図版三 梨の木Ⅱ遺跡



1 B地区全景（西方より）



2 第2号竪穴状遺構

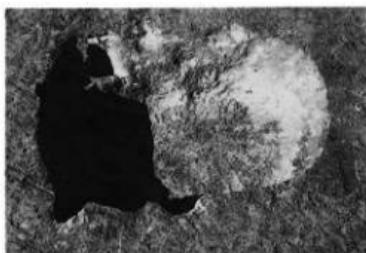
図版
四
梨の木Ⅱ遺跡



1 第3号堅穴状遺構（西方より）



2 第10号土坑（東方より）



3 第11号土坑（東方より）



4 第12号土坑（南方より）



5 第13号土坑（南東より）



1 第14号土坑（東方より）



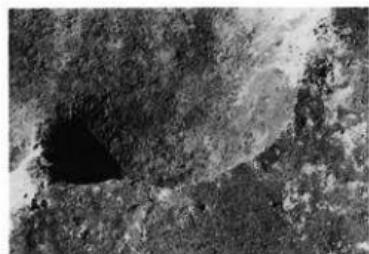
2 第15号土坑（西方より）



3 第16号土坑（南東より）



4 第18号土坑（南東より）



5 第19号土坑（東方より）



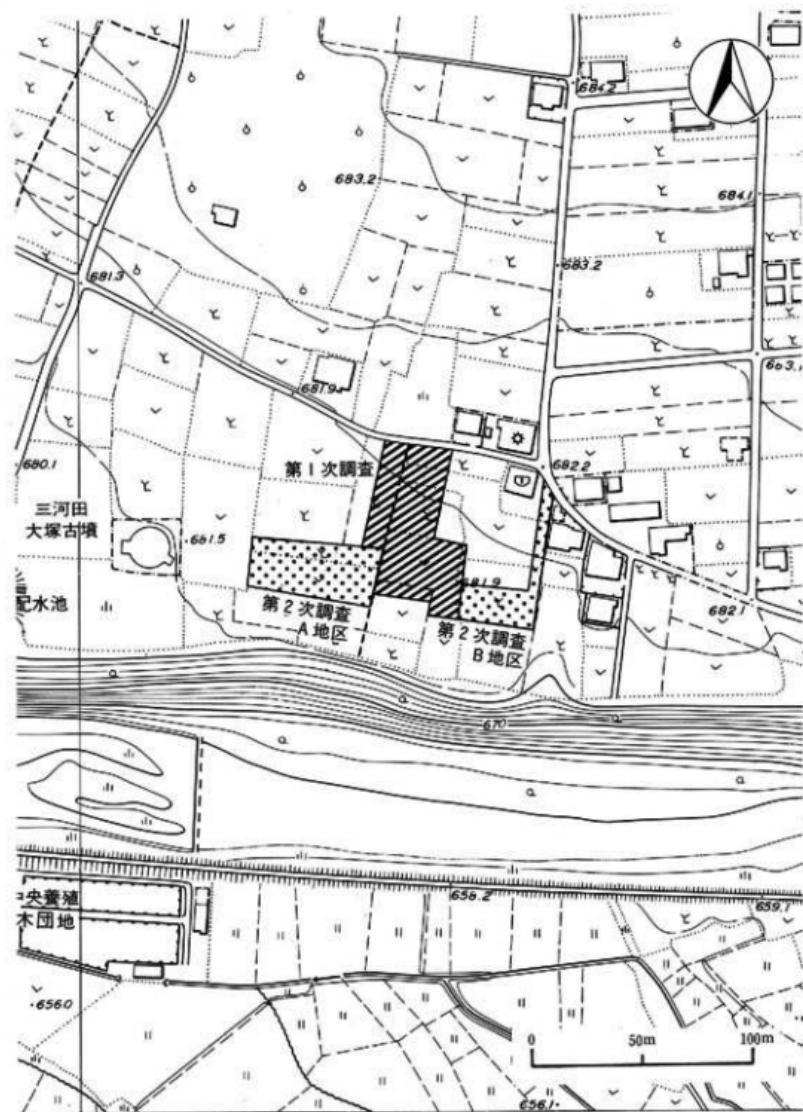
6 第20号土坑（南方より）



7 第21号土坑集石出土状態



8 第21号土坑（西方より）



第3図 第2次調査発掘区設定図 (1:2,500 佐久市基本図20による)

9) 第18号土坑

遺構（第9図・図版五）

本遺構はA地区南西部のくー13グリッド内に位置し、全体層序第II層上において確認された。前述した第13号土坑と重複し、本遺構が第13号土坑より古期に構築されている。平面プランは長軸長113cm、短軸長80cmを測る不整隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-3.5°-Eをさす。深さは14.5cmを測り、鍋底状の断面を呈する。底面はやや起伏をもち、脆弱である。出土遺物はなく、所産期及び性格は判断できない。

10) 第19号土坑

遺構（第9図・図版五）

本遺構はA地区南西隅のけー13グリッド内に位置し、全体層序第II層上において確認された。前述した第16号土坑と重複関係にあり、本遺構がより古期に構築されている。第16号土坑に東側の壁を破壊されるため全容を窺知できないが、現存する西壁及び下場ラインの形状から、橢円形プランが想定される。確認面からの深さは46cmを測り、底面は平坦である。出土遺物は無く、所産期及び性格は不明である。

11) 第20号土坑

遺構（第9図・図版五）

本遺構はA地区南西隅のけー13グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。第26号土坑と重複し、本遺構が第26号土坑を破壊して構築している。平面プランは長軸長143cm、短軸長93cmを測る不整橜円形を呈し、長軸方位はN-56°-Wを示す。深さは20cmを計測し、底面は小規模な平坦面を形成する。遺物は検出されず、性格・所産期共に不明である。

12) 第21号土坑

遺構（第9図・図版五）

本遺構はA地区西部のくー12グリッド内に位置し、第3号溝状遺構底面上において確認された。第3号溝状遺構と重複し、覆土層の堆積状態及び、本土坑の周辺において溝状遺構の形状に変化が観られることから、本土坑は溝状遺構と併存していたものと推察される。平面プランは212×127cmの不整形を呈する。深さは最深部で64cmを測り、側面と底面には小規模な起伏が看取される。疊は北部の側面付近に集中して分布し、千曲川の河床から採集されたものと推察される。出土遺物は無いが、第3号溝状遺構との関係から、中世の土坑と捉えられる。性格は不明である。

図版六 梨の木II遺跡



1 第22号土坑石組み出土状態（北方より）



2 第22号土坑（西方より）



3 第23号土坑（西方より）



4 第24号土坑（西方より）



5 第26号土坑（東方より）



1 第27号土坑（東方より）



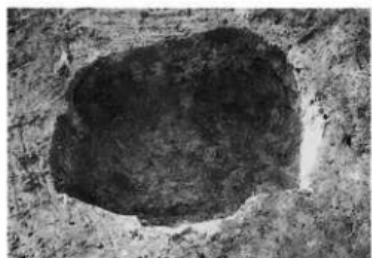
2 第28号土坑（東方より）



3 第29号土坑（南方より）



4 第30号土坑（東方より）



5 第31号土坑（東方より）



6 第5号溝状遺構（南東より）



7 第6号溝状遺構（北方より）



6

1 第2号樹穴状遺構内出土石器



10-1

2 第22号土坑内出土石器



10-3

3 第22号土坑内出土古钱



13

4 第29号土坑内出土土器



14

5 第3号溝状遺構内出土土器



16

6 第5号溝状遺構内出土石器



19

7 グリッド内出土土器



8 発掘調査スナップ

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第17集

長野県佐久市中原遺跡群 梨の木 II 遺跡

1989年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 ほおづき書籍株式会社

第2節 調査日誌

12月9日（金）

表土除去作業を重機にて開始する。まずA地区に重機を搬入して表土を除去し、遺構確認面の把握作業を行う。A地区南西端に数基の土坑を確認する。

12月10日（土）

バックホー、ダンプカーによる表土削平、運搬作業を行う。A地区中央部に竪穴状遺構・溝状遺構の存在を確認する。午後より器材を搬入し、テントの設営を行う。

12月12日（月）

重機によりB地区の表土除去作業を開始する。B地区南東端の地山地形は、急激な角度で南東方向へ傾斜していることが判明する。本日で重機による表土除去作業は終了する。

12月13日（火）

A地区的遺構検出作業を行い、遺構のナンバーリングを行う。

12月14日（水）

順次土坑・溝状遺構の掘り下げ作業に着手する。

12月15日（木）～12月17日（土）

竪穴状遺構・土坑・溝状遺構・柱穴址の掘り下げ作業、写真撮影及び遺構実測を行う。A地区西側より全体測量も開始する。

12月19日（月）・12月20日（火）

B地区の遺構掘り下げ作業に着手し、順次写真撮影・遺構実測を行う。B地区北端にトレチを設定し、遺構の存否を確認する。

12月21日（水）

A・B両地区の全体測量、遺構写真撮影を終了する。

12月22日（木）

調査区の全体清掃を行い、航空写真を撮影する。

12月23日（金）

レベル原点の標高を測定する。器材・テントを撤収し、現場調査を終了する。

12月24日（土）・12月26日（月）

重機により埋め戻しを行い、後に重機を撤収する。

12月27日（火）～平成元年3月20日（金）

報告書作成作業を行い全調査を完了する。

22) 第31号土坑

遺構 (第12図・図版七)

本遺構はB地区西部のやや南寄り、こー1グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。前述した第30号土坑と重複し、本土坑がより古期に構築されている。平面プランは長軸長140cm、短軸長111cmの規模を有する隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-6°-Eをさす。壁は垂直に掘り込まれ、確認面からの深さは47.5cmを計測する。覆土層は4層に大別され、堆積状況・含有物の在り方から人為的に埋められた土層と捉えられる。出土遺物は皆無で、所産期・性格は不明である。

第4節 溝状遺構

1) 第3号溝状遺構

遺構 (第15図)

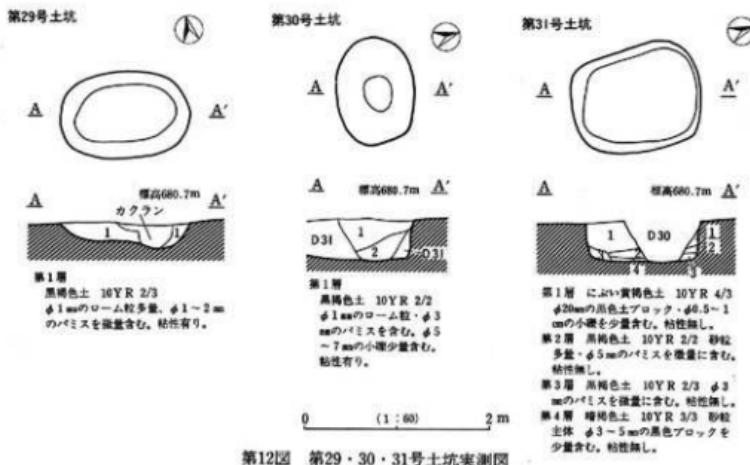
本遺構はA地区西部域において縦走（南北方向）し、けー12グリッド内で垂直に折れ曲がり、調査区中央部を横走（東西方向）する。検出位置は、き-12、く-11・12、け-8～12グリッド内である。第2号竪穴状遺構、第21・22号土坑と重複関係を有する。本溝は第2号竪穴状遺構に切られ、第21・22号土坑とは併存する。全体の形状が「L」字状を呈する溝で、北端からコーナーまでの長さは1480cm、東端からコーナーまでの長さは2904cmを計測する。溝幅は100cm内外を基調とするが、第21・22号土坑周辺の最大部では372cm、最小値を示す第2号竪穴状遺構の付近では48cmを計測する。北端及び中央部では2段構築となり、テラス面を形成する。深さは5～28cmを測り、断面形は鍋底状を呈する。覆土は5層からなる。出土遺物は僅少であり、その内訳は土師器・須恵器・須恵質土器である。何れも細片であるため遺構との共伴性は薄いが、少なくとも遺構の上限年代が、須恵質土器の所産期を遡り得ないことを示唆する。一方、近世遺物の出土が観られない点も考慮すると、本溝の所産期を漠然と中世に位置付けることができる。また、本溝の形態及び、他遺構の分布状況から、区画性を帯びた溝であることが窺える。

遺物 (第14図・図版八)

須恵質の摺鉢である。外面の調製は粗く凹凸に富むが、内面は丁寧である。8条の条線が刻まれ、焼成は堅緻である。砂粒を多含し、色調は褐灰色 (10YR 6/1) を呈する。



第14図 第3号溝状遺構内出土
土器拓影図



第12図 第29・30・31号土坑実測図

所産期及び性格は不明である。

20) 第29号土坑

遺構 (第12図・図版七)

本遺構はB地区中央、やや西寄りのこ-50グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。平面プランは長軸長139cm、短軸長82cmの梢円形を呈し、長軸方位はN-81.5°-Wをさす。確認面からの深さは28cmを計測する。覆土は黒褐色土1層からなり、土坑中央部は桑の根により擾乱されている。底面には緩い起伏が認められ、土坑東部において最も深くなる。出土遺物は土師器・土質土器細片の2点が認められるものの、検出面及び擾乱された土層内からの出土であり、本遺構の所産期及び性格を傍証する資料にはなり得ない。

遺物 (第13図・図版八)

土師器壊の底部破片である。底裏面には回転糸切り痕が看取され、内外面はナデが施されている。微砂粒を少量含有し、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色 (10YR 7/4) を呈する。

21) 第30号土坑

遺構 (第12図・図版七)



第13図 第29号土坑内出土土器実測図

2) 第4号溝状遺構

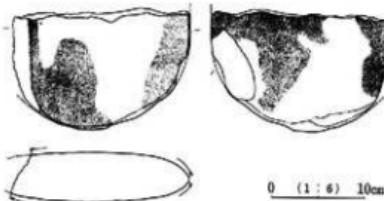
遺構（第17図）

本遺構はA地区東部、き～こー8グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。第5号溝状遺構と重複関係を有し、覆土の堆積状態及び遺構の構築状態から同時期の所産として捉えられる。概略、南北方向に直線的に走る溝であり、検出長は2464cmを計測する。溝幅は74～140cm、深さは20～26cmを測り、底面は南から北へ若干低下している。覆土は第1層—黒褐色土・第2層—暗褐色土・第3層—褐色土の3層からなる。出土遺物は皆無であり、所産期を限定し得ないが、第3号溝状遺構の縦走部と平行し、本遺構を東限として一旦遺構の分布が親られなくなることより、本遺構は第3号溝状遺構と対になり区画的な役割を果たしていたものと推察される。

3) 第5号溝状遺構

遺構（第17図・図版七）

本遺構はA地区東部のくー7・8グリッド内に位置し、全体層序第II層上で確認された。前述した第4号溝状遺構と重複し、同一時期の所産と理解できる。やや弧を描きながら東西に走る溝であり、検出長は1348cmを測る。溝幅は、最小値を示す第4号溝状遺構との連結部において56cm、最大部で104cmと狭広が認められているが、おむね100cmの幅を保って横走している。深さは41～66cmを測り、断面形は逆梯形状を呈する。出土遺物は僅少であり、連結部東側の第2層中より、磨耗痕を有し炭化物状の付着物が看取される円碟が1点（第16図）出土している。第4号溝状遺構・覆土層の様相により、中世における区画溝として捉えておきたい。



第16図 第5号溝状遺構内出土石器実測図

4) 第6号溝状遺構

遺構（第17図・図版七）

本遺構はB地区東端け・こー53グリッド内に位置し、基本層序第II層上で確認された。おおむね、南北方向に直線的に走る溝であり、検出長は1072cmを計測する。幅は48～55cmとはほぼ一定の規模を保ち、深さは29～48cmを計測する。断面形は逆梯形状を呈する。底面はほぼ平坦であり、北から南へ緩く傾斜している。出土遺物は皆無であり、所産期を断定することはできないが、覆土層の様相から中世以降の所産であることが窺える。

宮の上遺跡群

MIYA NO UE
宮 の 上 II

長野県佐久市横和宮の上遺跡第2次発掘調査報告書

1989

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

目 次

例 言

凡 例

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機	1
-----------------	---

第 2 節 調査日誌	1
------------	---

第 II 章 基本層序

第 1 節 基本層序	2
------------	---

第 III 章 遺構と遺物

第 1 節 検出遺構・遺物の概要	5
------------------	---

第 2 節 竪穴住居址	5
-------------	---

1) 第 3・6 号住居址	5	2) 第 4 号住居址	13
---------------	---	-------------	----

3) 第 5 号住居址	18	4) 第 7 号住居址	18
-------------	----	-------------	----

第 3 節 土坑およびピット	21
----------------	----

1) 第 2・3 号土坑	21	2) 第 4 号土坑	21
--------------	----	------------	----

3) 第 1・2 号ピット	23
---------------	----

第 4 節 溝状遺構	22
------------	----

1) 第 4 号溝状遺構	23	2) 第 5 号溝状遺構	25
--------------	----	--------------	----

3) 第 6 号溝状遺構	25	4) 第 7 号溝状遺構	25
--------------	----	--------------	----

第 IV 章 調査のまとめ

第 1 節 第 4 号土坑について	28
-------------------	----

第 2 節 所謂「北信型」の甕について	30
---------------------	----

引用参考文献

例　　言

- 1 本書は長野県佐久建設事務所による昭和63年度国補交通安全事業（歩道設置工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者　　長野県佐久建設事務所
- 3 調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 発掘調査所在地籍および面積　　宮の上遺跡群宮の上遺跡（略号YMMII）
- 5 調査期間　　昭和63年12月5日～12月13日、昭和63年12月14日～平成元年 月 日
- 6 調査団の構成
事務局　　佐久埋蔵文化財調査センター
 - 所長　　西沢 正巳
 - 庶務係長　　畠山 俊彦
 - 庶務係　　田中 芳美（昭和63年12月退任）（嘱託職員）
菊池 直美（平成元年2月就任）（臨時職員）
 - 調査係主任　　高村 博文
 - 調査係　　三石 宗一・木内 品義・須藤 隆司・小山 岳夫・小林 真寿・翠川 泰弘・竹原 学・助川 朋広・篠原 浩江（嘱託職員）
- 7 調査団
 - 団長　　黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）
 - 調査指導者　　林 幸彦・羽毛田卓也（佐久市教育委員会）
 - 調査担当者　　小林 真寿
 - 調査主任　　竹原 学
 - 調査補助員　　神部 妙子・和久井義雄（佐久考古学会員）
 - 発掘協力者　　花岡美津子・小出ユミ子・坂龍ミサト・成沢富子
- 8 本書の撮集・執筆は小林・竹原が行い文責は文末に記した。遺構写真については小林・竹原が、遺物写真は畠山が撮影した。
- 9 本書および宮の上遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
本調査に際して地元の方々、鍋林株式会社佐久営業所には数々のご協力・ご援助をいただきました。記して感謝の意を表します。

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

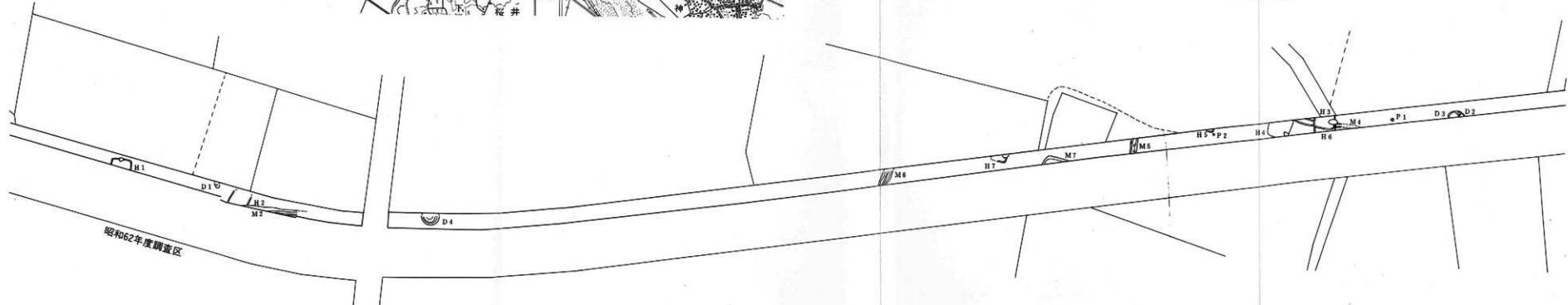
宮の上遺跡群宮の上遺跡は佐久市横和に所在し、千曲川支流の湯川左岸の第2段丘上に立地する。北側の対岸には弥生時代の大集落また古墳群で名高い北西の久保遺跡、同じ台地上の南側には佐久地方最大の横穴式石室を有する三河田大塚古墳を眺み、佐久市の遺跡の宝庫の中央部に立地していると言っても過言ではない。

遺跡群は市内遺跡詳細分布調査によれば縄文・弥生・奈良・平安時代の遺物が採集されており、昭和50年度に行われた本調査地区の南東部にあたる高根遺跡の調査でも弥生時代の遺物が検出されている。

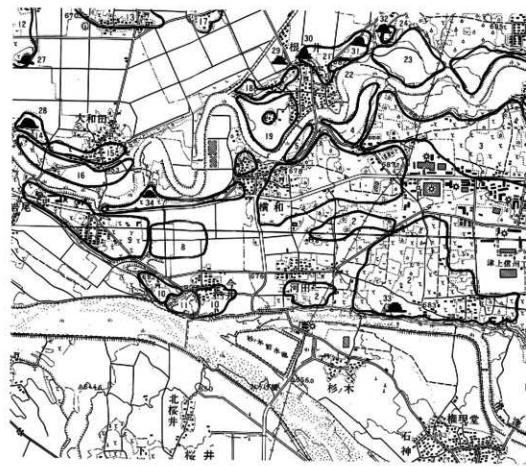
昭和62年度佐久建設事務所による国補交通安全事業（歩道設置工事）に伴い、本遺跡の調査が実施され、平安時代の堅穴住居址2棟・時期不明の溝址2条・土坑1基が検出されている。昭和63年度においても国補交通安全事業が昭和62年度実施区間の東方に向って計画されたため、長野県教育委員会文化課・佐久建設事務所・佐久市教育委員会の三者で協議を行った結果、遺跡の破壊やむなきに至り緊急に調査して記録保存する必要が生じた。そこで佐久市教育委員会が佐久建設事務所より委託をうけ、佐久市教育委員会から委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行う運びとなった。

第2節 調査日誌

- 昭和63年12月5日（月） 午後機材の搬入、テントの設営を行い、調査前の遺跡遠景を撮影する。
- 12月6日（火）～8日（木） 重機による表土除去、及び遺構検出。並行して遺構が存在しない部分の埋め戻しを行う。8日よりH7住、D2・3、pit1に着手。H7住終了。
- 12月9日（金）～10日（土）・12日（月） H3・4・5・6、D4、M4・5・6・7、pit2に順次着手。12日にBMを移動して遺跡調査を全て終了し、機材の撤収を行う。
- 12月13日（火） 調査区の埋め戻しと道路バリケードを撤収し、全ての調査を終了する。
- 12月14日（水）～平成元年3月20日（月） 報告書作成作業を行い全調査を完了する。



第2図 宮の上遺跡の位置・周辺道路および発掘区設定図



No.	監視番号	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
					縦	横	古	中	新		
1	143	宮の上遺跡	横川左岸の上流側、西風のり、西側面露頭、 山之上、高瀬川、南側斜面、北壁、露頭、十二段階	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、発掘調査 昭和55年度、宮の上遺跡
2	141	中島遺跡	宇治川左岸の上流側、山之上、高瀬川、十二段階	山側	○	○	○	○	○	○	昭和56年度、宮の上遺跡
3	257	中島遺跡	宇治川左岸の上流側、山之上、高瀬川、十二段階	山側	○	○	○	○	○	○	昭和57年度、中島遺跡
4	186	御殿河遺跡	横川右岸の露頭、北側面露頭	山側	○	○	○	○	○	○	昭和58年度、御殿河遺跡
5	242	赤石川遺跡	松井川河口の露頭、露頭小口径口動	山側	○	○	○	○	○	○	昭和59年度、赤石川遺跡
6	231	東郷遺跡	横川河口の露頭、露頭小口径口動	山側	○	○	○	○	○	○	昭和60年度、東郷遺跡
7	231	東郷遺跡	横川河口の露頭、露頭小口径口動	山側	○	○	○	○	○	○	昭和60年度、東郷遺跡
8	234	今井遺跡	今井川河口の露頭、露頭小口径口動	山側	○	○	○	○	○	○	昭和60年度～47年度調査
9	235	今井遺跡	今井川河口の露頭、露頭小口径口動	山側	○	○	○	○	○	○	昭和60年度～47年度調査
10	238	今井川河口遺跡	今井川河口の露頭、露頭小口径口動	山側	○	○	○	○	○	○	昭和60年度～47年度調査
11	236	今井遺跡	今井川河口の露頭、露頭小口径口動	山側	○	○	○	○	○	○	昭和60年度～47年度調査
12	237	今井遺跡	今井川河口の露頭、露頭小口径口動	山側	○	○	○	○	○	○	昭和60年度～47年度調査
13	27	道造遺跡	当村子山北側、玄石・伊勢駒形	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、道造遺跡
14	225	北道造遺跡	当村子山北側、南北露頭	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、北道造遺跡
15	226	東道造遺跡	当村子山北側、南北露頭	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、東道造遺跡
16	227	八角山遺跡	当村子山北側、月輪駒形	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、八角山遺跡
17	81	城原町駒形遺跡	城原字大久保、月輪駒形	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、城原町駒形遺跡
18	94	猪ヶ谷駒形遺跡	猪ヶ谷字新町、月輪駒形	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、猪ヶ谷駒形遺跡
19	97	伊勢山遺跡	猪ヶ谷字伊勢山	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、伊勢山遺跡
20	106	猪ヶ谷駒形遺跡	猪ヶ谷字伊勢山、猪ヶ谷山	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、猪ヶ谷駒形遺跡
21	106	猪ヶ谷駒形遺跡	猪ヶ谷字伊勢山、猪ヶ谷山	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、猪ヶ谷駒形遺跡
22	106	猪ヶ谷駒形遺跡	猪ヶ谷字伊勢山、猪ヶ谷山	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、猪ヶ谷駒形遺跡
23	39	中西八久留遺跡	石川町中西八久留の東側、東側の久留低	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、中西八久留遺跡
24	96	北西八久留遺跡	石川町中西八久留の北側	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、北西八久留遺跡
25	105	一中島遺跡	白井町中島、一中島、一中島上、一中島門前	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、一中島遺跡
26	109	中島遺跡	白井町中島門前	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、中島遺跡
27	122	道造遺跡	当村子山北側	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、道造遺跡
28	238	道造遺跡	当村子山北側	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、道造遺跡
29	269	猪ヶ谷大久留遺跡	猪ヶ谷字大久留	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、猪ヶ谷大久留遺跡
30	270	猪ヶ谷大久留遺跡	猪ヶ谷字大久留	山側	○	○	○	○	○	○	昭和54年度～60年度、猪ヶ谷大久留遺跡
31	111	上野川古墳群	相模川左岸上流部H308-1, H31-1, H32-1	山側	○	○	○	○	○	○	1-3季まで調査
32	118	東西八久留遺跡	相模川左岸北側の久留	山側	○	○	○	○	○	○	17年度C-K-4C, 18年度C
33	210	猪ヶ谷駒形遺跡	猪ヶ谷字伊勢山D14-5	山側	○	○	○	○	○	○	17年度C-K-4C, 18年度C
34	220	猪ヶ谷駒形遺跡	猪ヶ谷字伊勢山	山側	○	○	○	○	○	○	17年度C-K-4C, 18年度C
35	95	猪ヶ谷駒形遺跡	猪ヶ谷字伊勢山	山側	○	○	○	○	○	○	17年度C-K-4C, 18年度C

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 検出遺構・遺物の概要

今回の調査区は昭和62年度調査区の東端から道路北側に沿って全長188m、幅約2mの範囲で実施したため、遺構の全容を検出できたものは皆無に等しい。以下が今回の調査で検出された遺構・遺物の概要である。

遺構

竪穴住居址 5棟 奈良・平安時代 溝状遺構 4条 時期不明

土坑 3基 時期不明 Pit 2基 時期不明

遺物

土器 土師器・須恵器・灰陶陶器・土師質土器 石器 所謂「こも石」等

鉄器 角釘

第2節 竪穴住居址

1) 第3・6号住居址

遺構 (第3図、図版三)

調査区東端より35mの位置にあり、西に隣接して第4号住居址が存在している。重複関係は第3号住居址が第6号住居址北半を切り、さらに第4号溝状遺構が両住居址を切っている。

第3号住居址は南半部が調査対象となった。平面形態・規模は東西長2.98mが知られる他不明である。隅丸方形の住居址と推測できよう。長軸方位はおおむね南北ないし東西方向と言えよう。

覆土はほとんど分層不可能で、第6号住居址との區別も難しく、本址がやや暗い程度である。

壁の状態は悪い。壁高6~18cmを測り、立ち上りは急である。西~南壁下には壁溝が存し、西壁下で広く幅22cm、南壁下では12cmを計測する。深さは床面より6cm前後である。

床面は西壁下に堅密な貼床が認められる他は、地山をそのまま利用している。全般に平坦な面をなし、貼床は粘性のある黄褐色土を薄く貼っている。

ピットは東南隅、カマドとの間に存在する1基のみで、柱穴は見られない。P₁は東西長113cm、

深さ11cmを測り、グラグラと掘り込まれる。底面～南側床面にかけ被熱のため焼土化している。

カマドは東壁やや南寄りと思われる位置に存している。天井部は失われているものの、袖部以下良好に残存している。規模は焚口から煙道までの長さ100cm、袖幅69cmを測る。煙道部は壁を山形に掘り込み、扁平な石材を敷く。袖部は床面を20cm程掘り下げ、棒状の石材を立てて芯としている。火床面は長さ32cm、幅40cmの範囲が焼けている。本カマドは構築時石材の設置と前後して、火床面～焚口にかけて長さ77cm、幅59cmの範囲を楕円形に掘り込んでいる。深さは床面より34cmを測り、火床面までを灰黄褐色土で埋めている。尚、支柱石は検出されなかった。

遺物はカマド内より壺類の完形品、甕破片が多出している。覆土～床面にかけては中央部を主体に破片の出土が多く、南西床面に灰釉陶器が、中央西寄り床面より鉄釘が出土している。

第6号住居址は南半部が未調査であり、さらに第3号住居址に北壁を破壊されているため全形は不明である。規模は東西長3.16mで、長軸方位は第3号住居址と若干ずれるようである。

壁は不明瞭でやや傾斜して立ち上り、残存高7～15cmを測る。壁溝は確認されない。

床面は地山を利用し、貼床はされない。平坦ではあるがさほど堅くない。

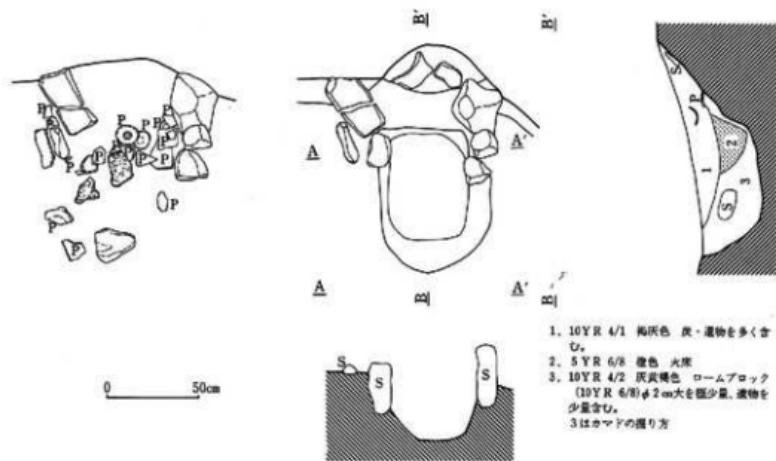
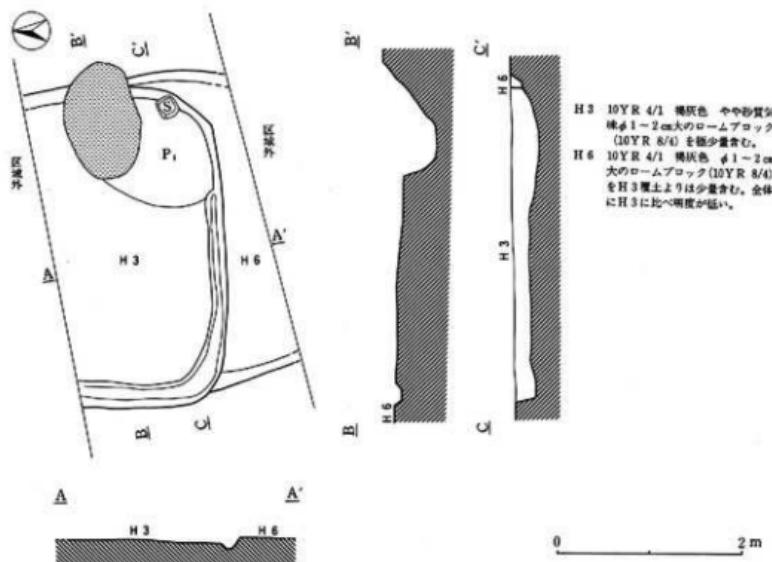
カマドは第3号住居址構築時に破壊されている。前述の南東隅ピット～床面にかけての被熱部分がその痕跡と受けとれよう。

遺物は少なく、覆土中に破片が散在した状況で出土している。しかし第3号住居址出土土器と接合するものが見られ注意される（5-4・10・17、6-4）。遺構のあり方も位置・規模が似ており、第3号住居址は本址の建て替えと推察される。

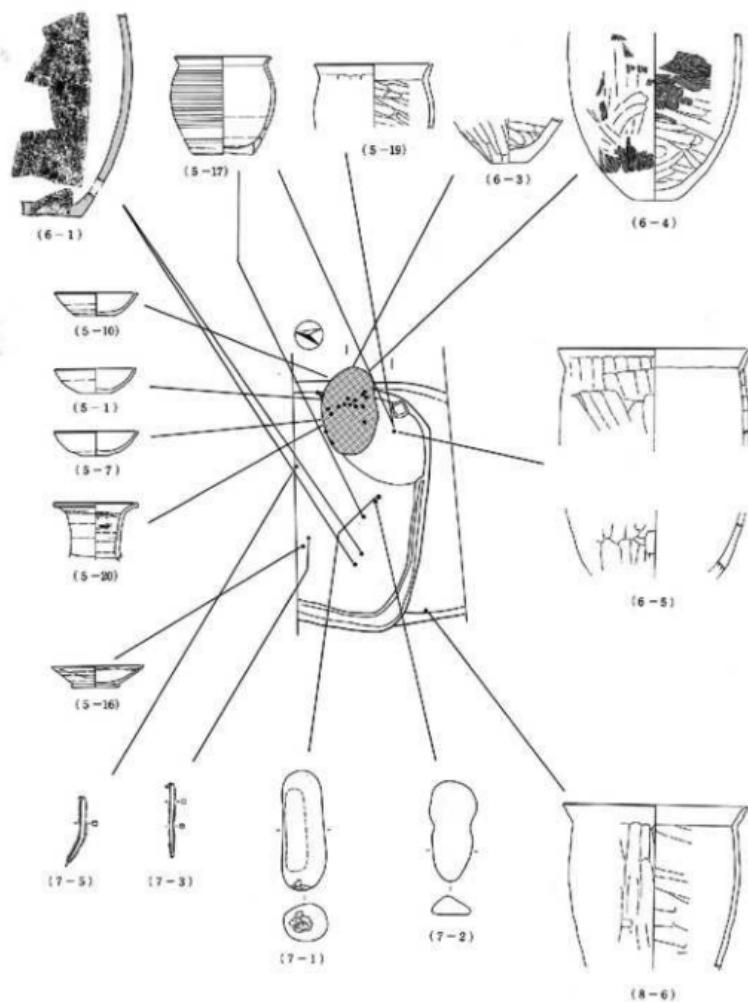
遺物（第5～8図、図版六・七）

第3号住居址 土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器・石器などがある。それぞれ25点・1点・1点・3点・2点を図示した。その他の破片も含め土師器が主体を占め、須恵器・灰釉陶器は極めて少ない。特に供膳形態では須恵器は皆無に等しい。

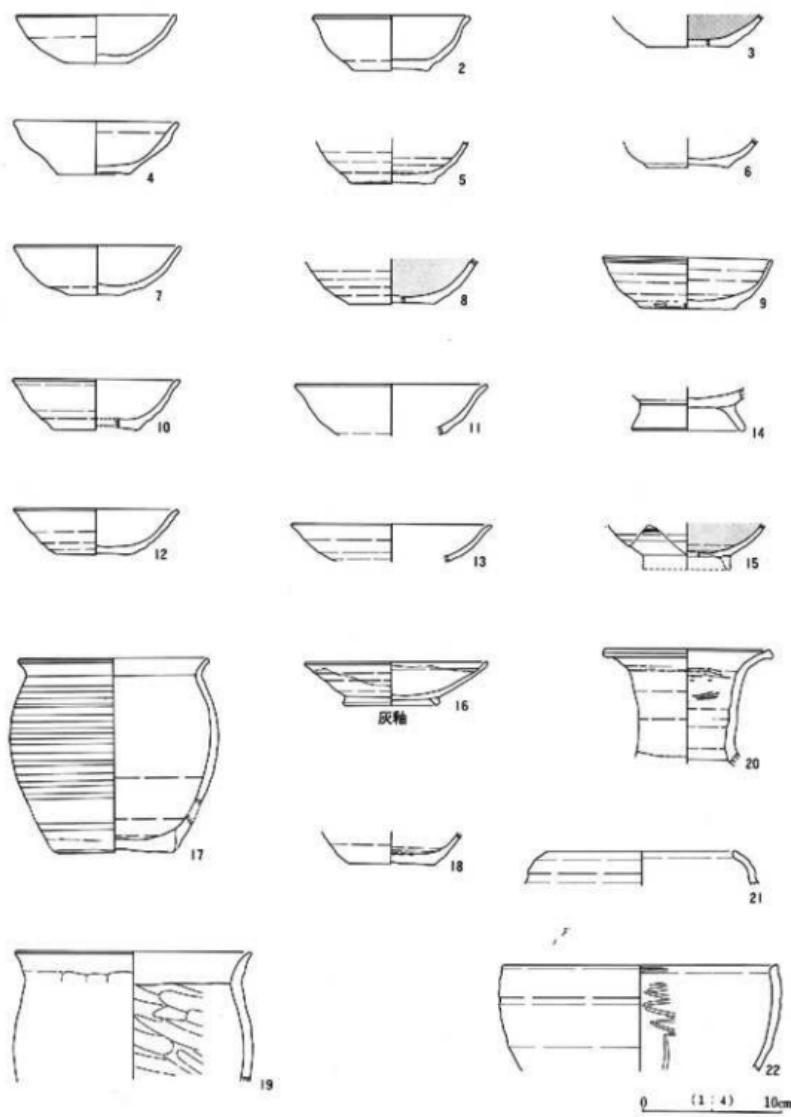
土師器の器種は甕・小型甕・壺・塊・皿・鉢・長頸甕が挙げられる。甕は6-2～5共に体部が砲弾形をなし、下位はふ厚く小径の平底をなすものである。体部上位に最大径を有し、口径もほぼ等しい。頭部のしまりは弱く、くの字形に屈折して開く口縁部をなす。小型甕は甕と同様、ナデ主体の5-19と、ロクロを用い、カキ目調製を施す5-17・18とがある。後者は短くくびれる口縁部に丸く張る体部が付く。壺・塊・皿はほとんどロクロ調整のみで仕上げられ、わずかに黒色処理される5-3・9のみヘラミガキされるが粗い。5-21・22は鉢形になると思われるが小片のため全形は不明である。21は無頸甕形とした方がよいかもしれない。22の内面は粗くヘラミガキされる。長頸甕は内面調整に板状の工具が用いられ、焼成が赤くやや軟質のため土師器とした。須恵器は甕（6-1）を図示し得た。灰釉陶器は5-16、1点のみである。断面三角形の高台は鈍く釉が漬け掛けであり、東濃大原2号窯式期の所産と考えられる。



第3図 第3・6号住居実測図



第4図 第3・6号住居址遺物出土分布図 (1:80・1:8)



第5図 第3号住居址出土土器実測図(1)

第V章 調査のまとめ

今回、薊沢遺跡第2次調査において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、土坑2基、ピット1基、溝状遺構1基である。一方出土遺物は、土師器、須恵器、石器などがある。

薊沢遺跡第1次調査では、奈良末～平安時代前葉の集落址の存在が明らかになった。今回の調査で学校敷地東側のC・D地区からは遺構の存在は認められなかった。また、第1次調査を実施した、B地区の南側E地区及び西側F地区においても、住居址の存在は確認されなかった。これらのことから、第1次調査で検出された集落跡は北方及び西方に広がりをもつものと考えられる。

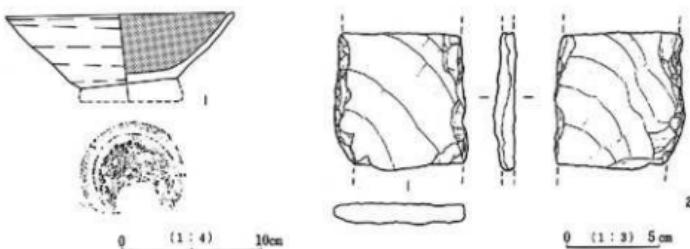
今回の調査で集落址の南方の限界が明らかになったことは、今後の調査に一つの指標を与えたものと考えられる。

(高村)

第3節 区出土遺物 (第10図、図版四)

C地区より土師器1点、打製石斧1点が出土している。10-1は土師器の高台付坏で、外面口クロナデ調整が施され、内面はタテ方向に乱雑なミガキを施した後、口縁部内面にヨコミガキが施されている。回転糸切りの後、高台が貼付されたため、高台部分を欠損している。平安時代のものといえる。10-2は石質玄武岩製の打製石斧で短骨型を呈す。基部と刃部を欠損している。

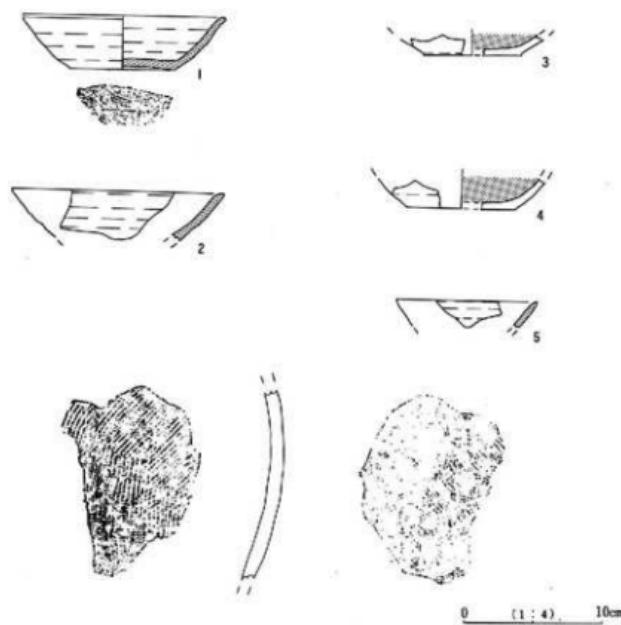
(助川)



第10図 C地区出土遺物実測図

第2表 C区出土土器観察表

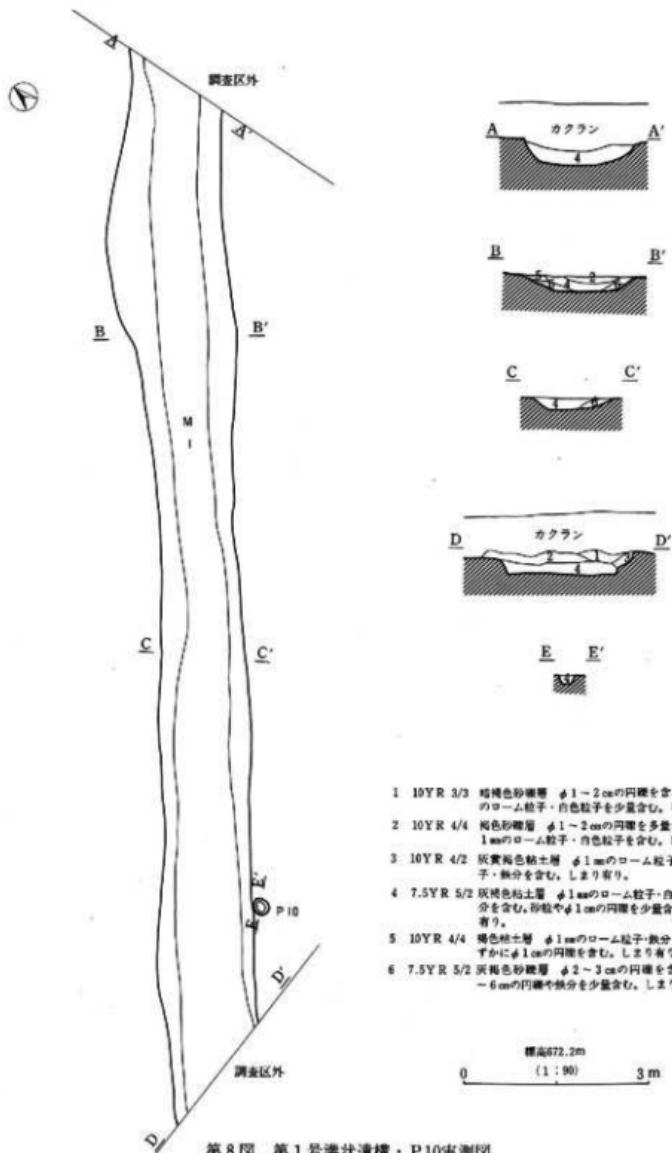
番 号	器 物	法 番	式形及び器形の特徴	同 型	備 考
10-1	土 師 器 高台付 坏	16.8 4.9 7.2	口縁部僅かに内向する。	内) 黒色施墨。乱雑なタテ方向のミガキの後、口 縁部付近ヨコミガキ 外) ロクロヨコニテ	完全実測 色調10Y R6/6 (前黄褐色)



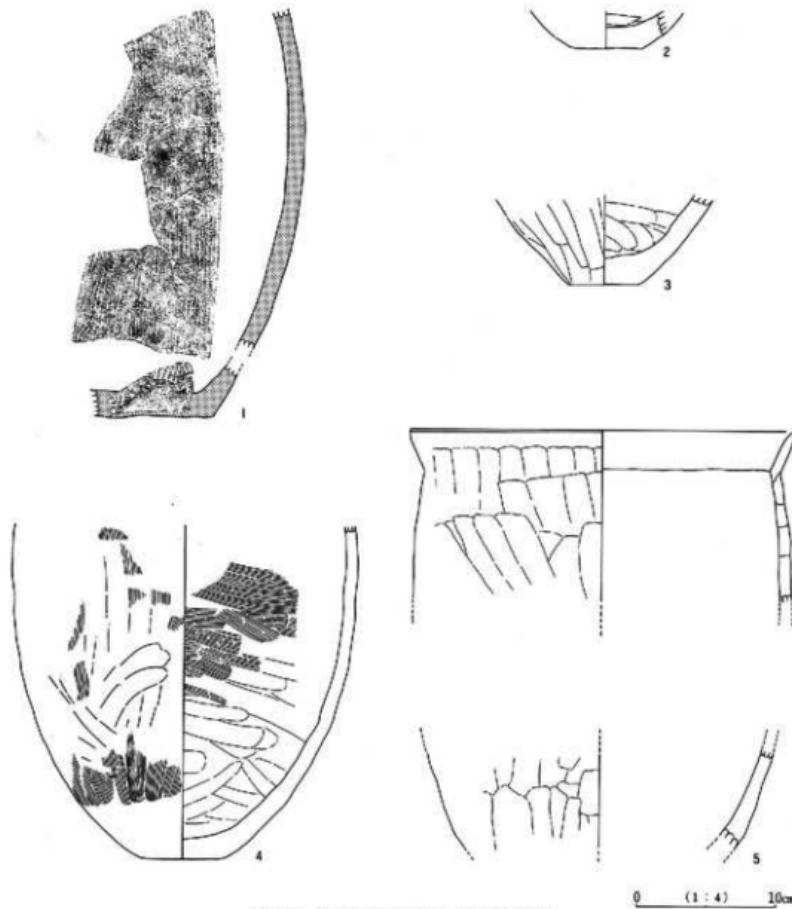
第9図 第1号溝状遺構出土土器実測図

第1表 第1号溝状遺構出土土器観察表

辨別番号	器種	法量	形態及び器形の特徴	測定	備考
8-1	鉢底环	(14.8) 3.8 (7.5)	口縁部内向外傾。口唇部外反する。 底部内面磨かれている。	内外共にロクニコナデ 底部回転系切り	回転実測B 色調7.5Y R6/1(褐色)
8-2	鉢底环	(15.2) <3.4> —	口縁部内向外傾。口唇部外反する。	内外共にロクニコナデ	破片実測A 色調10G Y6/1(褐色)
8-3	土鉢环	— <1.5> (7)	平底	内) 黒色処理 外) 手跡もハラケズリ?	回転実測B 色調10Y R7/8(黄褐色)
8-4	土鉢环	— <1.9> (7.4)	平底	内) 黒色処理 外) 手跡もハラケズリ?	回転実測B 色調10Y R6/6(明黄褐色)
8-5	鉢底环	(15.2) <1.9> —	口縁部底盤気味に外傾する。	内外共にロクニコナデ	破片実測A 色調10Y R6/1(褐色)



第8図 第1号溝状遺構・P10実測図



第6図 第3号住居址出土土器実測図(2)

鉄器は3点共角釘で、原形をよくとどめる。7-3・5は頭部が潰れる。石器は2点共柵物用石錐と考えられ、自然石を利用している。7-2は磨面および敲打痕を有している。

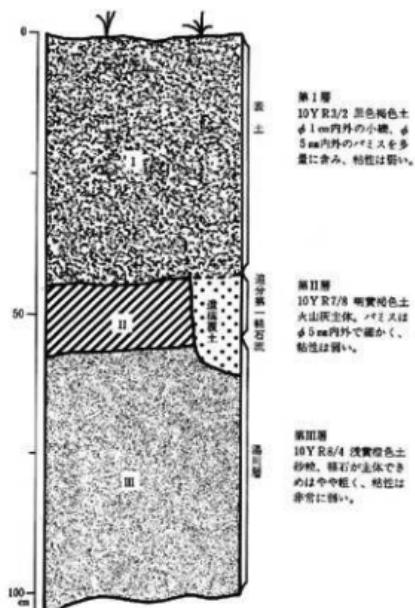
第6号住居址 土師器甕・壺・塊6点を図示した。甕は第3号住居址と同様である。8-1はやや足高の高台をもち、内面には暗文状に十字形、ラセン状のヘラミガキを行う。

以上の土器様相は平安時代中葉に帰属すると考えられ、両住居址間での顕著な差は見られない。

(竹原)

第II章 基本層序

第1節 基本層序



第1図 基本層序模式図

宮の上遺跡は湯川左岸の2段目の段丘上に立地し、標高は676~678mを測り、今回調査地区は東から西へ向って緩い傾斜を示す。

遺跡の基本的な層序は第1図に示したとおりで、表土第I層は45cm内外と比較的厚い堆積を示す。第II層・火山灰層は10cm強の薄い堆積で、以下は“湯川層”と言われる砂粒主体層が厚く堆積しているが、この層厚については未確認である。

遺構の確認は第II層上において確実にできるが、第I層と遺構覆土は酷似しており、確認面のレベルがさらに高くなる可能性は強い。

本遺跡南東に約1.2km離れた位置の梨の木遺跡の遺構覆土も表土と酷似しており、このようなあり方は当台地上の遺跡に共通することかもしれない。

挿図目次

第1図 基本層序模式図	2	第13図 第7号住居址実測図	19
第2図 宮の上遺跡の位置・周辺遺跡 および発掘区段定図	3	第14図 第7号住居址出土土器実測図	19
第3図 第3・6号住居址実測図	7	第15図 第2・3号土坑実測図	21
第4図 第3・6号住居址遺物出土分布図	8	第16図 第4号土坑実測図	22
第5図 第3号住居址出土土器実測図(1)	9	第17図 土坑出土土器実測図	22
第6図 第3号住居址出土土器実測図(2)	10	第18図 第1・2号ピット実測図	23
第7図 第3号住居址出土石器・鉄器実測図	12	第19図 第4号溝状遺構実測図	24
第8図 第6号住居址出土土器実測図	12	第20図 第5号溝状遺構実測図	24
第9図 第4号住居址実測図	14	第21図 第6号溝状遺構実測図	25
第10図 第4号住居址出土土器実測図(1)	15	第22図 第7号溝状遺構実測図	25
第11図 第4号住居址出土土器実測図(2)	16	第23図 溝状遺構出土土器実測図	26
第12図 第5号住居址および出土土器実測図	18	第24図 池畑遺跡第1号土坑・宮ノ反遺跡 第6号土坑実測図	29

付表目次

第1表 第3号住居址出土土器観察表	11	第5表 第7号住居址出土土器観察表	20
第2表 第6号住居址出土土器観察表	13	第6表 土坑出土土器観察表	23
第3表 第4号住居址出土土器観察表	16	第7表 溝状遺構出土土器観察表	27
第4表 第5号住居址出土土器観察表	18		

写真図版目次

図版一 宮の上遺跡付近航空写真	1	第3号住居址出土石器	1
図版二 1 宮の上遺跡遺構	2	2 第3号住居址出土鉄器	2
2 表土除去作業	3	3 第3号住居址出土土器	3
図版三 1 第3号住居址	4~6	4~6 第6号住居址出土土器	4~6
2 第3号住居址カマド遺物出土状況	7	7 第4号住居址出土土器	7
3 第3号住居址カマド	図版八 1~3	8 第4号住居址出土土器	8
4 第4号住居址	4	5~6 第7号住居址出土土器	5~6
図版四 1 第5号住居址	7~8	7~8 第7号溝状遺構出土土器	7~8
2 第7号住居址			
3 第4号土坑			
図版五 1 第4号土坑セクション			
2 第4号溝状遺構			
3 第5号溝状遺構			
4 第6号溝状遺構			
図版六 1~10 第3号住居址出土土器			

凡 例

- 1 遺構の略称 窪穴住居址⇒H、溝状遺構⇒M、土坑⇒D
- 2 遺構Noは昭和62年度調査分の続きNoとした。遺跡の環境については昭和63年度刊行の第1次調査報告書で詳述されているため省略した。
- 3 水系レベルについては全ての遺構を685mで統一したが、統一できなかった遺構については縮尺尺度の上に明記した。
- 4 採図
 - 1) 縮尺 遺構⇒1/60 (カマドは1/30) 遺物 土器・石器⇒1/4、鉄器⇒1/3
 - 2) 遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーンは下記の内容の表現である

地 山 ■■■■■ カマド ■■■■■ 土師器内面黒色 ■■■■■

須恵器断面 ■■■■■

(五十音順) 正雄（佐久考古学会員）、成沢富子、花岡美津子、堀籠ミサト、
桥谷みゆき、森角せきよ、森川宗治（佐久考古学会員）

地形・地質・石質指導 白倉盛男（佐久考古学会副会長）

- 7 本書の編集は翠川、篠原が行い、執筆は翠川が行った。なお、遺跡の立地と環境については昭和62年度刊行の第1次発掘調査報告書において詳述されているため、本書では省略した。
- 8 梨の木II遺跡のすべての資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において株式会社千曲通商を始め地元の方々には、発掘調査中、数々のご協力およびご援助をいただきました。心より感謝申し上げます。

凡　例

- 1 遺構の記述については、検出位置⇒検出層序⇒重複関係⇒平面形態⇒覆土⇒付属施設⇒遺物の出土状態⇒その他の観察事項の順序で記載することを基本とした。
- 2 遺構の略称
　竪穴状遺構⇒T_n、土坑⇒D、溝状遺構⇒M、柱穴址⇒P
- 3 遺構の番号
　第1次調査からの継続番号を用い、T_n 2号～、D10号～、P 2号～とした。
- 4 水糸レベルについては各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度上及び、水糸レベル横に明記した。
- 5 縮尺
　竪穴状遺構⇒1/60、土坑⇒1/60、溝状遺構⇒1/160、柱穴址⇒1/60、土器1/3・1/4、石器4/5・1/6、貨幣⇒1/1
- 6 遺構実測図に用いた斜線のスクリーントーンは地山をあらわし、石器実測図に用いた網点のスクリーントーンは炭化物の付着範囲をあらわす。
- 7 石器実測図に用いた矢印は、研磨された範囲をあらわす。

例 言

1 本書は昭和63年度佐久市土地開発公社による宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 調査委託者 佐久市土地開発公社

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地籍及び面積

中原遺跡群梨の木II遺跡 佐久市大字中込3765-1・5、3770-5、3773-1 2,720m²

5 調査期間

昭和63年12月9日～12月26日、12月27日～平成元年3月20日

6 調査団の構成

事務局

佐久埋蔵文化財調査センター

所長 西沢 正巳

庶務係長 崎山 俊彦

庶務係 田中 芳美（昭和63年12月退任）（嘱託職員）

菊池 直美（平成元年2月就任）（臨時職員）

調査主任 高村 博文

調査係 三石 宗一、木内 晶義、須藤 隆司、小山 岳夫、小林 真寿、翠川 泰弘、竹原 学、助川 朋広、
篠原 浩江（嘱託職員）

調査団

団長 黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者 林 幸彦（佐久市教育委員会）

羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者 翠川 泰弘

調査主任 助川 朋広、篠原 浩江

調査員 大井今朝太（佐久考古学会員）

調査補助員 神部 妙子、小林 幸子、和久井義雄（佐久考古学会員）

協力者 井出安生、江原富子、勝俣富美代、金井延、小出ユミ子、高地

挿図目次

第1図 梨の木遺跡の位置	1	第11図 第23~28号土坑実測図	16
第2図 基本屋根模式図	3	第12図 第29~31号土坑実測図	18
第3図 第2次調査発掘区設定図	4	第13図 第29号土坑内出土石器実測図	18
第4図 梨の木遺跡I・II遺構全体図	5	第14図 第3号溝状遺構内出土土器拓影図	20
第5図 第2号豎穴状遺構実測図	8	第15図 第3号溝状遺構実測図	21
第6図 第2号豎穴状遺構出土石器実測図	8	第16図 第5号溝状遺構内出土石器実測図	22
第7図 第3号豎穴状遺構実測図	9	第17図 第4~7号溝状遺構実測図	23
第8図 第10~16号土坑実測図	11	第18図 柱穴式実測図	24
第9図 第17~22号土坑実測図	14	第19図 グリッド内出土石器実測図	25
第10図 第2号土坑内出土石器実測図・古鉄拓影図	15		

付表目次

第1表 梨の木遺跡土坑一覧表	19
----------------	----

図版目次

図版 一 梨の木遺跡航空写真	4 第24号土坑
図版 二 1 梨の木遺跡遠景	5 第26号土坑
2 A地区全景	図版 七 1 第27号土坑
図版 三 1 B地区全景	2 第28号土坑
2 第2号豎穴状遺構	3 第29号土坑
図版 四 1 第3号豎穴状遺構	4 第30号土坑
2 第10号土坑	5 第31号土坑
3 第11号土坑	6 第5号溝状遺構
4 第12号土坑	7 第6号溝状遺構
5 第13号土坑	図版 八 1 第2号豎穴状遺構内出土石器
図版 五 1 第14号土坑	2 第22号土坑内出土石器
2 第15号土坑	3 第22号土坑内出土古鉄
3 第16号土坑	4 第29号土坑内出土土器
4 第18号土坑	5 第3号溝状遺構内出土石器
5 第19号土坑	6 第5号溝状遺構内出土土器
6 第20号土坑	7 グリッド内出土土器
7 第21号土坑裏石出土状態	8 発掘調査スナップ
8 第21号土坑	
図版 六 1 第22号土坑石組み出土状態	
2 第22号土坑	
3 第23号土坑	

722.46mに設置する。

9月13日（火）

第1・2地区の遺構検出・精査作業を行なうが、遺構・遺物の検出はなかった。第1・2地区の全体実測・全体写真を撮影し、現場でのすべての作業を終了する。

9月14日（水）～平成元年3月18日（土）

室内において報告書作成作業を行い全調査を完了する。

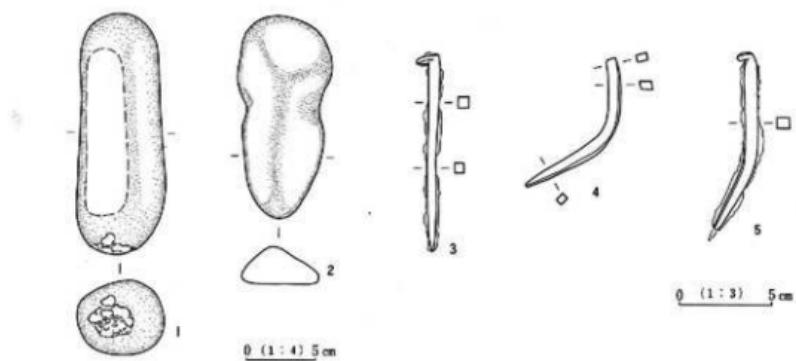
（高村）



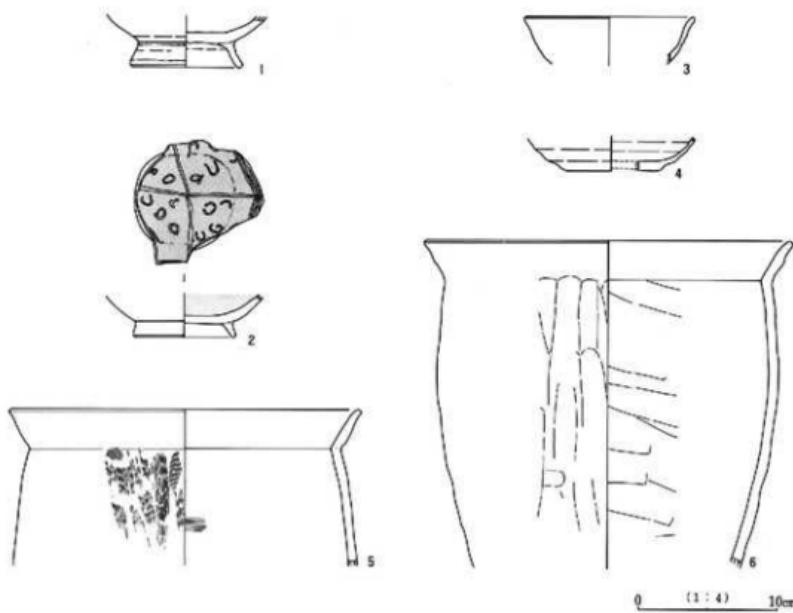
第12図 琵琶坂VI遺跡の位置（1：10,000 佐久市No.1による）

第1表 第3号住居出土土器觀察表

種類	形	大きさ	成形法	手	特徴	測定	備考
土器	杯	11.8 3.5 3.5	底部内面削り出し 底面内側切り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 6/6 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	11.3 5.8 3.2	底部内側削り出し 底面内側切り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-10Y H 7/4 (赤い・黄褐色) 内底スラット付し、底成一定人	
土器	杯	6.0	底部内側削り 底面内側切り	内	クロナダ後部ヘリタキ、黑色底壁	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-5Y R 6/4 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	11.9 5.5 3.5	底面内側削り出し 底面内側切り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-5Y R 6/4 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	5.6	底面内側削り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 6/4 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	5.8	底面内側削り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 6/4 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	12.0 5.5 3.6	底面内側削り 底面内側切り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 6/4 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	6.2	体側内側削り出し 底面内側削り	内	クロナダ底、黑色底壁	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 6/4 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	12.3 6.4 3.6	底面内側大きく円錐に比べる高さ 底面内側切り	内	クロナダ後部底部ヘリタキ、黑色底壁	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 6/3 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	12.0 6.4 3.6	底面内側削り出し 底面内側切り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 7/3 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	13.8	底面内側削り出し	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 7/6 (赤色)、軸輪突起B	
土器	杯	11.9 5.4 3.3	底面内側削り 底面内側切り	内	クロナダ後不定方向にナデ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 5/4 (赤い・黄褐色)	
土器	杯	14.4 — —	底面内側削り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 4/4 (赤い・黄褐色)	
土器	器	8.1	寸付する 底面内側切り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 4/4 (赤い・黄褐色)	
土器	器	— —	底面内側削り 底面内側切り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古び、底成一真好 色調-7.5Y R 4/4 (赤い・黄褐色)	
灰	灰	13.1 6.5 3.1	箱形内側二重形だから厚く壁は高い 底面内側や内肉	内	クロナダ クロナダ後部回転ヘリケズリ 黒けがけ	底上一白色子多く古む。底成一真好 色調-10Y R 4/1 (灰白)の色をもつ 三脚内側底面内側に底面内側に古む。	
土器	小口瓶	13.4 8.0 (13.9)	底面内側大きく出し手平手で裏面を有する。 口縁部は収縮する。外	内	クロナダ クロナダ後部底端カキメ	底上一白色子多く古む。底成一真好 色調-10Y R 4/3 (赤い・黄褐色)	
土器	小口瓶	6.2	底面内側切り	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子多く古む。底成一真好 色調-10Y R 4/4 (赤い・黄褐色)	
土器	小口瓶	17.0	底面内側大きく裏面有り口縁部外反。底部内側 收縮する。	内	クロナダ後部底端カキメ 底端ヘリタキ後部底端カキメ やや乾燥後に体部外に口縁部に古むナデを行 さす。	底上一白色子少々古む。底成一真好 色調-5Y R 6/6 (赤褐色) 破片突出A	
土器	小口瓶	12.0	底部は高く上方に立ち直縁部張り外反	内	クロナダ後部底端カキメ	底上一白色子多く古む。底成一真好 色調-7.5Y R 6/6 (赤色)、完全剥離	
土器	小口瓶	13.4	口縁部大きく内凹する。	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古む。底成一真好 色調-10Y R 3/1 (赤褐色) 破片突出A	
土器	小口瓶	16.8	口縁部のなる内凹する。	内	クロナダ後部底端カキメ 下半部下縁ヘリタキ	底上一白色子少々古む。底成一真好 色調-7.5Y R 6/6 (赤い・黄褐色)	
土器	小口瓶	—	輪状武形	内	クロナダ後部底端カキメ	底上一白色子少々古む。底成一真好 色調-N/6 (赤色)	
土器	小口瓶	—	底部小さく平底となり厚い。	内	ハラナデ ハラナデ	底上一白色子多く古む。底成一真好 色調-10Y R 4/2 (赤黃褐色)	
土器	小口瓶	5.2	底部下平は強く收束し、小さく平底となる。	内	クロナダ クロナダ	底上一白色子少々古む。底成一真好 色調-5Y R 6/6 (赤褐色)	
土器	小口瓶	—	底部のへ上部にかけて最大径をもち。下半 部は細長形をなす。	内	クロナダ上部底端ヘリタキ 下半部ナデ底端カキメ	底上一白色子多く古む。底成一真好 色調-5Y R 5/3 (赤い・黄褐色)	
土器	小口瓶	27.6	—と同様内容を有する。口縁部は出 すし、蓋も片側傾する。	内	ハラナデ口縁部ヨコナダ 内丸やや強張り、口縁にナデ。	底上一白色子多く古む。底成一真好 色調-5Y R 5/4 (赤い・黄褐色)	



第7図 第3号住居址出土石器・鉄器実測図



第8図 第6号住居址出土土器実測図

第2表 第6号住居出土土器観察表

器皿名	形	量	成形法	よび	器形の特徴	測定	備考
8-1 土師器	一	8.0	「八」の字形に開くやや足高の高台付片付 底部回転余切り	内) ロクロナデ 外) ロクロナデ			黒土-白色粒子、砂粒少量含む 焼成-良好 色調-7.5Y R 6/4(浅黄褐色) 完全実測
8-2 土師器	一	7.4	底部回転余切り後高台付片付	内) ロクロナデ後端次に十字、テッキのテイ ヨキ、黑色點斑。 外) ロクロナデ			黒土-白色粒子多く含む 焼成-良好 色調-7.5Y R 6/4(浅黄褐色) 完全実測
8-3 土師器	12.2	—	口縁落ゆるく外反。	内) ロクロナデ 外) ロクロナデ			黒土-白色粒子、石英粒少量含む 焼成-良好 色調-7.5Y R 7/4(浅色) 回転実測B
8-4 土師器	—	6.4	底部回転余切り	内) ロクロナデ 外) ロクロナデ			黒土-白色粒子、石英粒少量含む 焼成-良好 色調-10Y R 7/8(褐色) 回転実測B
8-5 土師器	25.2	—	口縁落ぐの字状に外反する。	内) ハケ日焼口縁部ヨコナデ 外) 縫合ハケ日後口縁部ヨコナデ 内外やや乾燥後に日焼し的にナデを行う			黒土-白色粒子、石英粒少量含む 焼成-良好 色調-7.5Y R 5/6(黄色) 回転実測B
8-6 土師器	26.4	—	口縁部に最大幅があり外側は上位がゆるく 張る。頬部内面には折鉛の織が見られる。	内) 斜削板ナデ後口縁部ヨコナデ 外) 褶立板ナデ後口縁部ヨコナデ 内外やや乾燥後に日焼し的ナデを行なうよう である。			黒土-白色粒子少量含む 焼成-良好 色調-10Y R 4/3(浅黄褐色) 回転実測B

2) 第4号住居址

遺構（第9図、図版四）

本住居址は調査区東端から41m離れた位置に検出された。検出部分では他遺構との重複関係はもたない。プランは推定で1辺約3.6mの隅丸方形を呈するものと思われる。

覆土は3層からなる。2・3層はほぼ同一の土質であり、堆積・広がり共にさして広範囲には及ばない事から、覆土の主体を占める1層により短期間で埋没したものと推測される。

確認面からの壁高は30~40cmを測り、床面からの立ち上がりはやや緩やかで、壁体は第II層をそのまま利用しておりとして堅固ではない。壁溝は検出されなかった。

床面も壁体同様に第II層をそのまま利用しており、所謂「貼り床」・「叩き床」は認められないが叩き締められており、第II層そのものよりは堅固であった。ピットは今回の調査範囲内においては検出されなかった。

カマドは東壁の東南コーナーよりに構築されていたものと思われるが、完全に人為的破壊をうけており、火床と思われる75×55cmの焼土の広がりが認められたにすぎなかった。

遺物は10-4が完形で出土している他は全て破片状態で出土しており、その分布は本址東半に集中し、径15~20cm大の礫を多量に伴っている。

遺物（第10・11図、図版七・八）

土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。それぞれ21点・7点・1点を図化したが、その他の破片も土師器の占める割合が高い。

土師器の器種には壺・高台付壺・甕がある。壺・高台付壺共に黒色処理されるものと、されな

いものがあるが、縦ヘラミガキを施し、黒色処理するものが多く認められる。また、全面に縦ヘラミガキを施さず、暗文状に施すものも3点(10-2・5・10)存在する。ロクロからの切り離しは全て糸切りであり未調整である。尚、墨書が10-16・23・24の3点に認められるが、10-16の「正」を除き他の2点は判読できない。甕には長胴大型の11-5と小型の11-4がある。11-5は所謂「北信型の甕」と呼称されるものであり、奈良・平安時代の東信地方に主体的に認められる所謂「武藏型の甕」とは異なる系譜の甕である。

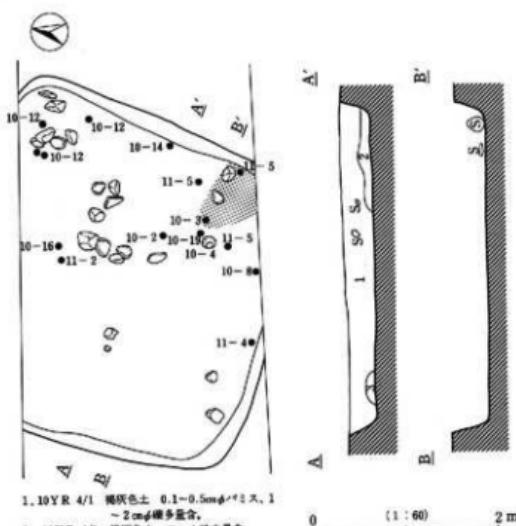
11-4は欠損した口縁部を再生利用した小型甕であり、内面にはロクロナデ、外面頸部下は縦ヘラケズリが施されており所謂「武藏型の甕」の系譜を引くものと思われる。

須恵器の器種には壺・有台壺・鉢・甕がある。壺・有台壺のロクロからの切り離しは糸切りによるものと思われる。鉢も含め、相対的に胎土・調成は粗悪である。甕は張った肩部から頸部が内屈し、頸部から短く広口の口縁部が開くもので、奈良・平安時代を通じて当地方における須恵器甕の主体をなすものである。11-1・2の2点が認められる。

灰釉陶器は10-1を1点のみ同化したが、他に段皿・小瓶ないしは長頸瓶と思われる細片が1点ずつ出土している。段皿は2次火熱をうけており、色調がやや異なるものの、3点共に灰白色の比較的緻密な胎土をもち、淡緑色ガラス質の釉が施されている。産地については不明であるが、施釉は刷毛により行われており光ヶ丘1号窯跡に比定されるものと思われる。

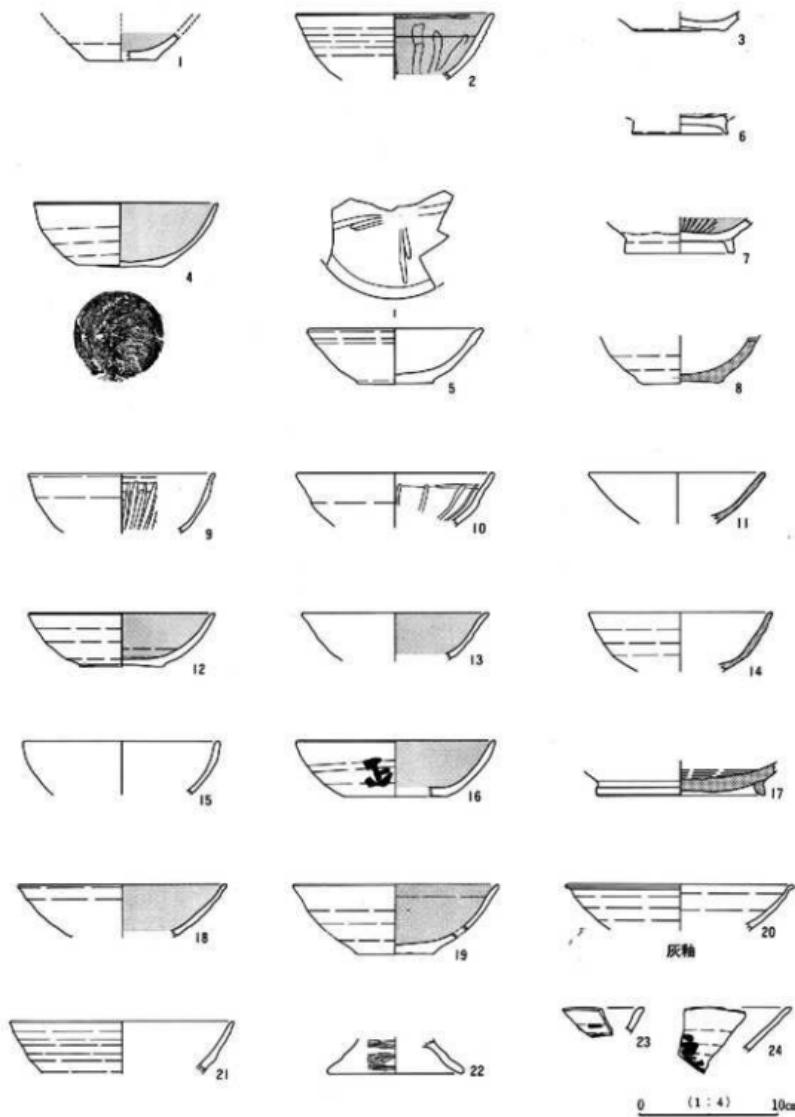
以上の出土遺物から本住居址は、平安時代前葉の所産と考えられる。

(小林)

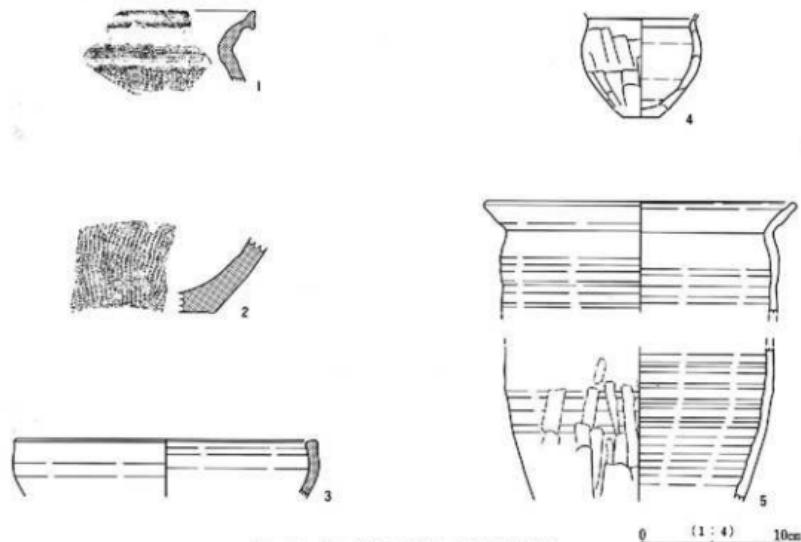


第9図 第4号住居址実測図

宮の上 II



第10図 第4号住居址出土土器実測図(1)



第11図 第4号住居址出土土器実測図(2)

第3表 第4号住居址出土土器観察表

検査番号	器種	重量	変形および器形の特徴	調査量	備考
10-1	土器器 高台付 杯	— 5.2	底部糸切り	内) 線ヘタ: ガキ。黒色底面。 外) ロクロナヂ。	粘土-白色粒子を少量含む。 焼成-良好。 色調-10Y R2/1 (黒色) 破片実測A
10-2	土器器 高台付 杯	17.2 —	口縁-体盤内両灰斑に開き、端部で僅かに外反する。	内) 線文状の縫ヘタ: ガキ。黒色底面。 外) ロクロナヂ。	粘土-露せ-白色粒子を多量含む。 焼成-良好。 色調-5Y R4/4 (にぶい褐色) 破片実測A
10-3	土器器 杯	— 6.8	底部糸切り	内) 線ヘタ: ガキ。 外) ロクロナヂ。	粘土-赤色粒子を少量含む。 焼成-良好。 色調-10Y R5/2 (灰黄褐色) 破片実測A
10-4	土器器 杯	15 4.6	底部糸切り 体盤内両灰斑に開き両端部で僅かに外反する。	内) 線ヘタ: ガキ。黒色底面。 外) ロクロナヂ。	粘土-約2~5mm大の粗石多含。 焼成-良好。 色調-7.5Y R7/6 (褐色)。 安全実測。
10-5	土器器 杯	12.6 5.5 4.0	底部糸切り 体盤内側に内窓し、口縁僅かに外反する。	内) 線文状の縫ヘタ: ガキ (十字)。 外) ロクロナヂ。	粘土-白色粒子を少量含む。 焼成-良好。 色調-7.5Y R4/4 (にぶい褐色)。 回転実測B 内面中央に炭化物付着
10-6	土器器 高台付 杯	— 6.8	底部糸切り。 貼付高台	内) 線ヘタ: ガキ。黒色底面。 外) ロクロナヂ。	粘土-赤色粒子を僅かに含む。 焼成-良好。 色調-10Y R7/4 (にぶい黃褐色)。 回転実測B
10-7	土器器 高台付 杯	— 8	底部糸切り。 貼付高台	内) 線ヘタ: ガキ。黒色底面。 外) ロクロナヂ。高台両部に比較。	粘土-白色粒子を少量含む。 焼成-良好。 色調-7.5Y R6/4 (にぶい褐色)。 回転実測B
10-8	土器器 杯	— 6.2	底部糸切り。 体盤内窓。	内) ロクロナヂ。	粘土-白色粒子を多量含む。 焼成-良好。 色調-5Y R6/1 (灰白色)。 回転実測A
10-9	土器器 杯	13.4 —	体盤内窓。	内) 線ヘタ: ガキ-縫ヘタ: ガキ。 外) ロクロナヂ。	粘土-白色粒子を少量含む。 焼成-良好。 色調-7.5Y R6/4 (にぶい褐色)。 破片実測A

10-10	土器器 环	14.2 —	体部内面気泡に開き、口縁部でやわらぐ屈曲しながら外反し、端部は内凹する。	内) 極文状の板へラミガキ。 外) ロクロナダ。	粘土一白色粒子を少量含む。 焼成一良好 色調一7.5B6/4 (にじい褐色)。 川版実測日。
10-11	陶器 环	12.6 —	体部から底盤気泡に開く。	内) ロクロナダ。 外)	粘土一白色粒子を少含む。 焼成一良好 色調一N2/0 (黒色)。 鏡片実測A。
10-12	土器器 环	13.4 6 2.8	体部から内面気泡に開く。	内) 板へラミガキ。黒色处理。 外) ロクロナダ。	粘土一白色粒子を多含む。 焼成一良好 色調一2.5/4/1 (灰黑色)。 川版実測A。
10-13	土器器 环	13.4 — —	体部から内面気泡に開き、端部で僅かに外反する。	内) 線彫器へラミガキ。黒色处理。 外) ロクロナダ。	粘土一練習不足 焼成一良好 色調一N2/0 (黒色)～10YR5/2 (灰褐色)。 鏡片実測A。
10-14	陶器器 环	13.0 — —	体部平ばで直線的に開く。	内) ロクロナダ。 外)	粘土一白色粒子を僅かに含む。 焼成一尚可 色調一N2/0 (黑色)。 鏡片実測A。
10-15	土器器 环	13.4 — —	体部から内面気泡に開く。	内) 線彫器へラミガキ。 外) ロクロナダ。	粘土一白色粒子を少含む。 焼成一良好 色調一5YR3/4 (淡青褐色)。 鏡片実測A。
10-16	土器器 环	14.2 7.2 4.0	底盤赤切り。 体部から内面気泡に開く。	内) 線へラミガキ。黒色處理。 外) ロクロナダ。「正」の墨記。	粘土一約1～5mmの大粒石を多含す 焼成一中等軟化 色調一7.5YR7/4 (にじい褐色)。 川版実測A。
10-17	陶器器 有台环	— — 12.0	底部赤切り。 筋付高台。	内) ロクロナダ 外) 細密繩目板へラケメリ。ロクロナダ。	粘土一白色粒子を多含む。 焼成一良好 色調一7.5YR8/1 (灰色)。 鏡片実測A。
10-18	土器器 环	15.0 — —	やや内面気泡に開く。	内) 口縁一板へラミガキ。体部一板へラミガキ。 外) ロクロナダ。	粘土一砂粒含む 焼成一良好 色調一7.5YR5/6 (K.にじい褐色)。 鏡片実測A。
10-19	土器器 环	14.8 5.6 5?	体部から内面気泡に開き、口縁部で外反す。 底部赤切り	内) 口縁一板へラミガキ。体部一板へラミガキ。 外) ロクロナダ。	粘土一白色粒子を多含む。 焼成一良好 色調一7.5YR6/4 (にじい褐色)。 鏡片実測A。
10-20	瓦陶 瓶	16.4 — —	口縁部で強く外反。	内) ロクロナダ。刷毛擦り施加。 外)	粘土一黑色粒子を少含む。 焼成一良好 割れ一横裂 色調一5 YR7/1 (灰白色)。鏡片実測A。
10-21	陶器器 环	18 — —	体部から直線的に開く。	内) ロクロナダ。	粘土一黑色粒子を多く含む。 焼成一中等軟化 色調一2.5Y7/3 (浅黄色)。 鏡片実測A。
10-22	土器器 环?	— 9.8	比較的長い脚状の台部をもつ。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。板へラミガキ。	粘土一白色粒子を少含む。 焼成一良好 色調一10YR6/6 (明黄褐色)。 鏡片実測日。
10-23	土器器 环?	— —		内) ロクロナダ。黒色處理。 外) ロクロナダ。字不明悉善。	粘土一白色粒子を多含む。 焼成一良好 色調一7.5YR6/8 (褐色)。 鏡片実測日。
10-24	土器器 环?	— —		内) ロクロナダ。横へラミガキ。 外) ロクロナダ。	粘土一白色粒子を多含む。 焼成一良好 色調一10YR7/4 (にじい黃褐色)。 鏡片実測日。
11-1	陶器器 瓶	— — —	巻き上げ、叩き詰め、ロクロ成型。	内) ロクロナダ。	粘土一白色、黑色粒子を多含む。 焼成一良好 色調一N2/0 (灰色)。 鏡片実測日。
11-2	陶器器 瓶	— — —	巻き上げ、叩き詰め、ロクロ成型。	内) ロクロナダ。	粘土一巻足、白色粒子を多含む。 焼成一良好 色調N1/0 (灰色)。 鏡片実測日。
11-3	陶器器 瓶	21.6 — —	体部から内面気泡に開き、端部でやや巻き内凹する。	内) ロクロナダ。	粘土一白色粒子、雲母を含む。 焼成一良好 色調一5 YR7/1 (灰白色)。 鏡片実測A。
11-4	土器器 小形瓶	7.47 — —	体部から内面気泡に立ち上がり、口縁部でやや強く外反する。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。板へラケメリ。	粘土一白色粒子、雲母を含む。 焼成一良好 色調一10YR6/4 (にじい褐色)。 川版実測日付未記載。川版実測日。 欠損した部分を手作成。
11-5	土器器 長颈瓶	22.4 — —	「く」の字状に強く外反するロ繩捺。 巻き上げ、ロクロ成型。	内) ロクロナダ。 外) 体部上部ロクロナダ。下部へラナダ、ヘラケメリ。	粘土一赤色した粒子を多く含む 焼成一良好 色調一5 YR7/8 (褐色)。 川版実測日。

3) 第5号住居址

遺構（第12図、図版四）

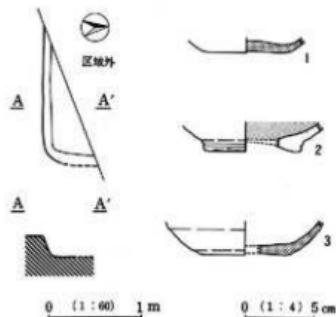
調査区東端から54mの位置に検出され、僅かに東南隅を調査したのみである。隅丸方形のプランになるとと思われるが、規模・長軸方位等は不明である。

覆土は単層で砂質の黒褐色土が堆積する。ゆるく傾斜する壁は壁高20cmを測る。

地山が砂質のためか床面は軟弱である。

遺物（第12図）

土器のみ出土、いずれも小片である。器種は土師器壊・甕・須恵器壊がある。3点が図示できた。



第12図 第5号住居址および出土土器実測図

(竹原)

第4表 第5号住居址出土土器観察表

器 器 名	器 種	注 量	成 形 か よ び 器 形 の 特 徴	器 種	量	備 考
12-1 須恵器 壊	—	6.2 —	底盤み切り。	内) ロクロナガ。 外) ロクロナガ。	—	粘土—白色粒子を少量含む。 焼成—やや軟質。 色調—2.5Y6/2(灰黄色)。 断面剥離B
12-2 土師器 壊	—	6.2 —	底盤み切り。	内) 磨ヘテミガタ。黑色底盤。 外) ロクロナガ。	—	粘土—白色粒子を少量含む。 焼成—良好。色調—5YR5/4 (D) (や や褐色)。 断面剥離A。
12-3 須恵器 壊	—	5.0 —	底盤み切り。	内) ロクロナガ。	—	粘土—白色粒子を少量含む。 焼成—やや軟質。 色調—5 Y6/1 (灰色) 断面剥離A。

4) 第7号住居址

遺構（第13図、図版四）

本住居址は調査区のほぼ中央で検出された。西側に搅乱が入り、北半部分が区域外のため未掲である。住居址の東南コーナー・カマド1/2を含む全体のほぼ1/4を調査したにすぎない。調査範囲内では他遺構との重複関係は認められなかった。プランは隅丸方形を呈するものと推測されるが、規模は不明である。

覆土は $\phi 0.1 \sim 1\text{ cm}$ の礫を多含し、 $\phi 1 \sim 2\text{ cm}$ の炭片を少含する黒褐色土の単層からなる。短期間での埋没が推測される。

確認面からの壁高は30~35cmを測り、床面からの立ち上がりは、ほぼ垂直に近く急である。壁体は第II層をそのまま利用しているが、かなり堅固である。壁溝は検出されなかった。

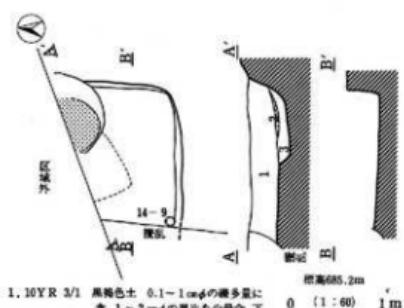
床面はカマド焚口手前には所謂「貼り床」・「叩き床」と呼称される部分（第13図破線範囲）が

認められるが、他は第II層そのものよりは堅固であるものの、第II層をそのまま利用している。ピットは今回の調査範囲内においては検出されなかった。

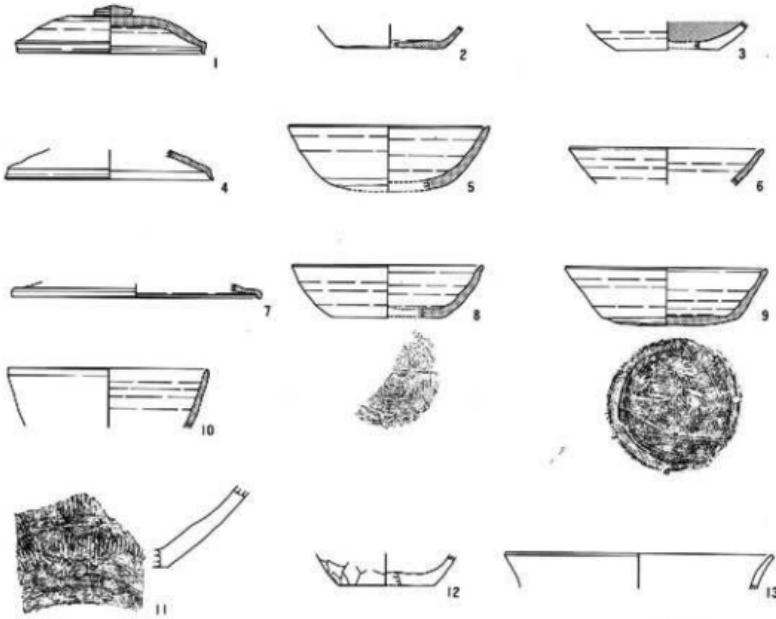
カマドは東壁に構築されていたが、構築材は一切認められず、掘り方と火床の一部と思われる焼土の堆積を確認できたにすぎない。遺物は14-9が床面で出土した他は全て覆土内より出土している。

遺物（第14図、図版八）

土器類・須恵器が出土している。それぞれ3点・10点を図化した。他の図化できえなかった破片を含めても須恵器の占める割合が非常に高い。



第13図 第7号住居址実測図



第14図 第7号住居址出土土器実測図

第5表 第7号住居出土土器観察表

件 固 号	形 態	法 量	成形および器形の特徴	内 容	備 考
14-1	圓底 壺	13.4 3.4	天井部フタット。 口縁部内凹、 つまみ付付。	(内) ロクロナデ。 (外) ロクロナデ。天井部ヘラケズリ。	胎土-白色粒子をやや多く含む。 燒成-真好。 色調-内) 7.5YR 6/1 (緑灰色), 外) 黄褐色A。
14-2	圓底 壺	— 6.0	底部糸切り。	(内) ロクロナデ。火摩。	胎土-白色粒子を多含する。 燒成-真好。 色調-内) 7.5YR 6/1 (緑色), 外) 黄褐色B。
14-3	土器 杯	— 7.4		(内) 瓶へラヘガタ、黒色处理。 (外) ロクロナデ。底部手持もヘラケズリ。	胎土-白色粒子・微帶を含む。 燒成-良好。 色調-内) 黄褐色A。
14-4	圓底 壺	15.0 —		(内) ロクロナデ。 (外) ロクロナデ。天井部ヘラケズリ。	胎土-白色粒子を多含する。 燒成-良好。 色調-内) 7.5YR 6/1 (緑色), 外) 2.5Y 1/2 (黄褐色), 底片黄褐色A。
14-5	須恵器 杯	14.4 8.0 4.77	丸底丸脚。	(内) ロクロナデ。 (外) ロクロナデ。瓦底回転ヘラケズリ。) 大漆	胎土-白色粒子を多含する。 燒成-良好。 色調-7.5Y 6/2 (灰オリーブ色), 底片黄褐色A。
14-6	須恵器 杯	14.0 —	口縁部が直線的に開く。	(内) ロクロナデ。火摩。	胎土-白色粒子を多含する。 燒成-良好。 色調-7.5Y 7/1 (灰白色), 底片黄褐色A。
14-7	須恵器 杯	17.8 —	口縁部はほぼ直角に直角。	(内) ロクロナデ。	胎土-白色粒子を多含する。 燒成-良好。 色調-7.5Y 6/0 (灰), 底片黄褐色A。
14-8	須恵器 杯	13.8 7.6 3.8	口縁部やや内凹。 底部糸切り。	(内) ロクロナデ。火摩。	胎土-白色粒子を多含する。 焼成-良好。 色調-7.5Y 6/1 (灰), 底片黄褐色A。
14-9	須恵器 杯	14.6 8.6 6.1	丸底丸脚の底盤から直線的に開く。	(内) ロクロナデ。 (外) ロクロナデ。底部手持もヘラケズリ。	胎土-白色粒子を多含する。 焼成-良好。 色調-7.5Y 6/2 (灰オリーブ色), 完全焼成。
14-10	須恵器 有柄杯	14.2 —	口縁部直立気味。	(内) ロクロナデ。	胎土-白色粒子を多含する。 焼成-良好。 色調-内) N 4/0 (灰), 外) N 6/0 (灰), 底片黄褐色A。
14-11	須恵器 壺	— —	唇を上げ、叩き締め。ロクロ成形。	(内) ヘラ、脚部ナデ。ロクロナデ。 (外) 底部へ立ち上がりにかけて横へラケズリ。ロ クロナデ。	胎土-# 5-7の大きな石粒、白色粒子 を多含する。 焼成-良好。 色調-5.5Y 6/1 (灰), 底片黄褐色A。
14-12	土器 小豆碗	— 6.6	ロフ	(内) ロクロナデ。 (外) 底へラケズリ。	胎土-二重層。白色粒子を多含する。 焼成-やや軟質。 色調-内) R 6/4 (にぶい黄色色), 外) 黄褐色A。
14-13	土器 小豆碗	19 —	唇を上げ、 所産(?) 字次口縁。	(内) ロクロナデ。 (外) ロクロナデ。	胎土-二重層を多含する。 焼成-7.5Y R 7/4 (にぶい褐色), 底片黄褐色A。

土器の器種には壺・甕がある。壺は内面黑色処理を施され底部は手持ちヘラケズリである。甕は所謂「武藏型の甕」と呼称される長胴大型のものと、ロクロを使用した小型のものがある。須恵器の器種には壺・有台壺・壺蓋・甕がある。壺のロクロからの切り離しには14-5・9のようなヘラによるものと、14-2・8のような糸によるものとが共存している。また、14-8・7には底部に所謂「ヘラ記号」が認められる。壺蓋の天井部はヘラケズリが施されており、フラットな面をもつ。つまみ部は14-1を見る限りにおいては扁平である。甕は底部片であるため、器形は知りえない。

以上の出土遺物から本住居址は奈良時代末から平安時代初頭の所産と考えられる。 (小林)

第3節 土坑およびピット

1) 第2・3号土坑

遺構（第15図）

調査区東端より15mに位置する。II層中で検出し、第3号土坑東部を第2号土坑が切っている。

第2号土坑は楕円形プランと思われるが、全貌は不明で、短軸長90cmを測る。緩く凹む床面より斜めに壁が立ち上り、残存高14cmを計測する。

第3号土坑も楕円形を呈し、東西に長軸をもつ。壁・床は不安定で凹凸が激しく、壁高6.5~12cmを測る。東壁下床面は一段高くなっている。

遺物は両土坑共覆土内から土器片が出土した。

遺物（第17図）

器種は土師器壺・甕が見られる。17-1は第2

号土坑出土で、内面黒色処理されるがヘラミガキは行われない。17-2は第3号土坑より出土、甕は図示し得ないが「武藏型」である。いずれも平安時代に帰属しよう。

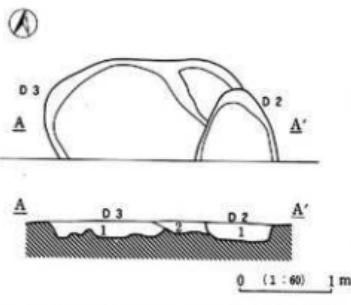
(竹原)

2) 第4号土坑

遺構（第16図、図版四・五）

調査区の西端から5.3mの位置で検出された。第II層上面から掘り込んでいる。今回の調査範囲内での他の遺構との重複関係は認められなかった。ほぼ円形の平面プランを呈するものと思われるが、北半部分は区域外のため未調査である。今回の調査で検出された他の遺構が、調査区のほぼ東半に集中する傾向が認められるのに対して、本址は昭和62年度分の調査におけるB地区に近接した位置を占める。覆土は4種類9分層から成り、人為的な埋設の可能性も推測される。また掘り込みは第III層にまで達しており、断面形状は2段落ちであるものの、比較的不整形である。壁体は下方に行くほど堅固になるが、第II層部分は脆弱である。

検出部分での最大径は約3.5mを測り、検出面からの深さは最深部で1.18m、上面では48~60cmである。遺物は壁面に貼りついた状態で出土するものが多く認められたが、量自体は少量である。



D2 1, 10 Y.R. 3/3 暗褐色土 ローム粒、 $\phi 0.5\text{cm}$ 前後の小礫を
少々、 0.2cm のバクスを極少含む。稍粘性。
D3 1, 10 Y.R. 3/3 暗褐色土 ローム粒 (D2よりは少々)、
 0.5cm 以下の礫を少量含む。
2, 10 Y.R. 4/3 暗褐色土 ローム粒、 $\phi 0.5\text{cm}$ 以下の大礫を少
量含む。(1よりはやや多い) 1に比べて
細まっている。

第15図 第2・3号土坑実測図

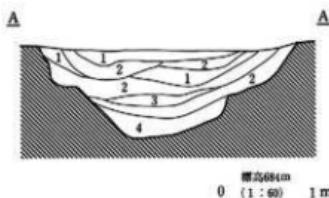
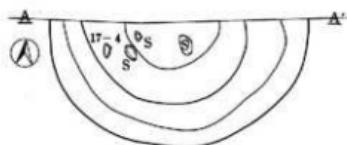
遺物（第17図）

土師器・須恵器が出土している。それぞれ1点・2点を図化した。

17-3は甲斐型壺と呼称されるもので、佐久市内では池畠遺跡第1号土坑出土のものが1点あり、本例は2例目である。17-4・5は須恵器の壺である。2点共に破片であり全器形を知りえるものではないが、張った肩部から内屈して頸部にいたり、頸部から広口で短い口縁部が開くプロポーションを呈するものと推測される。当地方においては奈良・平安時代を通じて、須恵器壺の主体をなすものである。

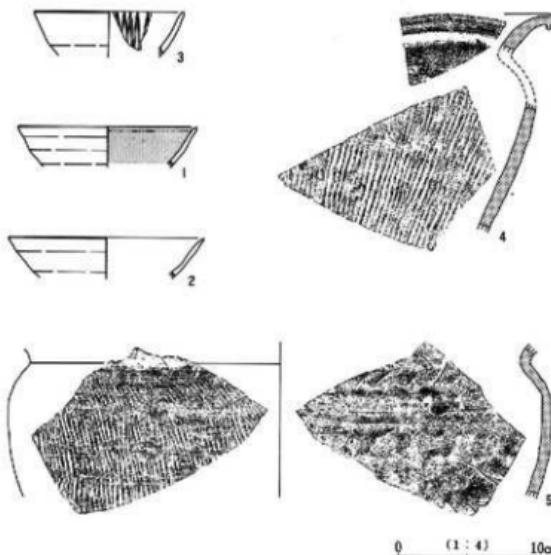
以上の出土遺物から本址の年代を決定する事は困難であるため、大まかに平安時代の所産としておきたい。

(小林)



1. 10YR 4/3 に近い黄褐色 $\phi 0.5\text{--}0.1\text{m}$ 大の砾石を多く含む。砂質灰壤。
2. 10YR 3/1 黒褐色 $0.5\text{--}0.1\text{m}$ 大の砾石・ $\phi 0.1\text{m}$ 大の 1mm 粒子 (10YR 8/4) を少量含む。水分を多く含む。
3. 10YR 3/1 黒褐色 砂粒 (10YR 6/3) を多く含む。
4. 10YR 6/3 に近い黄褐色 砂質。

第16図 第4号土坑実測図



第17図 土坑出土土器実測図

第6表 土坑出土土器観察表

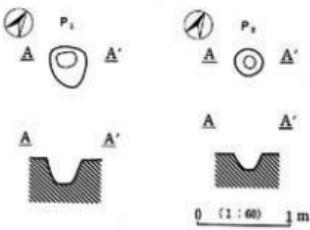
井 国 番 号	器 形	底 像	底形および器形の特徴	測 定	備 考
17-1	土瓶器 杯	—	体部から弱く内側しながら開く。	内) ロクロナヂ、黑色粘土。 外) ロクロナヂ。	地土一白色粒子を多く含む。 焼成一無色無質。 色調—2.5Y R 6/6 (褐色)。 破片実測A。
17-2	圓底器 杯	14° —	体部から直線的に開き、腹部が鋸角。	内) ロクロナヂ。 外) ロクロナヂ。	地土一赤色・白色の粒子を多含する。 焼成一無色無質。 色調—2.5Y R 6/2 (灰白色)。 破片実測A。
17-3	土瓶器 杯	10.8° —	体部から弱く内側ながら開く。	内) ロクロナヂ、断面状横文。 外) ロクロナヂ。	地土一白色粒子を少量含む。 焼成一無色。 色調—2.5Y R 5/4 (灰褐色)。 破片実測A。
17-4	圓底器 甕	— —	肩が張り、額部で強く「く」の字状に外反する。 巻き上げ、印を詰め、ロクロ成形。	内) ロクロナヂ。 外) ロクロナヂ。	地土一白色粒子を多含する。 焼成一無色。 色調—2.5R 4/2 (灰褐色)。 断面実測A。
17-5	圓底器 甕	— —	巻き上げ、印を詰め、ロクロ成形。	内) ロクロナヂ。 外) ロクロナヂ。	地土一褐色・白色粒子を多含する。 焼成一無色。 色調—2.5Y R 6/1 (褐色)。 破片実測A。

3) 第1・2号ピット

遺構 (第18図)

第1号ピットは調査区東端より約20m西で検出された。45×40cmの橿円形のプランを呈し、検出面より25cmの深さを測る。出土遺物は皆無であり、時期・性格共に不明である。

第2号ピットは第5号住居址東南コーナー一壁40cmの位置で検出された。径30cmの正方形を呈し、検出面より18cmの深さを測る。時期・性格は不明である。(小林)



第18図 第1・2号ピット実測図

第4節 溝状遺構

1) 第4号溝状遺構

遺構 (第19図、図版五)

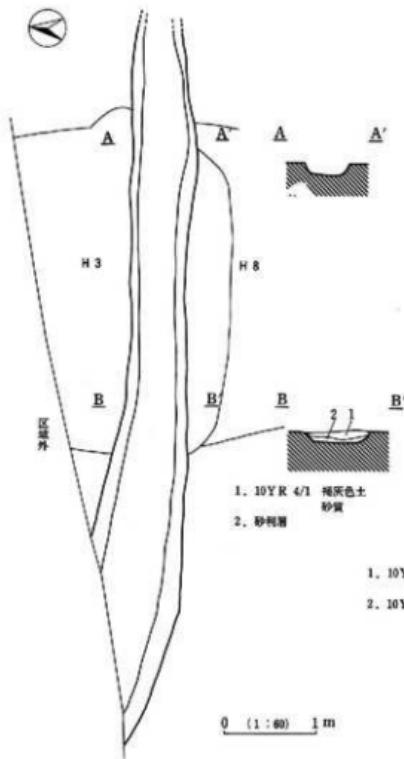
本址は調査区東端より35mの位置にあり、ほぼ東西に走る溝である。

他遺構との重複関係は、第3・6号住居址を本址が切っているが、床面までは達しない。

検出長7.7m、幅48~98cm、深さ8~14.5cmを測り、東から西へ幅を広げながらレベルを減じている。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。

覆土は2層で、下層に砂利が存在することから流れのあったものと考えられる。

遺物は各層より小破片が出土しているが、第3号住居址に帰属するであろうものも多く含まれ



第19図 第4号溝状遺構実測図

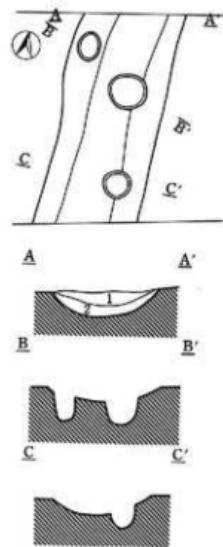
ていると考えられる。

遺物（第23図）

土師器・須恵器・灰釉陶器があり、そのほとんどは平安時代のものと考えられる。

土師器の器種は甕・壺・壇が挙げられる。甕は「武藏型」・「北信型」両者見られるが図示出来ない。壺23-1・2は内面ヘラミガキを行わず、黒色処理される4~6には見られる。5は十字形、ラセン状に施し、7は底部手持ちヘラケズリを行う古い様相のものである。灰釉陶器は碗ないし皿の底部で、回転ヘラケズリの後断面三角形の高台を貼付する。釉は刷毛塗りと思われ、光ヶ丘1号窯式期に属する可能性がある。須恵器は突帯付四耳壺、甕の破片を図示し得た。

(竹原)



第20図 第5号溝状遺構実測図

2) 第5号溝状遺構

遺構 (第20図、図版五)

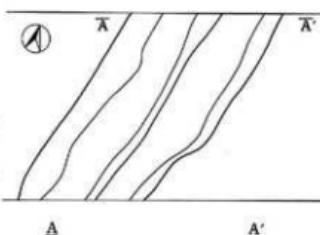
調査区東端より66mの位置にあり、ほぼ南北に走る。検出長2.3m、幅60cm前後、深さ16~26cmを測る。断面形は弧をなし、底面レベルはほぼ水平である。覆土は上下2層からなり、砂礫の堆積はみられない。

本址に付属する施設としてピットが3基検出された。平面形態は円ないし梢円形で、直径31~41cm、検出面からの深さ36~41cmを測る。

遺物 (第23図)

2点を図示した。いずれも平安時代のものと思われる。

(竹原)



1. 10 YR 3/2 黒褐色土 砂質、ローム粒、
バニス少量含。

2. 10 YR 3/2 黒褐色土 砂質、ローム粒
中量、バニス少量含。

0 (1:60) 1m

第21図 第6号溝状遺構実測図

3) 第6号溝状遺構

遺構 (第21図、図版五)

本址は調査区の東端より105mの位置で検出された。ほぼ南北方向に走る。幅は1.24~1.44m、深さ30~34cmを測る。覆土は近似する砂質の黒褐色土層2層からなる。

遺物 (第23図)

土師器が2点出土している。2点共に壊と思われるが、23-12については断言はしかねる。23-11には墨書きが認められるものの判読はできない。以上の出土遺物から本址の年代を決定する事は無謀であるが、一応平安時代以降の所産としておく。(小林)

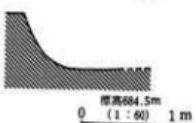
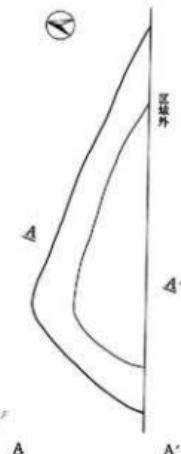
3) 第7号溝状遺構

遺構 (第22図)

第5号溝状遺構の西10mの地点で検出された。東西に走る溝の末端付近と考えられるが、平面規模は不明である。

検出長3.8m、深さ56cmを測り、すり鉢状に深く落ち込む。

覆土は黒褐色の砂質土が堆積しており、上~中層にかけて礫・遺物が散在する状況であった。



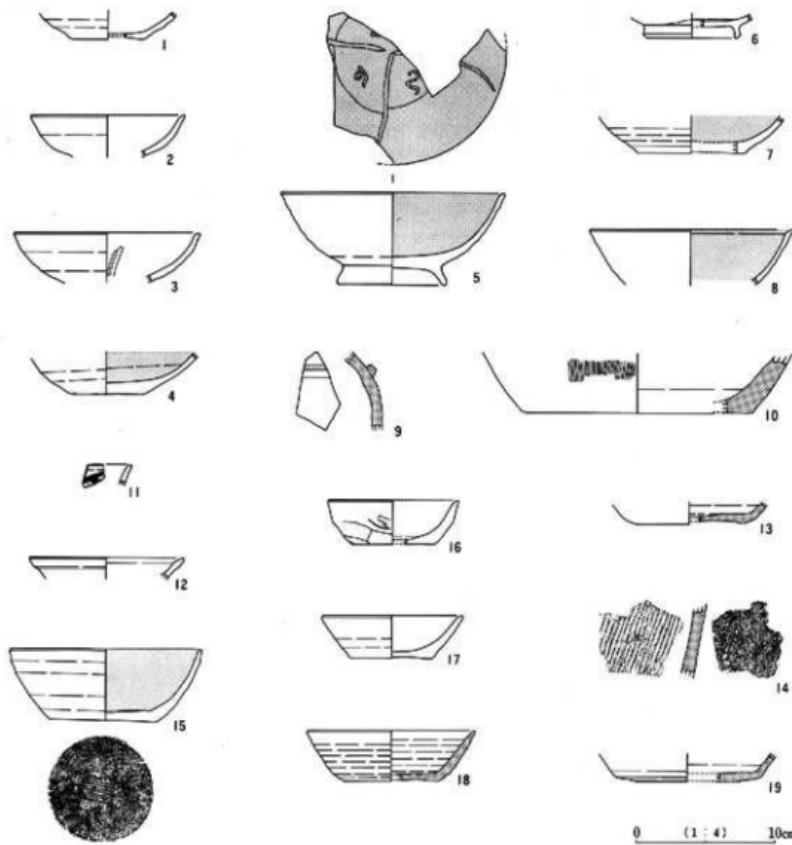
第22図 第7号溝状遺構実測図

遺物（第23図、図版八）

土師器・須恵器の坏類が出土している。23-15は内面に入念な横ヘラミガキがなされ、底部は径大きく静止糸切り？の後外周をヘラケズリする。23-16・17は小径の坏で内外ロクロ成形される。16は底部および体部下半を手持ちヘラケズリする。23-18は底部回転糸切りがなされるが径は大きい。19は二次底部面を有し、ヘラ切りがなされるようである。

これらの土器の所属時期はおおよそ奈良時代前半（19）、奈良時代末～平安時代初頭（15・18）、平安時代後葉（17）と捉えられよう。

(竹原)



第23図 溝状造構出土土器実測図

第7表 溝状遺構出土土器観察表

遺構名	器種	法量	皮形および器形の特徴	調査者	備考
23-1	土器器 环	5.6 —	底部凹板み切り。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。	粘土・白色・赤色粒少量含む。 焼成・良好。 色調—5Y R7/6 (褐色)。 破片実測B。
23-2	土器器 环	11.0 —	体部外方にふくらむ。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。	粘土・白色・白色・黑色粒少量含む。 焼成・良好。 色調—7.5Y R6/6 (褐色)。 破片実測B。
23-3	土器器 环	13.4 —	体部内寄して開き、口縁端部はやや外反す。	内) ロクロナダ後、横文状にヘラミガキ。 外) ロクロナダ。	粘土・砂粒少量含む。 焼成・良好。 色調—5Y R6/6 (褐色)。 破片実測A。
23-4	土器器 环	— 5.0	底部凹板み切り。	内) ロクロナダ後、横ヘラミガキ。黑色粘土。 外) ロクロナダ。	粘土・白色・粒子多量に含む。 焼成・平均。 色調—2.5Y R5/6 (明赤褐色)。 完全実測。 外面にタール状の黒色付着物。
23-5	土器器 环	16.0 7.8 6.6	底部凹板み切り後、高台付付。	内) ロクロナダ後、見込み部を盛り高めヘラミガキし、十字・サテン状にヘラミガキ。黑色粘土。 外) ロクロナダ。	粘土・砂粒少量含む。 焼成・良好。 色調—7.5Y R8/4 (灰黃褐色)。 回転実測B。
23-6	灰 釉 陶 盆?	— 7.0 —	粘付高台は断面三角形を呈する。	内) ロクロナダ後。 外) ロクロナダ後、下半へ底部凹板へタケヅリ。 内外底部、見込み部等を施釉、施毛刷り。	粘土・白、 焼成・良好。 色調—7.5Y T7/1 (灰白色)。 回転実測A。
23-7	土器器 环	— 7.8		内) ロクロナダ後、横ヘラミガキ。黑色粘土。 外) ロクロナダ、底部手付ヘタケヅリ。	粘土・白色・白色粒子少量含む。 焼成・良好。 色調—5Y R5/4 (にじい褐色)。 破片実測A。
23-8	土器器 环	14.6 —		内) ロクロナダ後、横ヘラミガキ。黑色粘土。 外) ロクロナダ。	粘土・白色・赤色粒子少量含む。 焼成・良好。 色調—7.5Y R7/4 (にじい褐色)。 破片実測A。
23-9	須磨器 西耳杯	— —	断面四角形の尖帯付。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。	粘土・白色粒子少量含む。 焼成・良好。 色調—5Y S3/1 (暗青灰色)。 破片実測B。
23-10	須磨器 东耳杯	— 18.6		内) ロクロナダ。 外) 平行引き後、底部下端ロクロナダ。	粘土・白色粒子少量含む。 焼成・良好。 色調—10R 4/2 (灰赤色)。 破片実測A。
23-11	土器器 环	— —		内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ、墨染。	粘土・白色・白色粒子少量含む。 焼成・良好。 色調—7.5Y R6/4 (にじい褐色)。 微片実測A。
23-12	土器器 环?	11.0 —	口縁部肥厚し、腹部は尖る。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。	粘土・白色粒子多く含む。 焼成・良好。 色調—10Y R7/6 (褐色)。 破片実測A。
23-13	須磨器 杯	— 7.4	底部凹板み切り。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。	粘土・白色・白色粒子多く含む。 焼成・良好。 色調—5Y R6/1 (灰褐色)。 回転実測B。
23-14	須磨器 杯	— —		内) ハケ目 外) 平行引き	粘土・白色粒子多く含む。 焼成・良好。 色調—5B G4/1 (暗青灰色)。 (断面実測)
23-15	土器器 环	13.9 7.7 5.2	口縁に比べ底盤大きい。 底盤静止み切り?	内) ロクロナダ後、横に張ヘラミガキ。黑色粘土。 外) ロクロナダ、底盤外周手持ちヘタケヅリ。	粘土・白色粒子多く含む。 焼成・良好。 色調—5Y R6/6 (褐色)。 完全実測。
23-16	土器器 环	8.4 5.8 3.2	体部幅×内円外輪に立ち上がる。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ後、体部下半へ底部手付ヘタケヅリ。	粘土・白色粒子多く含む。 焼成・良好。 色調—10Y R7/4 (にじい黄褐色)。 回転実測A。
23-17	土器器 环	10.2 6.7 3.1	口縁部～体部直縁的に高く。 底部凹板み切り。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。	粘土・白色粒子、砂粒多く含む。 焼成・良好。 色調—7.5Y R7/0 (褐色)。 口縁部内面にスズカ層。 回転実測A。
23-18	須磨器 杯	12.0 5.8 3.6	底盤は口縁に比べて大きく、体部は直縁的 に立ち上がる。 底部凹板み切り。	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ。	粘土・白色粒子多く含む。 焼成・良好。 色調—7.5Y R6/1 (灰褐色)。 回転実測B。
23-19	須磨器 杯	— 7.2	二重底盤面を有する。 底部凹板み切り?	内) ロクロナダ。 外) ロクロナダ、底部ナダ。	粘土・白色粒子多く含む。 焼成・良好。 色調—5Y R7/2 (灰白色)。 破片実測A。

第IV章 調査のまとめ

昭和62年度の第1次調査に続き実施された今回の調査は、幅2m×全長188mという細長いトレンチ調査であったにもかかわらず、いくつかの新知見を与えてくれた。しかし、2次にわたる調査の総面積526m²は宮の上遺跡の集落そのものを論ずるにはあまりにも小範囲であるため、ここでは第4号土坑と所謂「北信型の裏」の2点を中心に若干の考察を行いたい。

第1節 第4号土坑について

第4号土坑は本文中で述べたように、佐久市内では出土例が他に1例あるのみである所謂「甲斐型壺」を出土している。本例以外の唯一の出土例である「池畠」遺跡でも、所謂「甲斐型壺」の出土構造は土坑であり、平・断面形状、規模等が非常に酷似している。

まず、2例共に平面は円形、断面は摺鉢状を呈する2段落ちの形狀をとる。規模的には直径の最大値部分で3.5m前後、検出面からの深度は最深部で1.18m~1.3mを測る。覆土は人為的な埋め戻しが推察される。遺物の出土位置は底面ではなく、2段落ちの1段目から2段目への境付近から出土しており、土器は破壊をうけ数個の礫を伴う。出土遺物は須恵器甕・所謂「甲斐型壺」が共通する。尚、「池畠」遺跡で確認されている牛・馬の骨については、「宮の上」遺跡では確認されていないが、完掘されていない事や腐食しやすいという性格を考え合わせると、今回の調査では確認できなかったものの、伴わないとは即断できない。

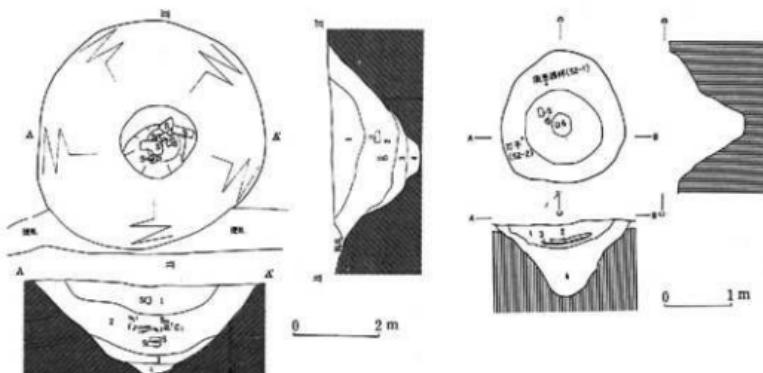
さて、上記のような様相を呈する土坑の性格はいかなるものであるのか考えてみたい。「池畠」遺跡の報文では、8世紀末~9世紀代にかけて「類聚三才格卷第十九」—禁制事、野事に見られる應禁屠殺馬牛事・應禁制殺牛用漢神事の禁制發布から、中国に源をもつ牛馬を使った兩乞等の呪術的な農耕の祭りを推測しており、所謂「甲斐型壺」の出土から、その伝播経路を甲州方面に求めている。その性格については現時点では類例が少なすぎるため今後の資料増加を待ちたいと思うが、ひとつの見解として傾聽すべきものであろう。また、伝播経路については2例共に所謂「甲斐型壺」を伴い、時代的にも大差がないことから甲州方面との関わりを想定する根拠がひとつ積み重ねられたものと思われる。

以上、所謂「甲斐型壺」を伴う同形態・同様相・同時代の土坑である2例について若干の推測を述べたが、最後に佐久市及びその周辺地域での類例についてふれておきたい。

形態的に類似する例としては、小諸市「宮ノ反」遺跡⁽²⁾・東部町「塚穴」遺跡⁽³⁾・佐久市「上聖端」遺跡⁽⁴⁾の3例が認められる。しかし、「宮ノ反」例が奈良時代末～平安時代初頭に位置付けられる他は、「塚穴」は7世紀代、「上聖端」は報告書未刊のため現時点では明確な時期比定は困難であるものの、出土土器を実見した限りにおいては、「宮の上」・「池畠」例よりは古い時期に位置付けられるものと思われる。また、3例ともに所謂「甲斐型壺」は出土しておらず、牛馬の骨が確認されたものはない。「宮ノ反」では底部ヘラ切りの須恵器壺と刀子が各1点、「塚穴」では須恵器大甕・平瓶・土師器小型壺が各1点出土している。「上聖端」は前記のように、現在整理作業中であり報告書は未刊であるため詳細は不明であるが、内側に青海波文が認められる須恵器大甕等が出土している。遺物の出土状態は3例全てが、底面からではなく覆土中に数個の礫を伴って検出される。

これらの事から考えると、所謂「甲斐型壺」や牛馬の骨の存在をぬきにすれば、以上の3例も「宮の上」・「池畠」例とさしたる相異は認められないよう思われる。少なくとも、その形態・遺物の出土状態は同様であることから、これら5例の土坑は非常に近似した内容を有する遺構として捉えられるものと推測される。そして、その存続時期については現時点では7世紀代～9世紀代を比定しうる事を記すにとどめ、その性格については今後の資料増加を待ち旨及していきたい。

- (1)一羽毛田伸博 1986 池畠・西御堂 第IV章 第2節 1)第1号土坑 佐久埋蔵文化財調査センター
- (2)一花岡弘 1985 宮ノ反 IV 4 第6号土壙 小諸市教育委員会
- (3)一東部町教育委員会 1987 塚穴・片羽・上屋久保遺跡
- (4)一1988年佐久埋蔵文化財調査センターが調査を実施。現在整理中。



第24図 池畠遺跡第1号土坑、宮ノ反遺跡第6号土壙実測図

第2節 所謂「北信型の甕」について

所謂「北信型の甕」とは、笠沢氏⁽¹⁾によれば越後からの影響を受けて成立した丸底で砲弾形の土師器大型甕の呼称であり、同様な成形・調整が施される口縁端部の内屈するものは、「まさに越後型の甕そのものであり」と述べ北信型と越後型とは区別している。また、その出現時期は平安時代Ⅰ期⁽²⁾とされている。一方、長野市教育委員会「三輪遺跡（2）」によれば、前記した笠沢氏の越後型を「北陸から北信に通用のロクロ甕の初源をなし」として、外面下半をヘラケズリ・内面をカキメ・ハケメにより再調整する、須恵器的な口縁形態を呈する甕としている。また、笠沢氏の北信型については「須恵器的な形態の模倣は、次第に退化し、受口状の口縁形態へと移行する」・「土師器甕は、口縁部を受口状とした典型的なロクロ甕が成立し」として、ロクロ甕と呼称している。そして、その出現時期についてはロクロ甕の初源をなすもの（笠沢氏の越後型）が奈良時代の後半にさかのぼる可能性があるものの9世紀の前半。ロクロ甕（笠沢氏の北信型）は9世紀後半としている。

以上の事から所謂「北信型の甕」・「ロクロ甕」とは、8世紀後半から9世紀前半に越後・北陸方面からの影響ないしは同調の基に成立した、須恵器的な口縁形態（口縁端部の内屈）を有し、外面下半にヘラケズリ、上半にロクロ調整痕。内面にカキメ・ハケメによる再調整を施した甕を初源とする、丸底・砲弾形で受口状の口縁部形態を呈する甕で、外面下半にヘラケズリ、上半にロクロ調整痕、内面にカキメ・ハケメによる再調整が施される。そして、その成立は9世紀代に求められる事となる。

さて、東信地方では7世紀後半頃から土師器長胴甕の器壁をヘラケズリにより次第に薄くする傾向が出はじめ、ヘラケズリの方向も縦位から斜位に変化をし、奈良時代には所謂「武藏型の甕」が成立し、平安時代に継続される。しかし、光ヶ丘1号窯式期の灰釉陶器が搬入されはじめると前段階になると、所謂「北信型の甕」が東信地方に出現するようになり次第に数を増加させ、大原2号窯式期の灰釉陶器が搬入される段階で、所謂「武藏型の甕」は姿を消し、所謂「北信型の甕」が東信地方の土師器大形甕の主体へと変化する。佐久市の既出資料をもとにその具体例をあげると、9世紀前半に比定される「宿上屋敷」遺跡第2号住居址出土資料にまず所謂「北信型の甕」の影響が認められる。具体的には、胴部のヘラケズリ調整が縦位となり、ロクロ調整が肩部上方にまで範囲を拡大する。底部は欠損しているものの、丸底気味に収縮する傾向を見出せる。このような点は所謂「武藏型の甕」には認められない特徴であり、形態的には所謂「武藏型の甕」に近似する部分も多いものの、明らかに所謂「北信型の甕」の影響を看取する事ができる。

る。所謂「武藏型の甕」も共伴している。次の段階としては「宮の上」遺跡第1次調査第1号住居址出土資料があげられる。丸底・砲弾形のプロポーション、受口気味の口縁形態は所謂「北信型の甕」と同様であるが、胴下半に施されるヘラケズリは北信地方のものに比べより底部に集中している。つまり、ヘラケズリ調整の範囲が狭くなっている。内面にはハケメ調整が比較的ランダムに施される。光ヶ丘1号窯式期の灰釉碗が共伴しているが、所謂「武藏型の甕」は認められない。「蛇塚B」遺跡第2次調査例もほぼ同時期と考えてよいかと思われるが、佐久市内に限ってみても、地域あるいは住居址単位での差異が存在するようである。つまり、所謂「北信型の甕」と所謂「武藏型の甕」の遺構内における存否や比率の差が、伴出する灰釉陶器の窯式でいうならば、光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式期のある時期までは認められるようである。大原2号窯式期の製品を伴出する良好な資料の不足もあり、今後の資料蓄積をまつしかないのであるが、小諸市^⑦の状況から推測すれば所謂「武藏型の甕」は消滅し、所謂「北信型の甕」が主体となる時期をはさんで、今回の「宮の上」遺跡第2次調査第3・6号住居址出土資料のような、ナデ調整の甕えと所謂「北信型の甕」は順次変容するものと思われる。この後、虎渓山1号窯式期・丸石1号窯式期へと時期が下るにつれて、所謂「北信型の甕」の系譜上にあるナデ調整の甕は粗雑化しながら消滅し、かわって羽釜が増加する事は周知であろう。

所謂「北信型の甕」とはどのような甕を指して呼称しているのか、このような甕が佐久市内の遺跡ではどのような展開、変化をするのかを非常に断片的ではあるものの述べ、かつ今回の「宮の上」遺跡第2次調査において検出された資料の位置付けも含めて記述を行った。ここでは、「宮の上」遺跡第2次調査第3・6号住居址出土資料について若干の補足を行う。

1. プロポーションについて⇒6-5に認められる口縁形態は「く」字状にゆるく外反しているが外面のラインはふくらみ気味であり、受口状口縁の名残りが認められる。同時期（大原2号窯式期の製品を伴出する時期）の県内他地域の土師器大型甕のなかでは、所謂「北信型の甕」により近い砲弾状のプロポーションを呈する（底部はフラットである）。

2. 調整について⇒6-4にはハケメが認められる。また、ハケメは認められなくとも基本的には外面は縦位・内面は横位ないしは斜位であり、所謂「北信型の甕」と同様である。

以上の2点を考慮するならば、本例は所謂「北信型の甕」に強い親縁性が認められる事がおわかりいただけると思う。

最後に今回の調査で検出された住居址の暦年代についてふれておきたい。年代比定の根拠としては、堀隆の佐久地方における奈良時代を中心とした土器編年^⑧・十二遺跡における奈良・平安時代土器編年^⑨、高村博文の佐久地方の平安時代土器編年試論を基軸に、灰釉陶器の年代観を参考にした。

第3・6号住居址-10世紀後半。第4号住居址-10世紀前半。第5号住居址-不明。第7号住

居址－8世紀末～9世紀初頭に比定される。

(小林)

(1)－笹沢浩 1988 長野県史考古資料編 造構・遺物 古代の土器 長野県史刊行会

(2)－(1)文献の奈良・平安時代土器編年による

(3)－青木和明・中殿章子 1987 三輪遺跡(2) IV調査のまとめ 長野市教育委員会

(4)－(3)文献及び佐藤信之 1987 北信地方における様相 長野県考古学会誌55・56

(5)－佐久埋蔵文化財調査センター 1987 宿上屋敷、下川原・光明寺

(6)－ 同 上 1988 宮の上

(7)－小諸市教育委員会 1983 曾根城等による

(8)－堤 隆 1987 佐久地方における様相 長野県考古学会誌55・56

(9)－堤 隆 1988 十二遺跡 御代田町教育委員会

(10)－高村博文 1988 薩沢・萬石 佐久地方の平安時代土器編年試論

(11)－斎藤孝正 1987 施釉陶器年代論 論争・学説日本の考古学 6 歴史時代 雄山閣

図版
一 宮の上Ⅱ遺跡



宮の上Ⅱ遺跡近航空写真（東洋航空事業株式会社撮影 C15-7）

図版 二 宮の上遺跡遺跡



1 宮の上遺跡遺景（南より）

2 表土除去作業（第5号住居址付近、東より）



図版 三 宮の上Ⅱ遺跡



1 第3号住居址（西より）



2 第3号住居址カマド遺物出土状況

3 第3号住居址カマド（北より）



4 第4号住居址（北より）

図版 四 宮の上Ⅰ遺跡



1 第5号住居址（東より）



2 第7号住居址（西より）



3 第4号土坑（南より）

図版
五 宮の上＝遺跡



1 第4号土坑セクション（南より）

2 第4号溝状遺構（西より）

3 第5号溝状遺構（北より）



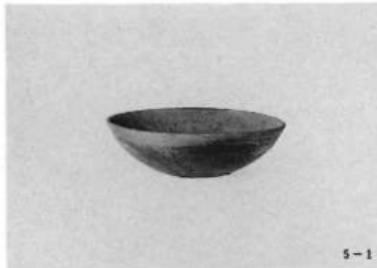
4 第6号溝状遺構（東より）



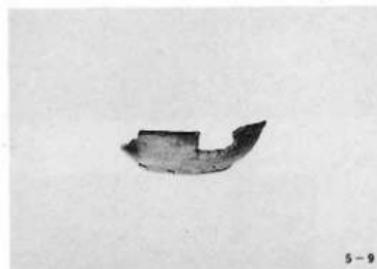
図版
六
宮の上Ⅱ遺跡



1 第3号住居址出土土器



2 第3号住居址出土土器



3 第3号住居址出土土器



4 第3号住居址出土土器



5 第3号住居址出土土器



6 第3号住居址出土土器

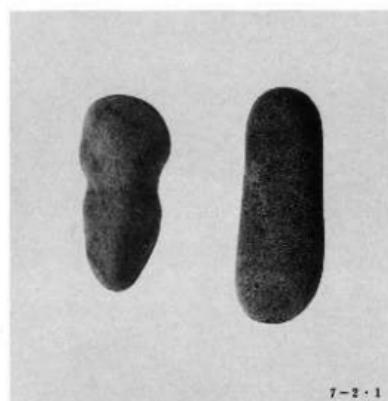


5-20

7 第3号住居址出土土器



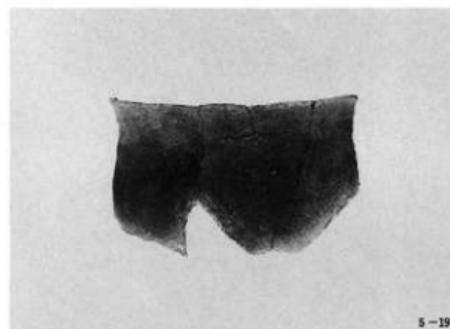
8 第3号住居址出土土器



1 第3号住居址出土石器



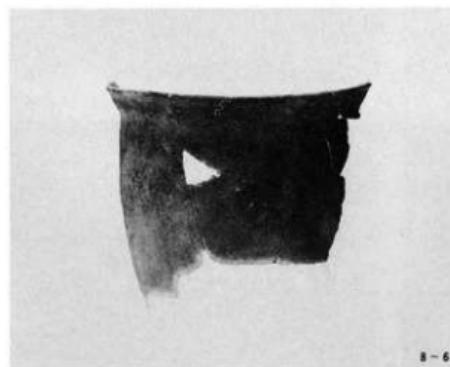
2 第3号住居址出土鐵器



3 第3号住居址出土土器



5 第6号住居址出土土器



4 第6号住居址出土土器



6 第6号住居址出土土器



7 第4号住居址出土土器

圖版
八
宮の上Ⅰ遺跡



10-12

1 第4号住居址出土土器



10-5

2 第4号住居址出土土器



10-20 (右上)

3 第4号住居址出土土器



10-16

4 第4号住居址出土墨青土器



14-9

5 第7号住居址出土土器



14-1

6 第7号住居址出土土器



23-17

7 第7号溝状遺構出土土器



23-15

8 第7号溝状遺構出土土器

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第17集

長野県佐久市宮の上遺跡群 宮の上 II 遺跡

1989年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 ほおづき書籍株式会社

佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第1集	『西裏・竹田峯』(TNU・NTM)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第2集	『池畠・西御堂』(YIT・YNM)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第3集	『芝 間』(ISM)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第4集	『新 司 II』(IIM)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第5集	『海上遺跡、下川原・光明寺』 (KYK・YSK)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第6集	『淡路・星敷前・西片ヶ丘・曲尾田・曲尾 I』 (KAB・KYM・KNU・KMOII・KMOI)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第7集	『高畠町・西大久保』(ATM・SNO)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第8集	『北西ノ久保』(IKK)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第9集	『梨 の 木』(KNN)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第10集	『菅田田・新町田・宮の上・中曾根・藤塚』 (HS・IIMII・YMM・INN・TPK)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第11集	『長 墓 古墳 群』(UNM)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第12集	『西 片 ぶ た』(KNN)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第13集	『舟 沢・馬 石』(NAZ・IET)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第14集	『沼の墓古墳群』(TNM)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第15集	『櫻巻・西大久保II・曲尾 II』 (SKM・SNOII・KMOII)
佐久埋蔵文化財調査センター	調査報告書 第16集	『荒田・上金井・東赤塚II』 (NAK・IHZ)

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第17集

薊沢 II ・ 琵琶坂 VI ・
長野県佐久市 梨の木II・宮の上II遺跡

1989年3月

編集者	佐久埋蔵文化財調査センター
発行者	長野県佐久市教育委員会
印刷所	ほおづき書籍株式会社
